

2020 年度  
オンライン授業アンケート報告書

2021 年 5 月

早稲田大学 大学総合研究センター

## 目次

はじめに.....	p. 4
各部の概要.....	p. 5
第1部 調査概要.....	p. 8
第1章 調査概要と対象について.....	p. 8
1-1. 調査概要	
1-2. 2020年度の教育学習環境	
第2部 学生.....	p. 12
第2章 オンライン授業の学習環境.....	p. 12
2-1. 履修地域	
2-2. 通信環境	
2-3. これまでの経験	
第3章 オンライン授業のメリット・デメリット.....	p. 21
3-1. メリット	
3-2. デメリット	
第4章 有益・不満のある授業の比較.....	p. 29
4-1. 満足・不満のある授業	
4-2. 授業区分	
4-3. クラス規模	
4-4. 授業形式	
4-5. 授業方法	
4-6. 動画の長さ	
第5章 秋学期の授業展開と有益な授業・不満のある授業.....	p. 36
5-1. 有益な授業	
5-2. 不満のある授業	
第6章 秋学期にかけての変化.....	p. 46
6-1. 対面授業の割合	
6-2. 満足度	
6-3. 対面授業・ブレンド型授業と満足度	
6-4. 学習時間の変化	
6-5. 学生生活の変化	
第7章 今後の対面・オンライン授業の割合.....	p. 56
7-1. 春学期の希望	
7-2. 秋学期の希望	

第8章 大学院生の学習環境.....	p. 60
8-1. 新型コロナウイルス感染症の影響	
8-2. オンライン授業のメリット・デメリット	
8-3. 満足度・学生生活の変化	
<b>第3部 教員.....</b>	<b>p. 64</b>
第9章 授業開始前の状況.....	p. 64
9-1. オンライン授業を実施した経験	
9-2. 授業に関する情報収集	
第10章 授業区分別の授業の実態.....	p. 67
10-1. 授業形態	
10-2. 授業活動	
(1) 外国語科目	
(2) 講義科目	
(3) 演習／ゼミ科目	
(4) 実習／実験／実技科目	
(5) 研究指導科目	
(6) 春・秋学期のオンライン授業での双方向活動の比較	
10-3. 評価と授業目標	
10-4. TA	
10-5. 今後の対面・オンライン授業の割合	
第11章 授業の満足度と今後の授業担当への意欲.....	p. 83
11-1. 授業の満足度	
11-2. 今後の授業担当への意欲	
<b>第4部 ティーチングアシスタント (TA) .....</b>	<b>p. 87</b>
第12章 TA改革とTAに対するサポート.....	p. 87
12-1. 早稲田大学におけるTAの区分および職務内容	
12-2. TA研修やサポートの状況	
第13章 TA業務および成長の実態.....	p. 90
13-1. TAに従事する動機	
13-2. TA業務に関する負担感	
13-3. TA業務を通じた成長	
13-4. TA業務に対する自己評価と今後の展望	
13-5. 小括	
総括.....	p. 104

## 執筆分担

第1部 遠藤健（大学総合研究センター）

第2部 遠藤健（大学総合研究センター）

第3部 阿部真由美（大学総合研究センター）

第4部 蔣妍（大学総合研究センター）、香西佳美（大学総合研究センター）

## はじめに

新型コロナウイルス感染症の影響を受け、世界中の大学で対面授業の実施が困難となり、大学を取り巻く環境は大きく変化しました。その中で、早稲田大学は、新型コロナウイルス感染症拡大への基本方針として、三つの使命と二つの原則を掲げました。三つの使命とは、(1)学生と教職員の健康と生命を護り、(2)どのような環境でも教育を提供し、(3)どんなに厳しい条件下でも研究を継続する、というものです。また、二つの原則とは、「想定される最大のダメージを最小にとどめる」という原理、国連のSDGsが掲げる「誰一人取り残さない」という理念です。

この方針に則り、首都圏出身ではない新入生や海外からの留学生に配慮し、2020年4月1日に早稲田大学は2020年度春学期のすべての授業を急遽オンラインで行うことにしました。

授業開始までの準備期間が十分に確保できていない状況で、常勤・非常勤の全ての教員にオンライン授業の実施をお願いすることは、困難であることは分かっていました。こうして急遽実施されたコロナ禍でのオンライン授業に対し、学生、教員、TAはそれぞれの立場でどのように準備し、実施し、どのような思いで取り組んだのでしょうか。大学史上稀有な出来事である全学におけるオンライン授業に関する取り組みを記録し、教訓として後の教育活動に活かさなくてはならないと考え、2020年5月11日のオンライン授業開始と同時に大学総合研究センターはアンケート作成を開始し、同年8月に「2020年度春学期オンライン授業アンケート」を実施しました。

大学総合研究センターは、2020年度秋学期開始前に春学期のアンケート結果を各学術院に共有するだけでなく、オンライン授業の改善を目的としてアンケート結果等に基づいた教員向けセミナー等を開催し、教育支援を推進してきました。また、ウィズ/ポストコロナ時代における授業指針である「オンライン授業・ハイブリッド授業の検討および運営に関する6箇条」を提案し、2021年度以降の授業方針(最大7割対面、3割オンライン)策定の参考資料とするなど、アンケート結果を活用しています。

2020年度秋学期はオンライン授業に加え、部分的に対面授業を再開しオンライン授業と対面授業を組み合わせた「ハイブリッド授業」を推進することになりました。この状況に鑑み、大学総合研究センターは、秋学期授業についてもアンケートを継続することとし、授業形態(対面・オンライン・ハイブリッド)に関わらず、春学期から秋学期における様々な変化に伴う課題等を把握することを目的として、2021年2月に「2020年秋学期オンライン授業アンケート」を実施しました。

本報告書では、この2回にわたるオンライン授業アンケートの結果を報告し、分析しています。教員がオンライン授業の改善に努めたこと、教員、学生双方ともオンライン授業に慣れてきたことが窺われる結果となっています。

コロナ禍において急速に普及した大学のオンライン授業は、対面授業の代替ではなく、対面授業を補完する一面もあり、活用方法次第で学修効果を高める可能性を秘めていることもアンケートの分析で分かりました。社会が大きく変化している今、新型コロナウイルスがもたらす大学教育の課題と機会の両方を見つめ直し、効果的な教育と幅広い学修機会の提供と確保、およびポストコロナ時代を見据えた教育改善に向けて、絶えず大学教育の改革を進めていく必要があります。本書がその一助となれば幸いです。

大学総合研究センター 所長  
須賀 晃一

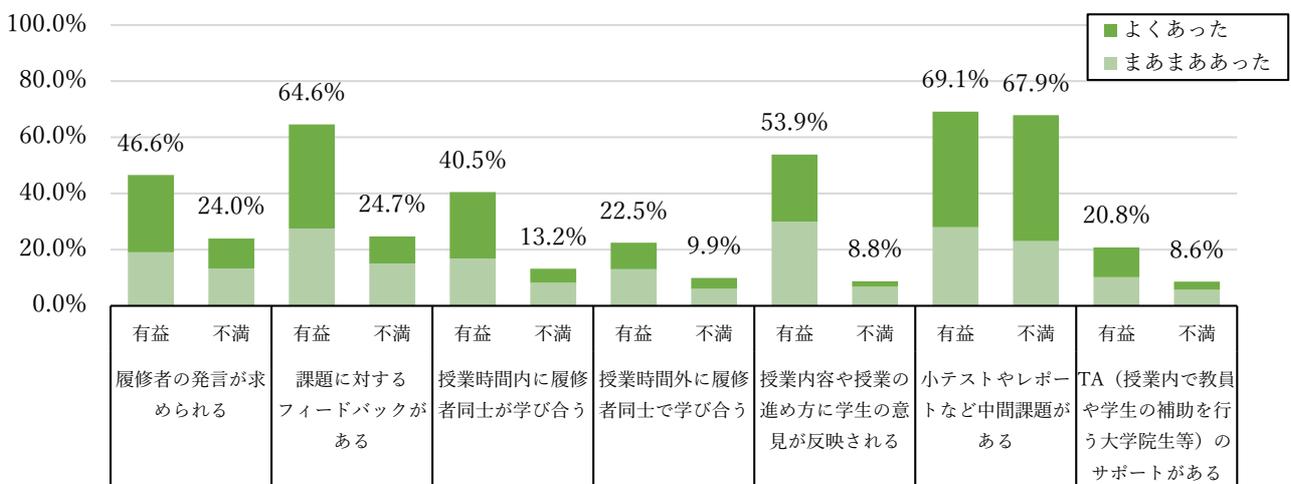
## 第2部 学生概要

第2部では学生を対象に行ったアンケート調査の結果を示した。調査は、春学期2020年8月、秋学期2月に全学生を対象に実施され、回収数は春学期15,093件（回収率：31.4%）、秋学期9,684件（回収率：20.6%）であった。調査項目は、新型コロナウイルス感染症拡大に伴う学習・生活への影響やオンライン・ハイブリッド授業の現状や課題などで構成されている。第2部では、学部生のオンライン授業の学習環境（第2章）、オンライン授業のメリット・デメリット（第3章）、満足・不満のある授業の比較（第4章）、秋学期の授業展開と有益な授業と不満のある授業（第5章）、秋学期にかけての変化（第6章）、今後の対面・オンライン授業の割合（第7章）、大学院生の学習・生活環境（第8章）について幅広く基礎的な集計結果等を中心に示す。

分析結果を総括すると、まず「学生生活の満足度」、「オンライン等の授業の満足度」、「授業以外の学生生活、サークル活動等の満足度」、「授業以外の大学サービスの満足度」すべてにおいて春学期から秋学期にかけて「満足」（「満足している」＋「まあまあ満足している」）の割合が増加した。特に「オンライン等の授業の満足度」については、「満足」が28.1%から49.1%へ大きく増加した。またオンライン授業の割合（対面授業の割合）と満足度の関係を見ると、相関関係は確認できなかった。

次に春学期の有益な授業と不満のある授業を比較すると（図概要－1）、有益な授業・不満のある授業で、「小テストやレポートなど中間課題がある」がともに肯定的な回答が高い。しかしながら、他の全ての項目については、有益な授業が不満な授業よりも高い結果となった。特に差が大きい項目として、「授業内容や授業の進め方に学生の意見が反映される」（53.9%＞8.8%）、「課題に対するフィードバックがある」（64.6%＞24.7%）、「授業時間内に履修者同士が学び合う」（40.5%＞13.2%）、「履修者の発言が求められる」（46.6%＞24.0%）があげられる。またこの傾向は秋学期もあまり変化がなかった。

最後に、「感染症リスクがなくなった場合」のオンライン授業の希望割合で秋学期に最も高かったのは、「3割」（16.6%）で、次に「5割」（16.2%）、「2割」（14.1%）の順に高かった。



図概要－1 有益な授業と不満のある授業の比較

### 第3部 教員概要

第3部では教員を対象に行ったアンケート調査の結果を示した。調査は、学生と同様に春学期終了後の2020年8月と秋学期終了後の2021年2月に、早稲田大学の非常勤講師を含めた全教員を対象として実施した。回収率は、春学期2,205件（回収率：49.6%）、秋学期1,429名（回収率：31.7%）であった。春学期には全学で授業がオンライン化されたことを受け、同学期に実施されたオンライン授業について尋ね、秋学期には対面授業が一部再開されたため、ハイブリッド型授業や対面授業を含めた秋学期の授業全体について調査した。第3部では、教員を対象としたこれらの両学期のアンケートの結果をもとに、学期開始前の状況（第9章）、授業区別の授業の実態（第10章）、そして担当した授業への満足度と今後のオンライン授業担当への意欲（第11章）について報告する。

分析結果を総括すると、春学期開始時点では教員の8割近くがオンライン授業を担当した経験がなかったものの、春学期に担当した授業に対する満足度は総じて高く、また、今後オンライン授業を担当したくないと回答した割合は12.2%に留まった。さらに秋学期には担当授業に対する満足度がさらに上昇し、同時に、オンライン授業やハイブリッド型授業を担当したくないと回答した割合も8.1%へと減少した。

また、授業区別に授業の実態を見てみると、春学期には外国語科目、演習／ゼミ科目、研究指導科目においてリアルタイム配信の割合が比較的高く、講義科目と実習／実験／実技科目ではオンデマンド配信が中心であった。授業活動のうち双方向活動は、オンデマンド配信よりリアルタイム配信において、より多く実施されていた。秋学期には、外国語科目と講義科目では大部分の授業が引き続きオンラインで行われたのに対し、演習／ゼミ科目と実習／実験／実技科目、研究指導科目では約4割の科目がハイブリッド型で実施された。ただし、ハイブリッド型授業を導入した科目であっても、学期中の対面授業の回数の割合は5割未満が多く、オンライン授業が中心であったものと推察される。なお、オンライン授業での双方向活動の割合は、ほとんどの授業区分のリアルタイム配信・オンデマンド配信両方の形態において春学期より若干増加した。

最後に、教育効果の高い対面授業とオンライン授業の割合について、秋学期のアンケートで尋ねた結果を示す。対面授業が10割（すべて対面授業）と回答したのは、演習／ゼミ科目（27.4%）、実習／実験／実技科目（34.0%）、研究指導科目（27.3%）が30%前後であり、外国語科目（14.7%）と講義科目（12.6%）は10%強にとどまった。逆に0割（すべてオンライン授業）と回答したものは、どの授業区分も10%未満だった。また、教育効果が高いと思われる授業形態は対面授業とオンライン授業の組み合わせとする回答が多かったが、全体として対面授業の割合のほうが高く、特に実習／実験／実技科目、次いで演習／ゼミ科目と研究指導科目では、外国語科目や講義科目に比べて、理想とする対面授業の割合が高かった。

## 第4部 TA概要

第4部では、TAを対象におこなったアンケート調査の結果を示した。本調査は、春学期および秋学期の全TAを対象に、次の2つを目的として実施された。①TAがオンライン授業等を補助するうえで直面した課題を把握すること、②今後の支援策等を検討するうえでの参考にすること。調査時期は春学期2020年8月3日～2020年8月29日、秋学期2021年2月2日～2021年2月24日であった。回答件数は、春学期899名（回収率：43.9%）、秋学期271名（回収率：29.5%）であった。

調査項目は、目的①に対応するものは、TA業務全般に関する質問、ICT環境に関する質問、業務遂行全般の負担感に関する質問、自己評価と今後の展望に関する質問であった。目的②に対応するものは、TAに従事する動機に関する質問、成長に関する質問、研修・セミナーの参加率と有用性に関する質問であった。これに加え、「TA業務を経験して、良かったと思うこと、改善が必要と思うことを自由にお書きください」「今後大学総合研究センターからどのようなサポートを受けたいと思いますか」などの自由記述を設けた。なお、TA業務は各大学の文脈依存性が高いため、本報告書では、他大学の参考となりうる項目として、TAに従事する動機、負担感、成長と自己評価を取り出し、分析をおこなった。主な結果は以下の通りである。

- (1) TA業務に従事する動機は、多いものから順に「指導教員に依頼されたから」（62.8%）、「授業担当教員に依頼されたから」（48.1%）、「大学でのアルバイトをしたいから」（39.1%）、「授業内容に対して興味・関心を持っているから」（33.0%）、「専門分野の知識やスキルを深めたいからから」（29.0%）となっている。また、カリキュラムTAは「自身の教育力を形成・向上させたいから」が最も高い割合であった。
- (2) TA業務の負担感が大きいと回答したTAの割合は、授業TAは50%未満であったが、高度授業TAは50%以上であった。具体的には、授業TAでは、春学期が45.4%、秋学期が38.4%であった。高度授業TAでは、春学期が54.7%、秋学期が66.1%であった。負担感が大きいと感じた理由は、春学期および秋学期ともに回答件数が多いものから順に「オンライン授業の移行に伴い、業務量が増えたから」、「学生とのコミュニケーションが取りづらいから」であった。
- (3) TA業務を通して成長に関して、「授業内容の興味・関心がより深まった」、「授業運営に関する経験ができた」、「教職員と深く関わることができた」は、春学期と秋学期のいずれにおいても高い割合であった。また、秋学期の高度授業TAでは、「履修者と深く関わることができた」、「教育力の形成・向上につながった」も高い割合であった。
- (4) 「自分が担当しているTA業務に満足している」と肯定的に回答した割合は、春学期は69.3%であり、秋学期は78.9%であった。

## 第1部 調査概要

### 第1章 調査概要と対象について

#### 1-1. 調査概要

調査は、表1-1～表1-3の通り、全学生・全教員・全TAを対象に春学期末、秋学期末にオンラインアンケートツール、クアルトリクスを使用して実施された。具体的な対象者数、回答数、回収率は表中に併記した。大変な状況のなか回答していただいた学生・教員・TAの皆様には感謝申し上げたい。

表1-1 学生対象調査の概要

	春学期	秋学期
調査期間	2020年8月3日～22日	2021年2月2日～2月17日
対象者数	48,119	46,935
回答数	15,093	9,684
回収率	31.4%	20.6%

表1-2 教員対象調査の概要

	春学期	秋学期
調査期間	2020年8月3日～22日	2021年2月2日～2月24日
対象者数	4,445	4,505
回答数	2,205	1,429
回収率	49.6%	31.7%

表1-3 TA対象調査の概要

	春学期	秋学期
調査期間	2020年8月3日～29日	2021年2月2日～2月24日
対象者数	2,047	920
回答数	899	271
回収率	43.9%	29.5%

## 1-2. 2020年度の教育学習環境

ここでは、早稲田大学の教育学習環境に関する基本情報について、国内と早稲田大学のおもな動向を表1-4に示す。周知の通り、2020年度初めから徐々に新型コロナウイルス感染症が国内に拡大し、早稲田大学では、4月の緊急事態宣言を受けキャンパスの立入禁止となり、5月11日から全面的なオンライン授業が実施された。5月下旬には緊急事態宣言は解除されたものの、2021年1月8日～2月7日には東京、神奈川、埼玉、千葉に2度目の緊急事態宣言が発出された。

春学期中は学生のキャンパスへの入構や課外活動等は制限のある状況が続いた。海外からの渡航制限や国内の地域間移動の自粛要請もあり、春学期末の調査時点（2020年8月）で、首都圏以外の国内で授業を受けていた学部学生は14.7%、海外からは2.1%と16.8%程度は、キャンパスからも離れて授業を受けていた（図1-1）。また秋学期末の調査時点（2021年2月）では首都圏以外の国内で授業を受けていた学部学生は8.0%、海外からは2.4%と10.4%程度は、キャンパスからも離れて授業を受けていた。

一方、教員のそれまでのオンライン授業について示すと（図1-2）、春学期開始前にオンライン授業を経験していた割合は20.9%であり、79.1%は初めてのオンライン授業を実施することとなった。オンライン授業アンケートは、春学期末の8月と秋学期末の2月に実施され、これまでにない例外的な状況下における学生・教員・TAの実態や課題を把握する貴重なデータとなった。2021年度においても、4月25日から5月11日まで東京、大阪、京都、兵庫に緊急事態宣言が発出し、その後、対象地域も拡大、期間もさらに延長し、予断を許さない状況が続いている。

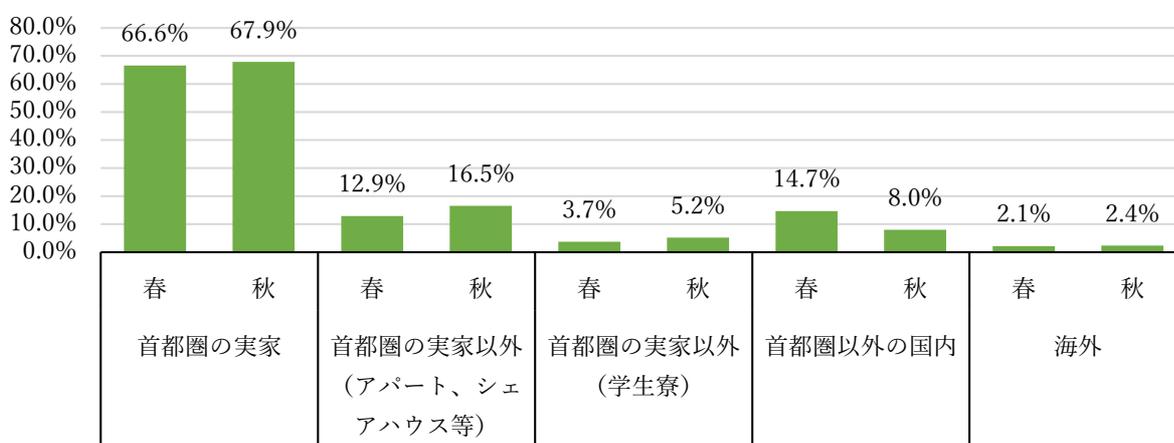
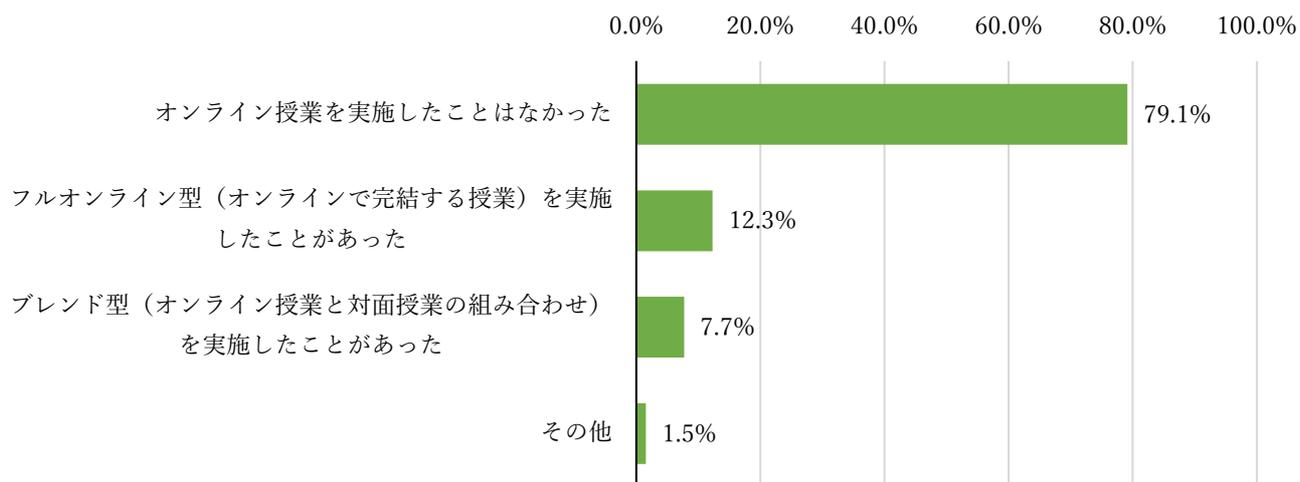


図1-1 履修地域・春秋別



\* 「オンライン授業を実施したことはなかった」以外、複数回答可

図 1 - 2 春学期開始前のオンライン授業実施経験

表 1-4 2020 年度における早稲田大学の教育学習環境を取り巻く状況

国内	早稲田大学
1月16日：厚生労働省「新型コロナウイルスに関連した肺炎の患者の発生について（1例目）」国内初の感染報告	
	2月27日：「2019年度卒業式・大学院学位授与式および2020年度入学式の中止について」卒業式・大学院学位授与式（2020年3月25日、26日）および2020年度入学式（2020年4月1日、2日）を中止に
	4月2日：「2020年度の春学期の授業の進め方について」2020年度春学期（セメスター・/クォーター）の授業は、原則としてインターネットを通してオンラインに
	4月6日：「早稲田大学における在宅研究・在宅勤務への移行の計画—それに伴うキャンパスの立入禁止について」学生・学外者の各キャンパスへの立入禁止
4月7日：東京、神奈川、埼玉、千葉、大阪、兵庫、福岡に緊急事態宣言（4月16日に全国に拡大）。	
4月10日：東京都4月11日（土）から5月6日（水）までの期間、大学および学校などの教育機関に対して、休業を要請	
	4月14日：「春学期の全面的なオンライン授業移行に伴う課外活動自粛等の継続について」春学期修了日（8月1日）まで学内外における課外活動の自粛等
	5月11日：春学期授業開始
5月25日：首都圏1都3県の緊急事態宣言解除	
	5月26日：「早稲田大学における構内立入禁止の段階的解除について—今後の方針と考え方」6月1日より入構制限の緩和
	6月22日：「早稲田大学におけるキャンパスの門扉の開放について」6月22日より門扉の開放
	6月26日：「課外活動自粛等継続および今後の段階的な再開について」課外活動の限定的な再開や関連施設の利用が可能に
	7月15日：「2020年度秋学期授業について」教室、教場での授業を一部再開
	8月3日～8月29日：春学期オンライン授業アンケート調査実施
	9月14日：「秋学期以降の課外活動の段階的な再開方針について」課外活動における制限を緩和
	11月22日：「秋学期後半の授業のあり方について」ゼミ以外の科目でも一部は対面での授業を再開
10月16日：文部科学省 対面授業が半数未満の大学名公表を発表	
	2021年1月5日：「緊急事態宣言の発出に際して」11月23日以降に行ってきた対面とオンラインを併用する授業の形をそのまま継続
	1月6日：「1月8日（金）以降の課外活動の禁止および学生会館の臨時閉館について」緊急事態宣言が解除されるまで、原則オンラインでの活動以外は禁止に
1月8日～2月7日：東京、神奈川、埼玉、千葉に緊急事態宣言（1月13日に大阪、京都、兵庫、愛知、岐阜、福岡、栃木に拡大）。	
	2月3日～2月24日：秋学期オンライン授業アンケート調査実施

## 第2部 学生

### 第2章 オンライン授業の学習環境

#### 2-1. 履修地域

第2章では、学生のオンライン授業の学習環境について分析結果を示す。まず、履修地域を春秋別に整理した結果（図2-1）から、春秋通じて「首都圏の実家」で授業を受ける学生が、7割弱と最も多かった。春秋の違いについては、春学期では、「首都圏以外の国内」で授業を受けていた学生が14.7%おり、秋学期には8.0%に減少した。その分、秋学期には「首都圏の実家以外」が12.9%から16.5%へやや増加した。移動自粛の緩和等によって上京してきた学生と考えられる。また、「海外」の割合は春学期2.1%、秋学期2.4%と大きな変化はなかった。

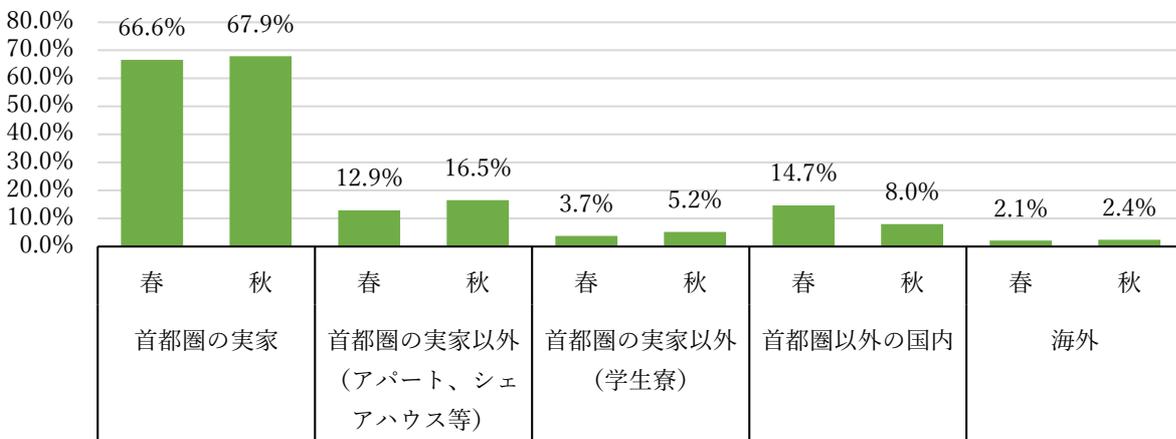


図2-1 履修地域・春秋別

次に、学年別により細かく見ると（図2-2）、1年生の春学期において「首都圏以外の国内」（20.6%）が比較的多かったものの、秋学期には7.2%に大きく減少し、「首都圏の実家以外」（11.6%）が増加した。同様の傾向は、上位学年になるとあまり見られない。

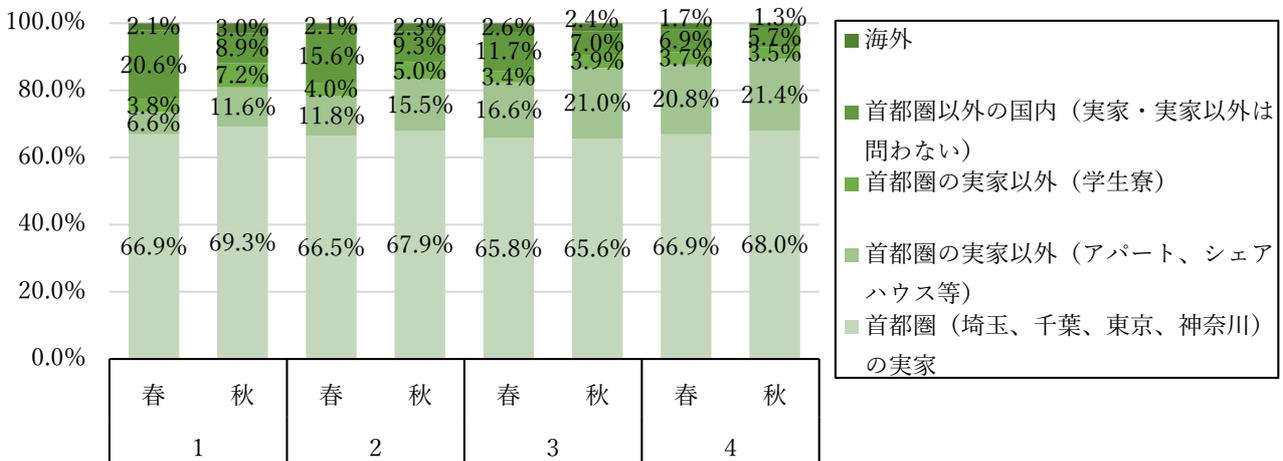


図2-2 履修地域・春秋・学年別

具体的に、履修場所について秋学期のみ尋ねた結果が図2-3である。回答は複数回答となっており、全体的な傾向としては、「自宅」(99.3%)が最も多く、次に「早稲田大学のキャンパス」(32.6%)、「喫茶店・インターネット」(14.9%)、「公共の図書館やフリースペース」(5.3%)が続いた。これを学部文理別に示したのが図2-4である。両者の違いとして、理系では、文系と比較して「早稲田大学のキャンパス」が多い(42.3%>29.8%)。また文系では、理系と比較して「喫茶店・インターネットカフェ」がやや多い(16.0%>10.9%)。理系では、実験・実習といった対面をより必要とする授業が多いことによるのかもしれない。

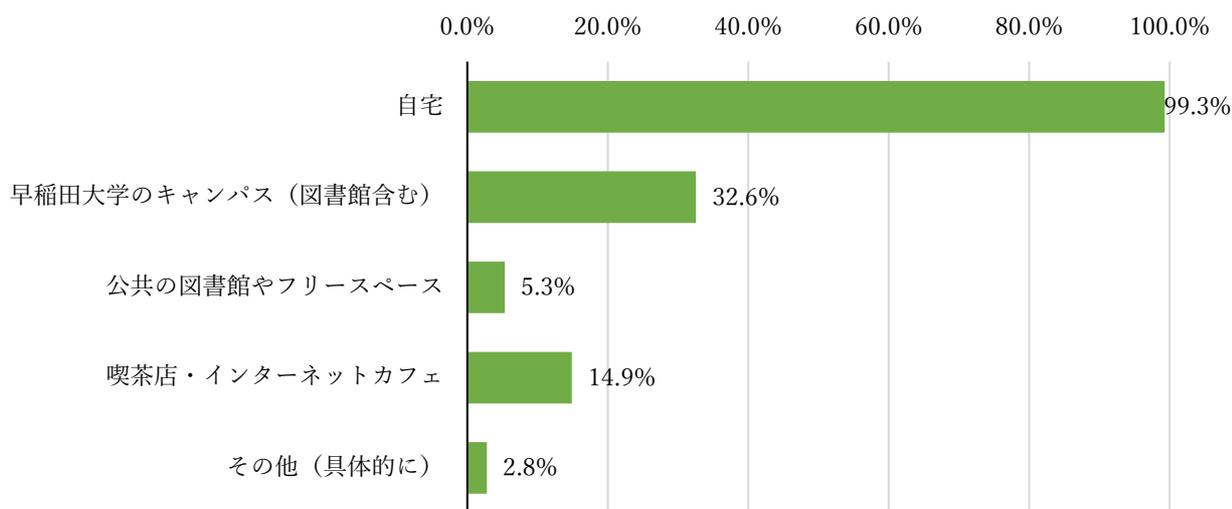


図2-3 履修場所 (秋学期)

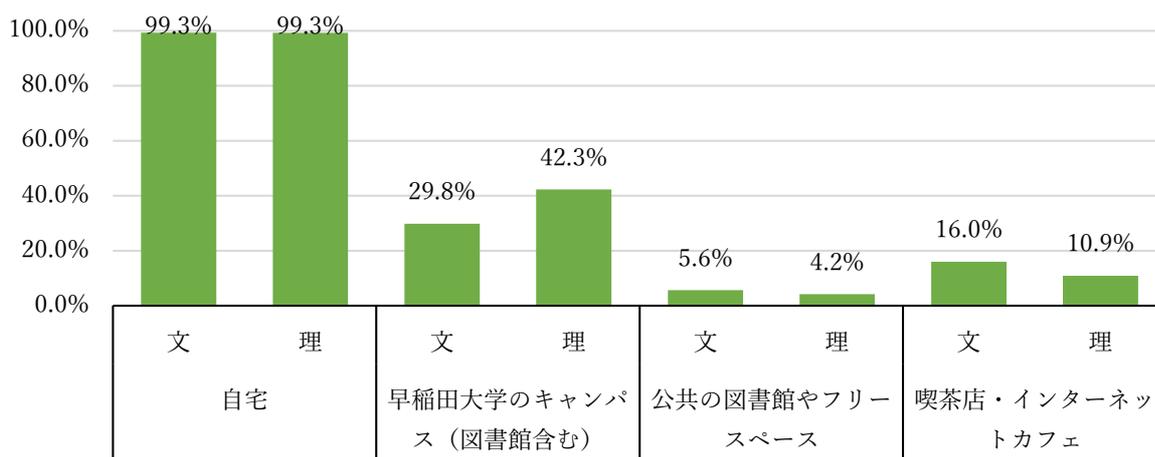


図2-4 履修場所・文理別 (秋学期)

さらに、学年別で整理すると(図2-5)、違いが見られるのは、「早稲田大学のキャンパス」である。1年生では、40.5%と最も多く、2年生では逆に25.6%と学年間では最も低かった。この結果は、どのようにして生じていたのか、解釈には各学部の対応と併せて解釈が必要となりそうである。

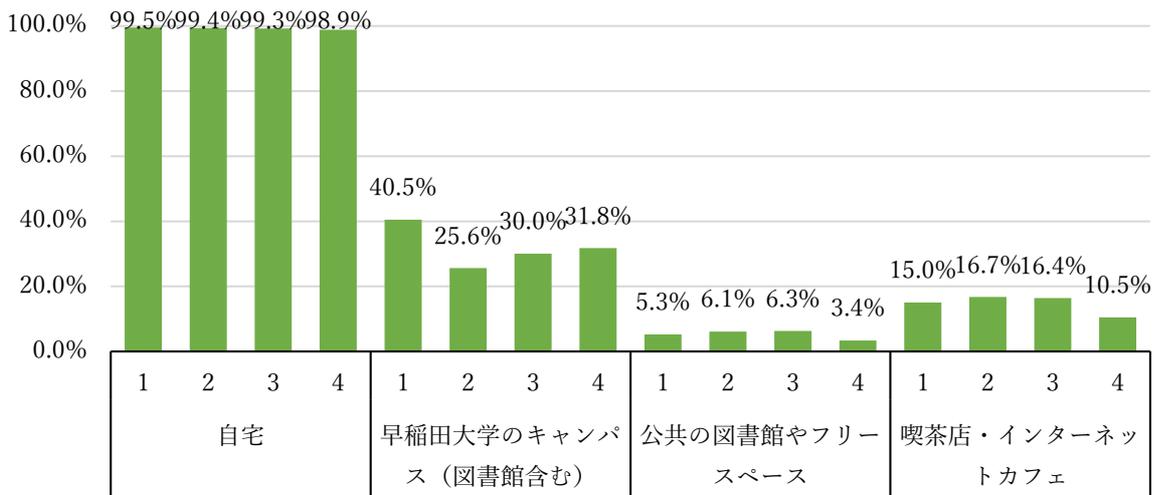


図 2-5 履修場所・学年別 (秋学期)

## 2-2. 通信環境

次に、学生の通信環境について示す。まず、学生が使用していたデバイスについて見ると (図 2-6)、春秋通じて、「自身のノート PC」、「スマートフォン」、「タブレット」、「自身のデスクトップ PC」、「家族等共用の PC」、「早稲田大学からの貸与 PC」の順に高かった。秋学期にかけては、「家族等共用の PC」が 5.0%から 3.4%、「スマートフォン」が 47.5%から 45.6%に微減していた。より学習しやすいデバイスの整備が秋学期には進んだものと考えられる。

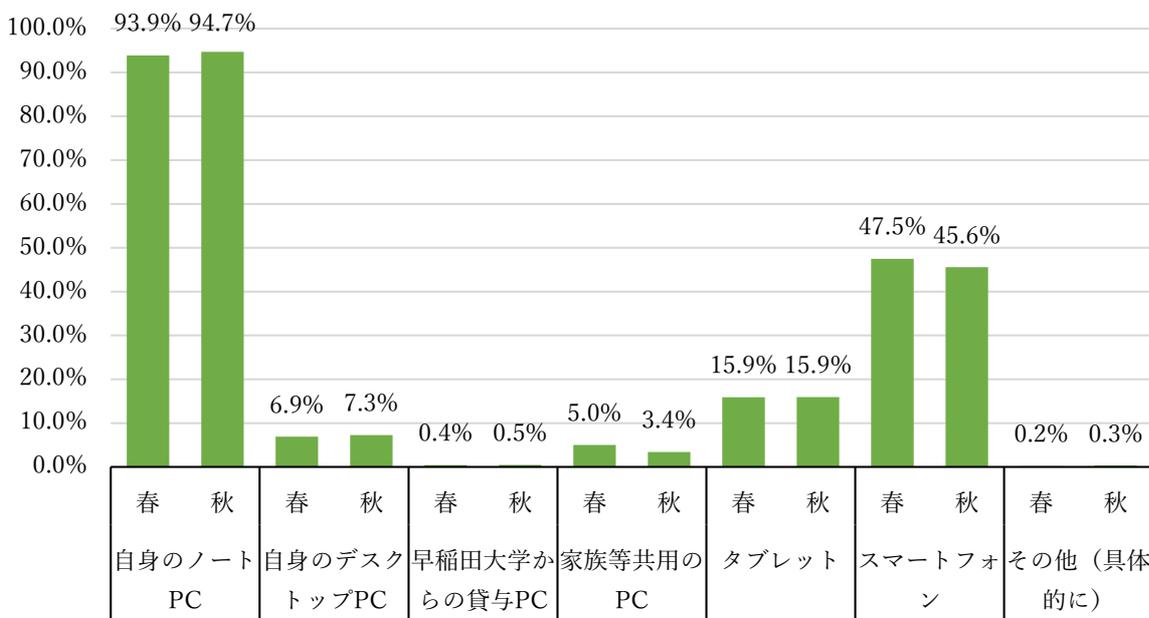


図 2-6 使用したデバイス・春秋別

このデバイスの使用状況について、学年別に示す。まず春学期（図2-7）において、学年別に違いのある項目として、「スマートフォン」と「タブレット」があげられる。「スマートフォン」は、2年生の使用状況が高く（53.8%）、最も低い1年生（43.1%）とやや差が見られた。また「タブレット」は、3年生で使用状況が高く（20.3%）、最も低い1年生（13.4%）とやや差が見られた。上位学年では、自身のノートPCに加えマルチデバイスで履修していたことが分かる。一方、1年生では、「家族等共用のPC」が他学年と比較して最も高く（6.6%）、オンライン授業の準備期間があまりない中での対応の結果と解釈できる。

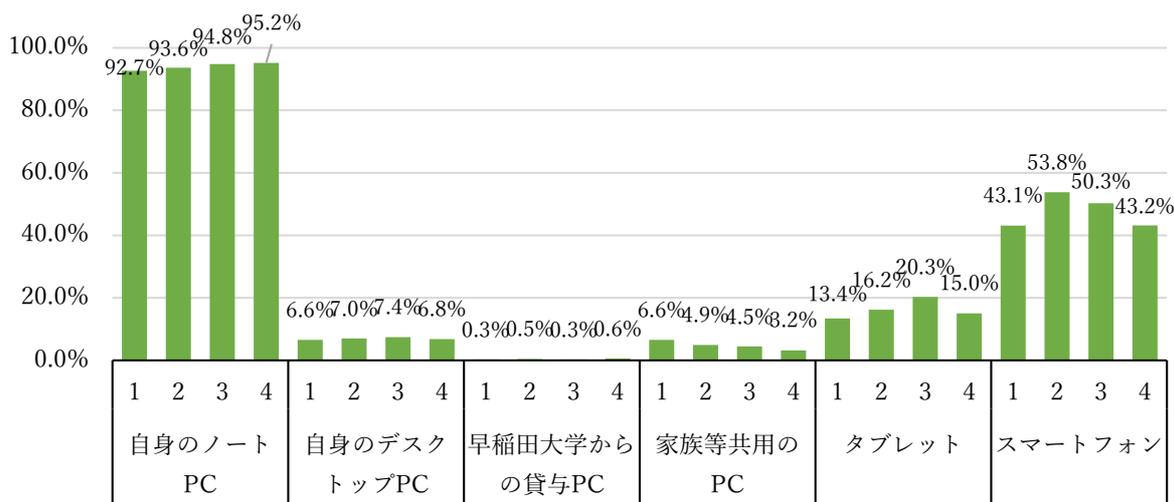


図2-7 使用したデバイス・学年別（春学期）

学年間の違いを秋学期において同項目で比較した（図2-8）。全体の傾向で述べた通り、各学年において、「家族等共用のPC」が微減している。

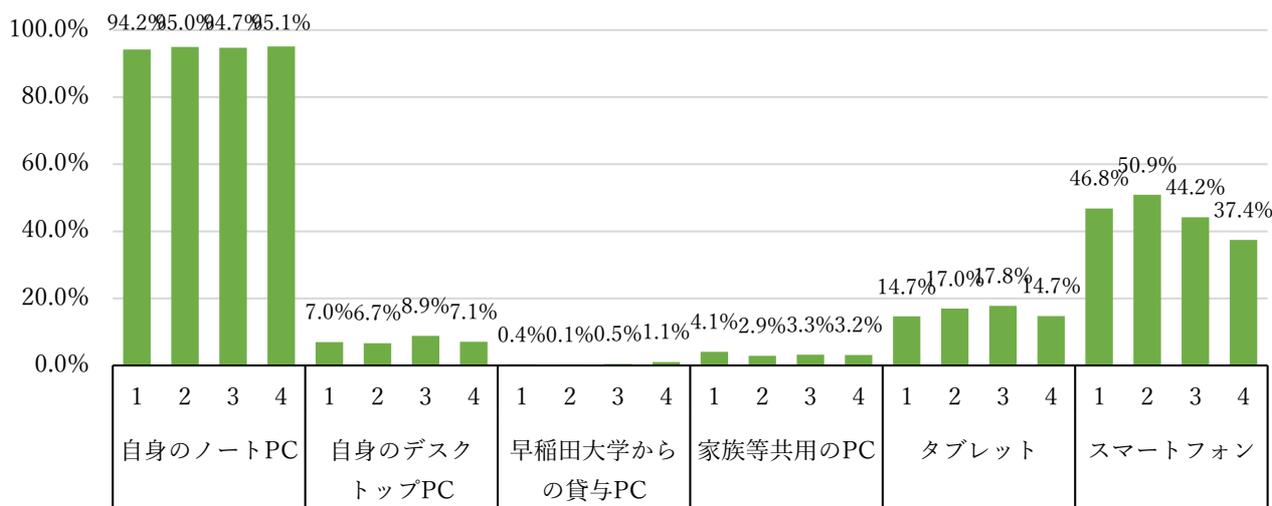


図2-8 使用したデバイス学年別（秋学期）

次に、学習を支援する各種サービスの利活用状況について示す（図2-9）。春秋の違いとして最も顕著なのが、「Learn Anywhere」である。春学期には21.9%と5人に1人は利用している状況であった。秋学期には、11.1%へと減少した。次に利用が比較的に見られたのは、「早稲田大学のモバイルWiFiルーターの無償貸与」、「早稲田大学図書館の郵送サービス」であった。双方、秋学期の利用が若干高い結果となった。

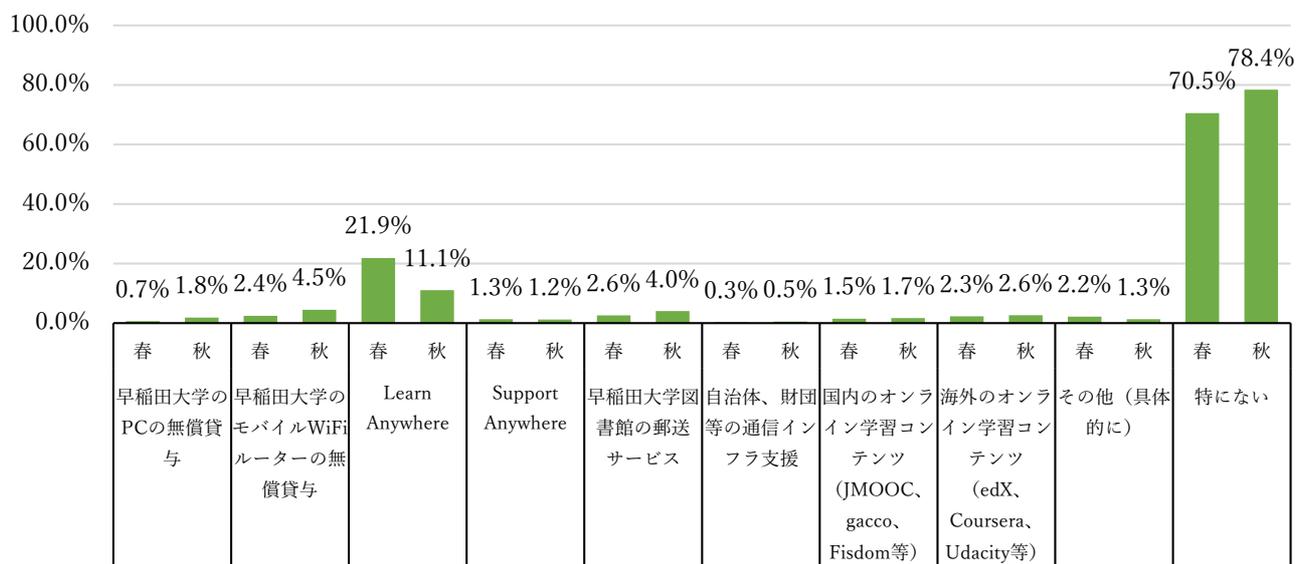


図2-9 利用したサービス・春秋別

サービスについて比較的に利用されていた項目を抜き出し、学年別に比較すると春学期は図2-10のようになった。学年間で差が顕著であったのは、「Learn Anywhere」であり、1年生（30.2%）の利用率が高く、学年が進行するにつれ減少する。また、「早稲田大学図書館の郵送サービス」については4年生が最も高く（3.9%）、卒業研究などに活用したものと推察される。

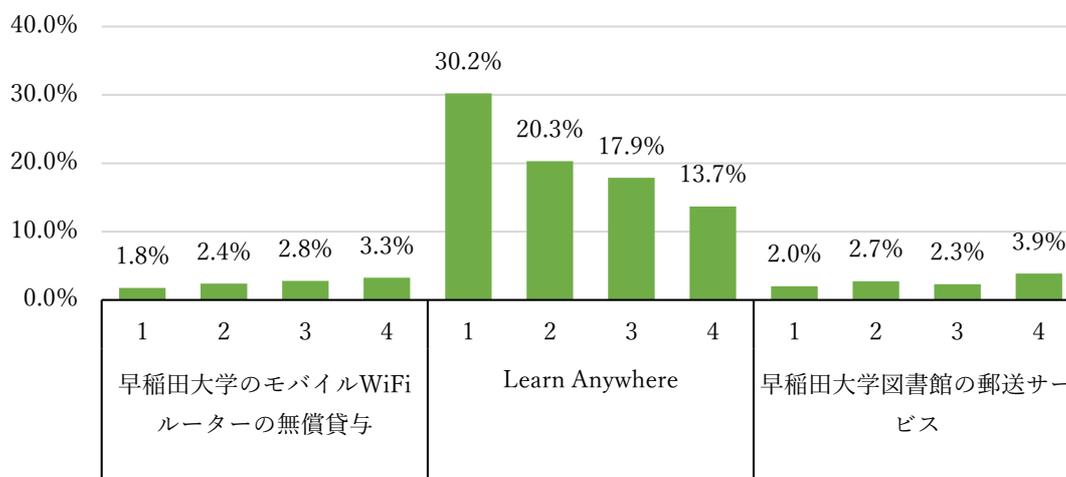


図2-10 利用したサービス・学年別（春学期）

一方、秋学期においても学年別に同様の傾向がみられる。「Learn Anywhere」は1年生が最も高く(14.6%)、「早稲田大学図書館の郵送サービス」は4年生が最も高い結果(5.5%)となった。

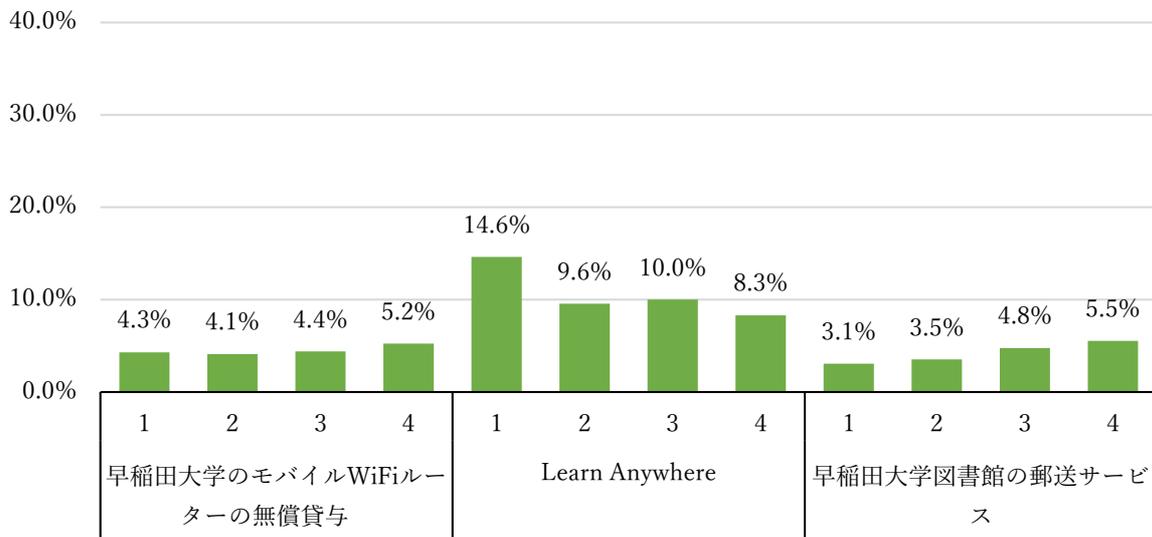


図2-11 利用したサービス・学年別(秋学期)

続いて通信状況について示す(図2-12)。春学期から秋学期にかけて「音声が届かない」、「フリーズする」、「設定が適切ではなく、授業に入室できなかった」すべての項目において状況が良くなっている。ただし、秋学期においても「音声が届かない」がよくある割合(「よくあった」+「まあまああった」)は49.6%、「フリーズする」は41.0%であり、それなりの学生が通信状況のよくない経験をしている。「設定が適切ではなく、授業に入室できなかった」は、よくある割合が20.2%から13.7%に減少している。

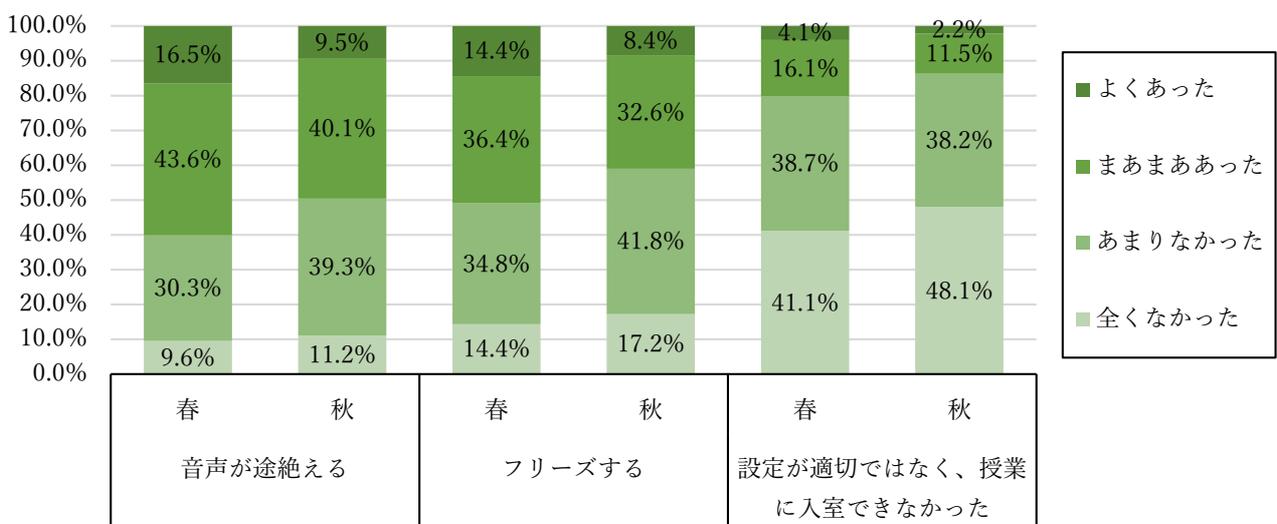


図2-12 通信状況・春秋別

通信状況について学年間での違いを示す。春学期（図2-13）において、「音声が届かない」、「フリーズする」によくあると回答した割合は、1年生が最も高く、学年が進行するにつれて減少する傾向にある。また、「設定が適切ではなく、授業に入室できなかった」は1年生（21.2%）と2年生（21.1%）、3年生（20.4%）がそれぞれ同程度となった。

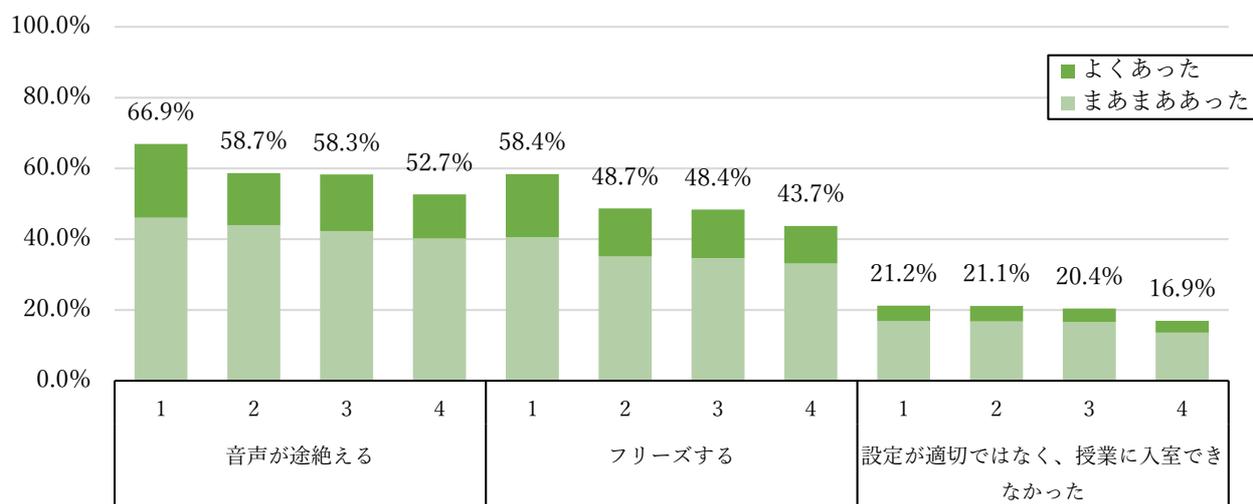


図2-13 通信状況・学年別（春学期）

秋学期（図2-14）において、先述した通り全体的によくあると回答した割合は減少したものの、「音声が届かない」、「フリーズする」によくあると回答した割合は、1年生が最も高い。また、「設定が適切ではなく、授業に入室できなかった」は、2年生が最も高い（15.4%）結果となった。

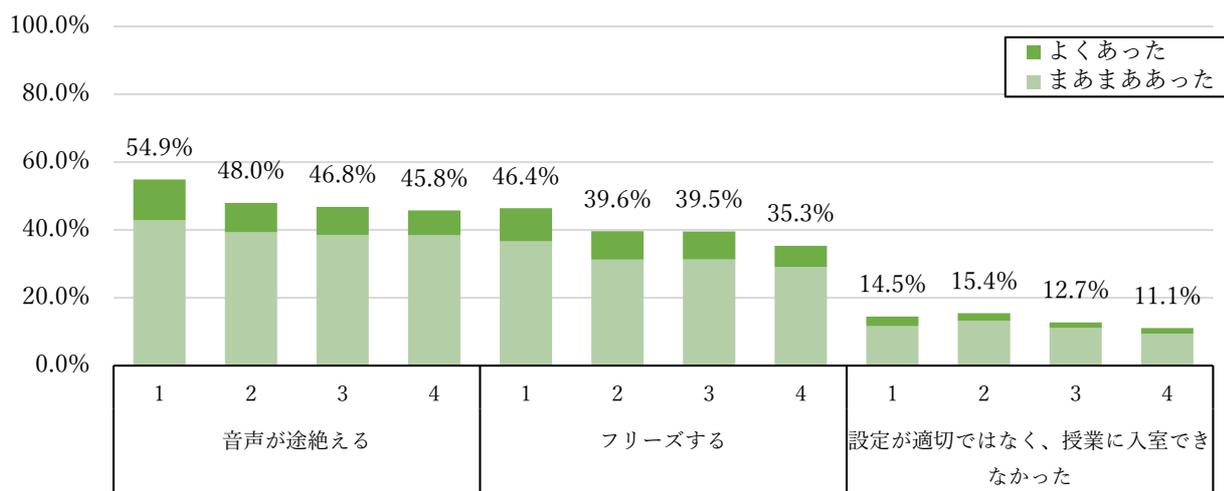


図2-14 通信状況・学年別（秋学期）

### 2-3. これまでの経験

オンライン授業にあたって、ICTスキルについて、これまでの経験の回答状況を示す（図2-15）。まず、大学生として基本的なスキルとなる「ワードやエクセルを使用する」や「PCまたはタブレット、スマートフォンで課題に取り組む」で多い割合（「どちらかと言えば、多かった」＋「多かった」）は、50～60%程度である。一方で、「動画を編集する」、「オンラインミーティングツールを使用してコミュニケーションを取る」は前者の多い割合は8.0%、後者は21.8%とあまり高くない結果となった。「オンラインミーティングツールを使用してコミュニケーションを取る」は「少なかった」は66.2%であり、このなかの多くの学生は、オンラインミーティングツール自体が初めての経験であったと推察される。また、これまで「情報倫理について学ぶ」経験は「多かった」割合は22.6%に留まった。

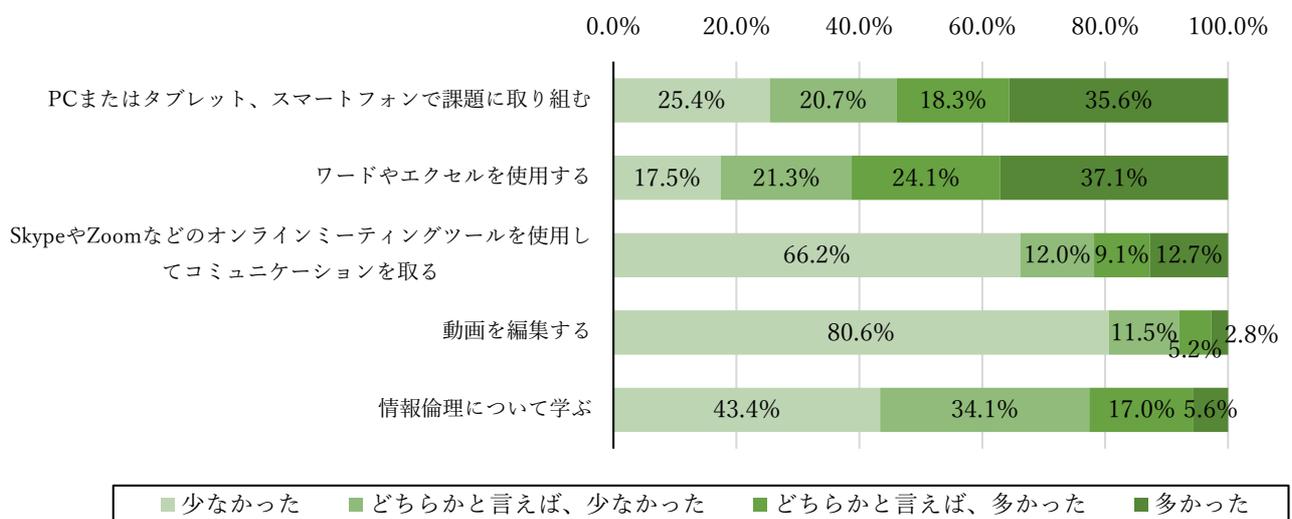


図2-15 これまでの経験（春学期）

これまでの経験を学年間で比較すると（図2-19）、予想される通り、上位学年ほど割合が高くなる傾向にある。とりわけ「ワードやエクセルを使用する」や「PCまたはタブレット、スマートフォンで課題に取り組む」において、その傾向が顕著になる。1年生は調査8月の時点では「PCまたはタブレット、スマートフォンで課題に取り組む」（28.9%）、「ワードやエクセルを使用する」（33.5%）といった項目は相対的に低い結果となった。他方で、「情報倫理について学ぶ」については1年生（27.4%）が最も高い結果となった。背景としては、初年次のカリキュラムで学んでいることが考えられる。

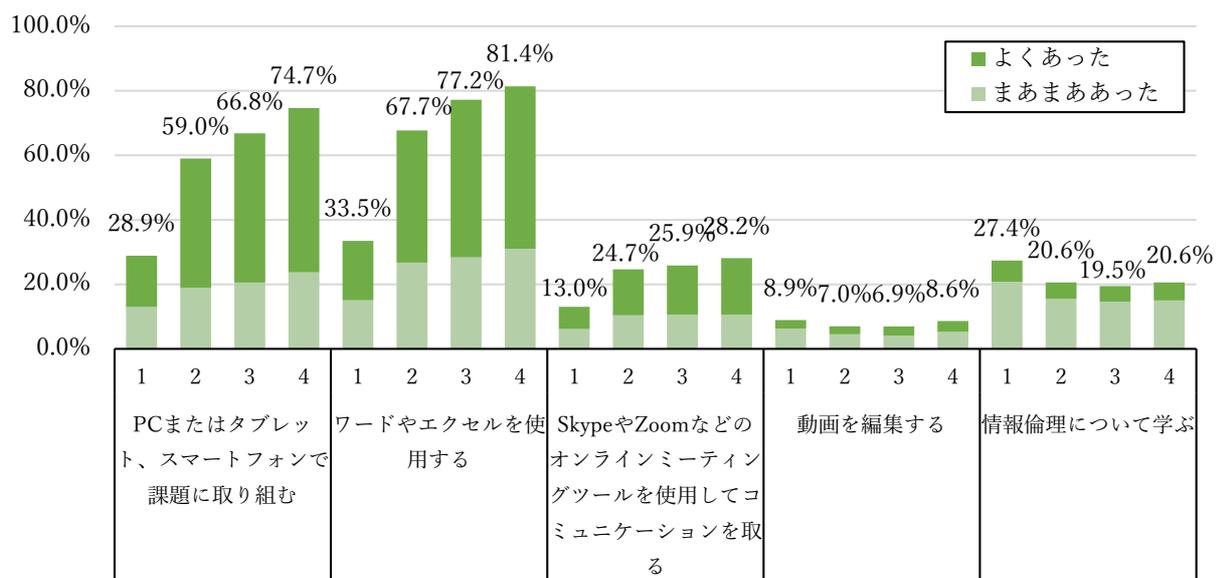


図2-19 これまでの経験・学年別（春学期）

### 第3章 オンライン授業のメリット・デメリット

#### 3-1. メリット

第3章では、オンライン授業のメリット・デメリットについて回答状況を示していく。まずメリット（図3-1）について、比較的高いのは「自宅で学習できる」、「自分のペースで学習できる」、「通学時間を学習に有効活用できる」、「復習が何度でもできる」であった。「通学時間を学習に有効活用できる」は春学期（55.2%）と秋学期（54.5%）は同程度であるものの、「自宅で学習できる」、「自分のペースで学習できる」、「復習が何度でもできる」については秋学期の方がより高くなっている。また「対面授業より集中できる」は春秋で20%程度となった。

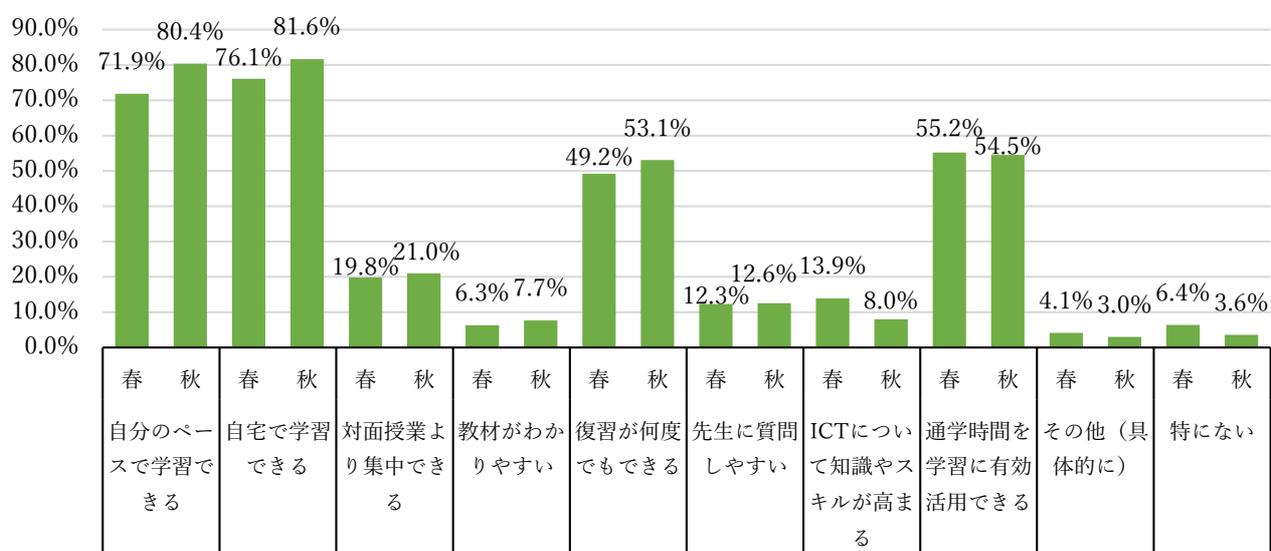


図3-1 オンライン授業のメリット・春秋別

この春学期の結果を文理別に示したのが図3-2である。特徴的なのは、文系と比較して理系は「復習が何度でもできる」（59.2%>46.5%）、「通学時間を学習に有効活用できる」（58.8%>54.2%）、「対面授業

より集中できる」(22.3%>19.2%)が高い結果であった。

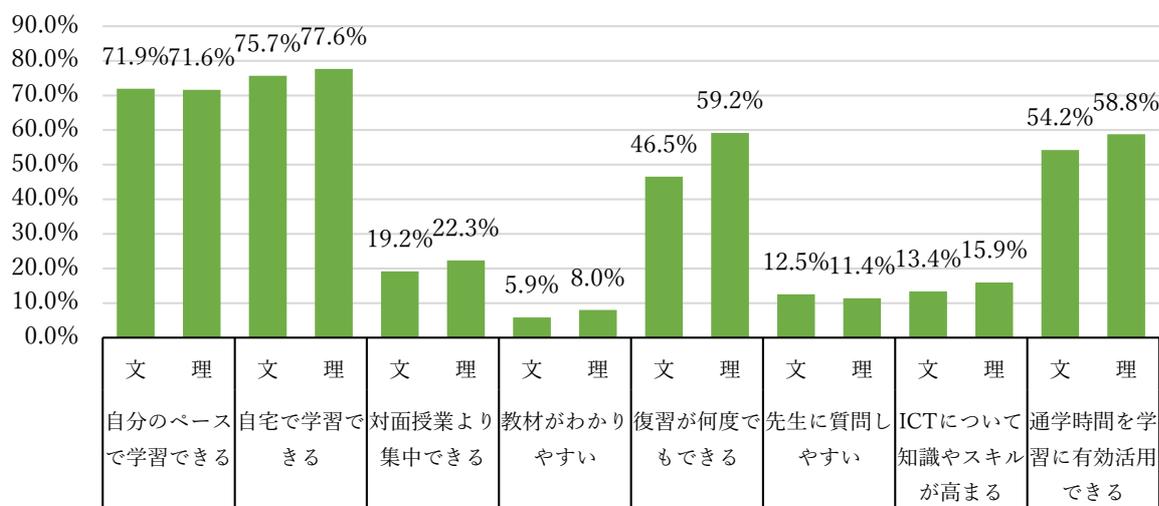


図3-2 オンライン授業のメリット・文理別（春学期）

学年別に見ると（図3-3）、「自分のペースで学習できる」、「自宅で学習できる」、「対面授業より集中できる」、「復習が何度でもできる」、「先生に質問しやすい」、「通学時間を学習に有効活用できる」において2・3年生で1年生より比較的高い結果となった。一方、1年生は、「ICTについて知識やスキルが高まる」（18.8%）において他学年より高い傾向にあった。

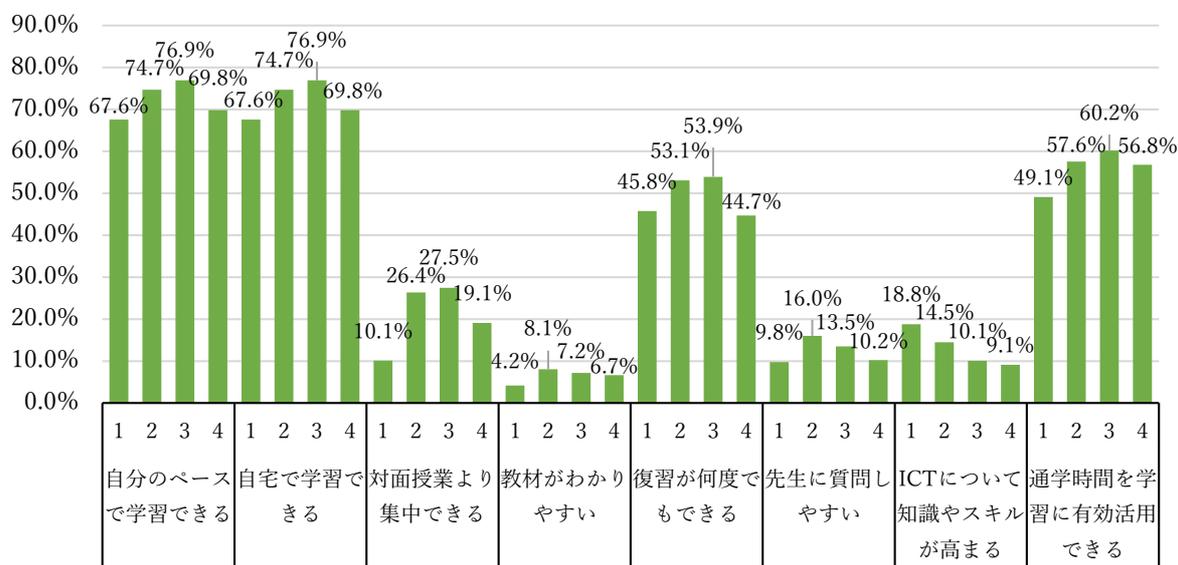


図3-3 オンライン授業のメリット・学年別（春学期）

秋学期にも同様に、文理別（図3-4）、学年別（図3-5）に示すと、ほぼ同様の傾向であった。先述した通り、「自宅で学習できる」、「自分のペースで学習できる」、「復習が何度でもできる」については文理ともに秋学期の方がより高くなっている。

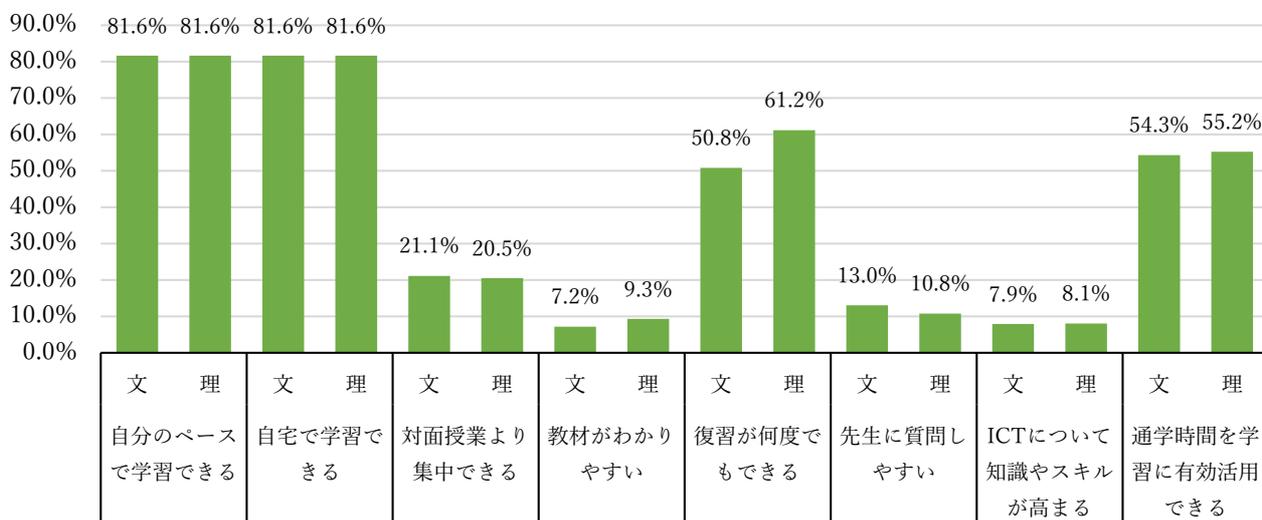


図3-4 オンライン授業のメリット・文理別（秋学期）

学年別について見ても、春学期と傾向はあまり変わらない。全体的に各項目の割合が高くなる傾向にあり、2・3年生で「自分のペースで学習できる」、「自宅で学習できる」、「対面授業より集中できる」、「復習が何度でもできる」、「先生に質問しやすい」、「通学時間を学習に有効活用できる」が高い傾向にある。

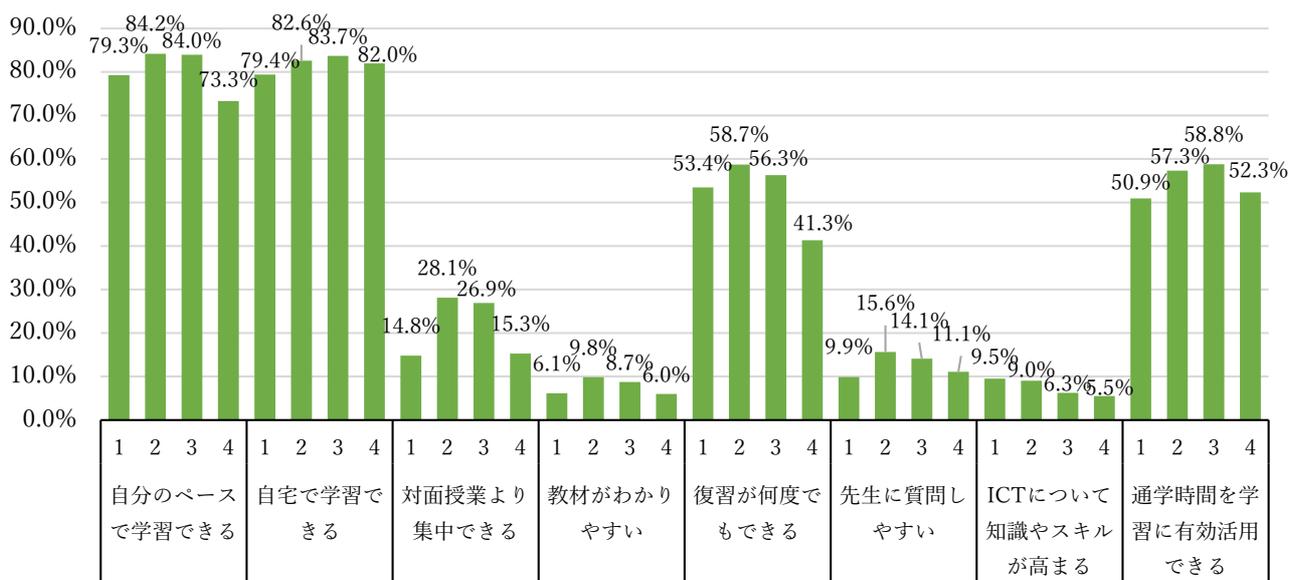


図3-5 オンライン授業のメリット・学年別（秋学期）

### 3-2. デメリット

では、オンライン授業のデメリットはどのように認識されていたのだろうか。春学期と秋学期すべての項目を比較した(図3-6)。まず、春学期にデメリットとしてあげられたのは「課題が多い」(71.0%)や「目や耳、肩など身体的な疲れをより感じる」(65.5%)、「友達と一緒に学べず孤立感を感じる」(61.5%)などであった。秋学期においては、「目や耳、肩など身体的な疲れをより感じる」(55.9%)、「友達と一緒に学べず孤立感を感じる」(54.1%)、「課題が多い」(51.3%)などであった。「課題が多い」は春学期から秋学期にかけて19.7%減少し、その他にも「授業の方法が様々でストレスに感じた」(13.2%減少)、「課題提出できているのか不安だった」(10.9%減少)などオンライン授業ツールやLMSの使用そのものにも慣れてきたものと推察される。

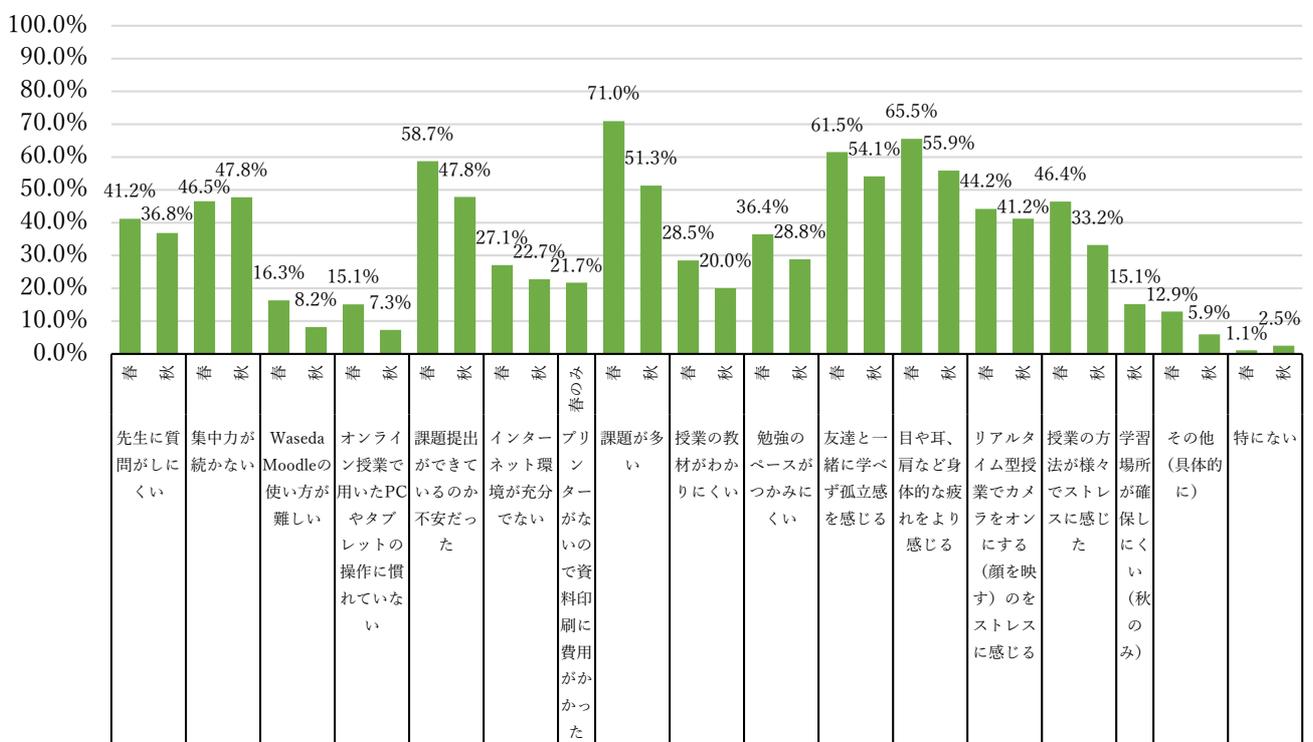


図3-6 オンライン授業のデメリット・春秋別

これをまず春学期の文理別で比較すると(図3-7)、文系と比べ理系では「授業の教材がわかりにくい」(35.4%>26.6%)、「課題が多い」(75.7%>69.7%)、「先生に質問がしにくい」(44.8%>40.2%)がやや高い結果となった。文系においては、「リアルタイム授業でカメラをオンにするのをストレスに感じる」(45.7%>38.6%)、「課題提出ができているのか不安だった」(59.7%>55.0%)で理系よりやや高い結果となった。

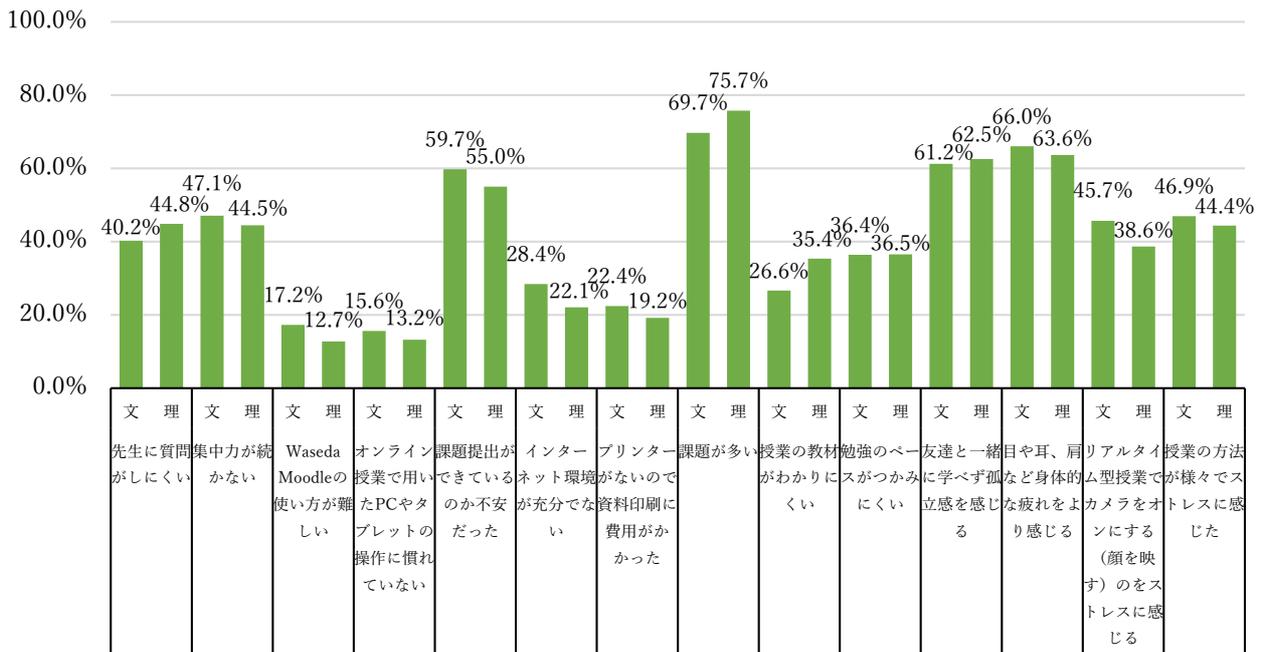


図3-7 オンライン授業のデメリット・文理別（春学期）

次に学年間での違いについて見ると（図3-8、図3-9）、多くの項目で1年生が高く、学年が進行するにつれ、減少していく。大学入学から間もなくかつ急遽オンライン授業が展開されることで1年生はよりデメリットを感じていたものと推察される。特に1年生が他学年と比較して突出して高いのは、「友達と一緒に学べず孤立感を感じる」（76.9%）、「集中力が続かない」（56.6%）、「先生に質問がしにくい」（54.6%）、「勉強のペースがつかみにくい」（47.8%）、「オンライン授業で用いるPCやタブレットの操作に慣れていない」（24.8%）であった。また注目したのは、春学期に全体で最も高かった「課題が多い」については2年生が最も高い結果であった（81.0%）。なお「Waseda Moodleの使い方が難しい」については、4年生が最も高く（20.3%）、使い慣れていたCourse N@viからの移行に比較的苦慮していたことがうかがえる。

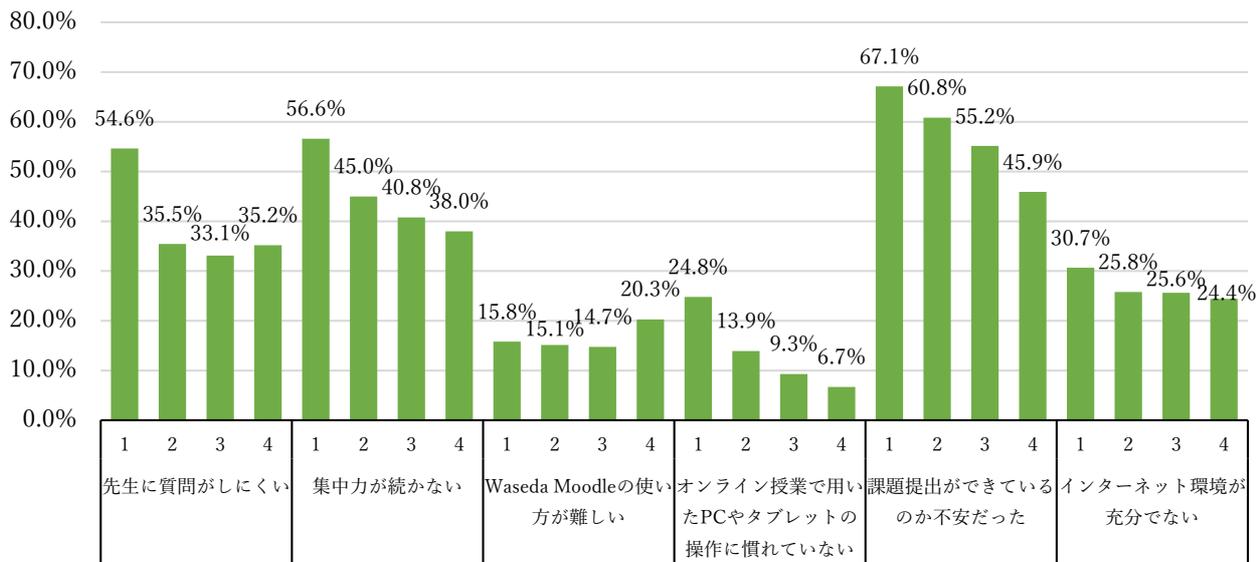


図3-8 オンライン授業のデメリット・学年別（1）（春学期）

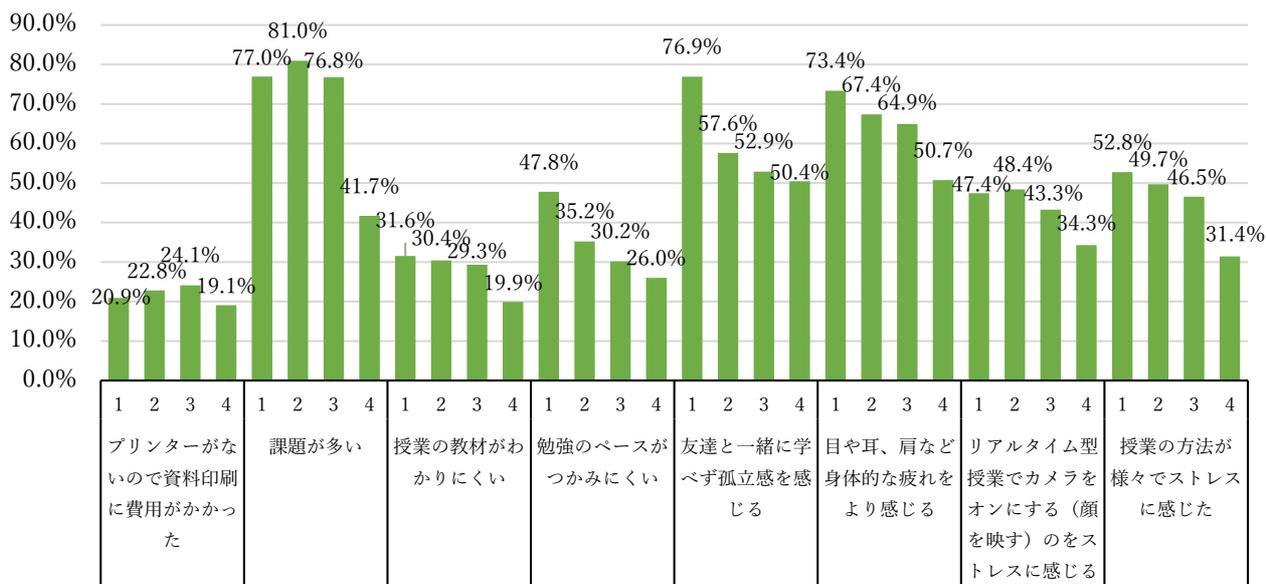


図3-9 オンライン授業のデメリット・学年別（2）（春学期）

文理別・学年別の違いは秋学期にどのように変化したのか。まず、文理別の違い（図3-10）については、秋学期においても文系と比べ理系では「授業の教材がわかりにくい」（24.7%＞18.7%）、「課題が多い」（56.8%＞49.7%）、「先生に質問がしにくい」（43.2%＞35.1%）がやや高い結果となった。さらに、春学期と変化した点では、「課題提出が来ているのか不安だった」で文系よりも理系の方が高くなった（50.2%＞47.1%）。春学期の結果と比較すると、文系の割合が大幅に減少したと読み取るのが妥当と言えそうだ。

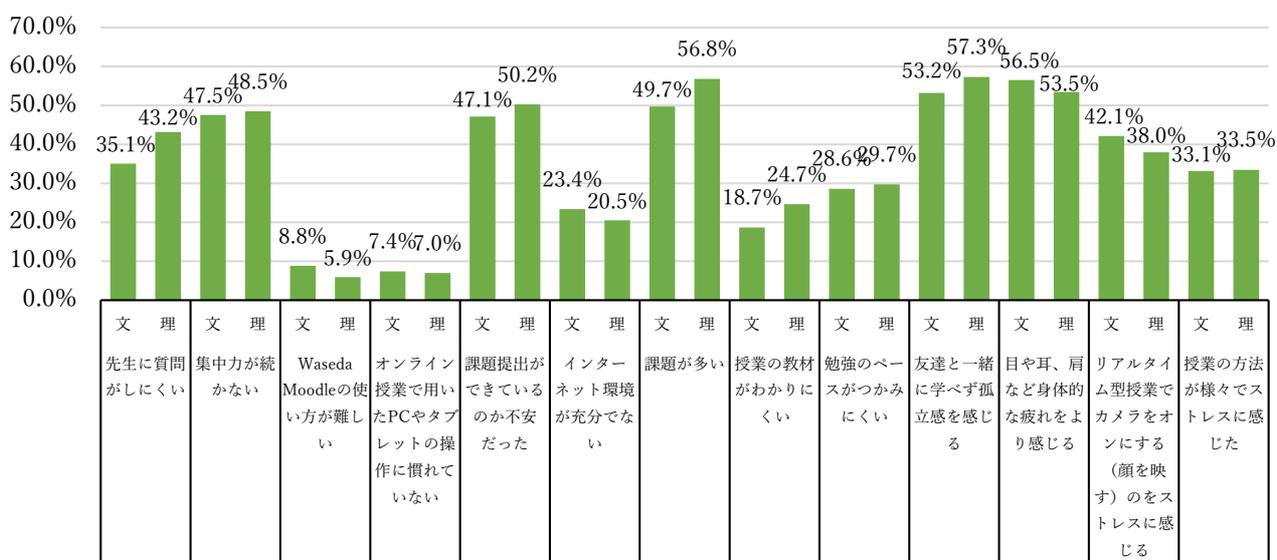


図3-10 オンライン授業のデメリット・文理別（秋学期）

学年間については、秋学期においても1年生が高い項目があり、学年が進行するにつれ、減少していく。特に1年生が他学年と比較して突出して高いのは、「友達と一緒に学べず孤立感を感じる」（66.1%）、「集中力が続かない」（56.0%）、「先生に質問がしにくい」（48.5%）、「勉強のペースがつかみにくい」（35.8%）であった。「オンライン授業で用いるPCやタブレットの操作に慣れていない」（12.6%）についても他学年に比べ高いものの、春学期（24.8%）と比較してある程度減少した。また春学期と同様、「課題が多い」については、全体的に大きく減少したものの、2年生が最も高い結果であった（61.9%）。

全体的に秋学期にかけてデメリットの項目は減少したものの、今後の1年生（新2年生）への学習環境のケアが必要と考えられる。

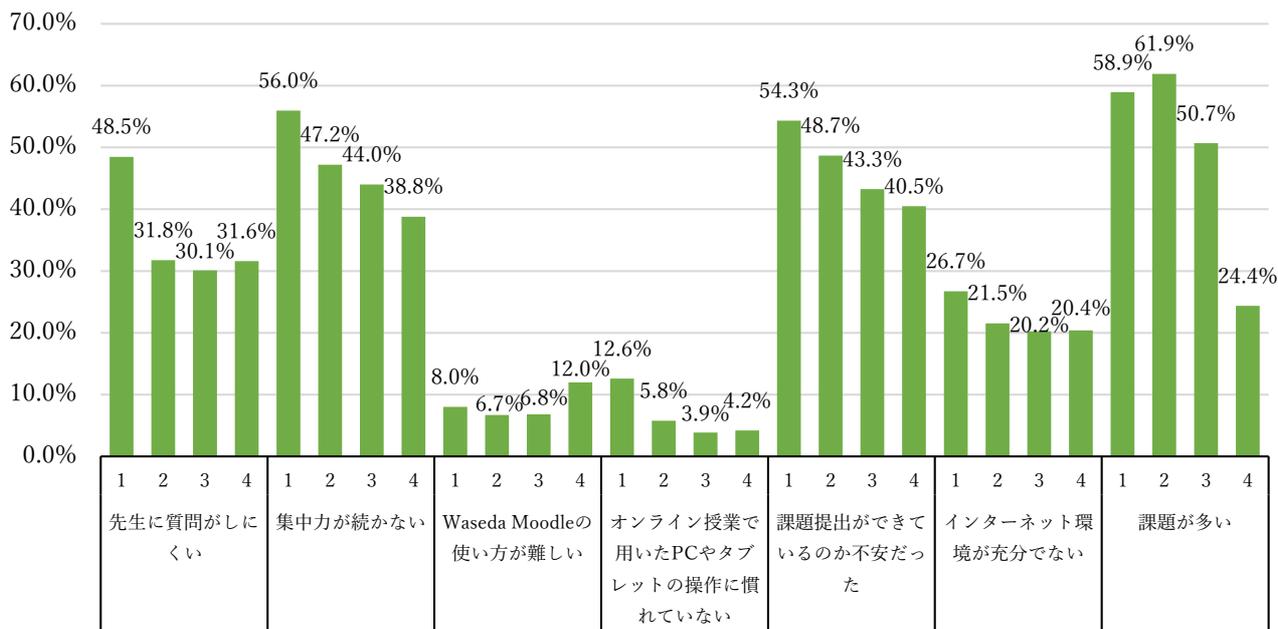


図3-13 オンライン授業のデメリット・学年別（1）（秋学期）

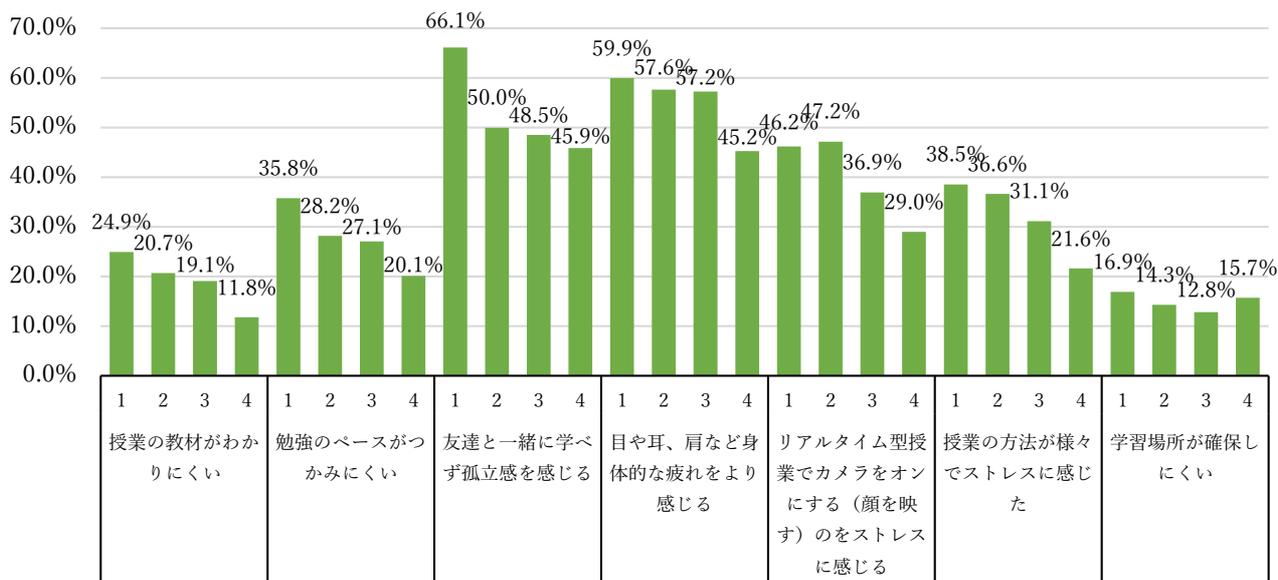


図3-14 オンライン授業のデメリット・学年別（2）（秋学期）

## 第4章 有益・不満のある授業の比較

### 4-1. 満足・不満のある授業

第4章では、春学期の回答をもとに、満足した・不満足な授業を対比しながら、オンライン授業下における授業の実態を示す。

まず、学生が有益と感じた授業数について尋ねたところ、高い順に「3つ以上」(43.0%)、「2つ以上」(30.0%)、「1つ以上」(19.1%)、「有益な授業はなかった」(7.9%)となった。1つ以上有益と感じた学生は、92.1%であった。一方、満足いかなかった授業(不満のある授業:図4-2)については、79.2%があると回答した。

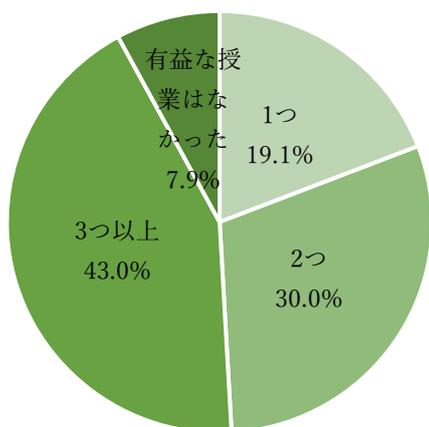


図4-1 有益であった授業の数 (春学期)

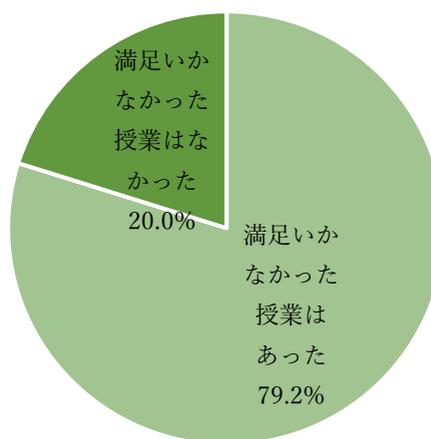


図4-2 不満のある授業の有無 (春学期)

### 4-2. 授業区分

次に、有益な授業と不満のある授業それぞれの授業区分について示す。なお、ここでの有益な授業は最も有益であった授業に限定しており、不満のある授業は、複数ある場合も含めており、各回答が複数回答可となっている。従って、不満のある授業の割合が高くなることに留意したい。図4-3を見ると、「講義」(86.3%>75.7%)や「実験・実習・実技」(13.9%>2.3%)において不満のある授業の割合が高い一方、演習(ゼミ)においては有益な授業の方が高い結果となった(20.0%>12.4%)。

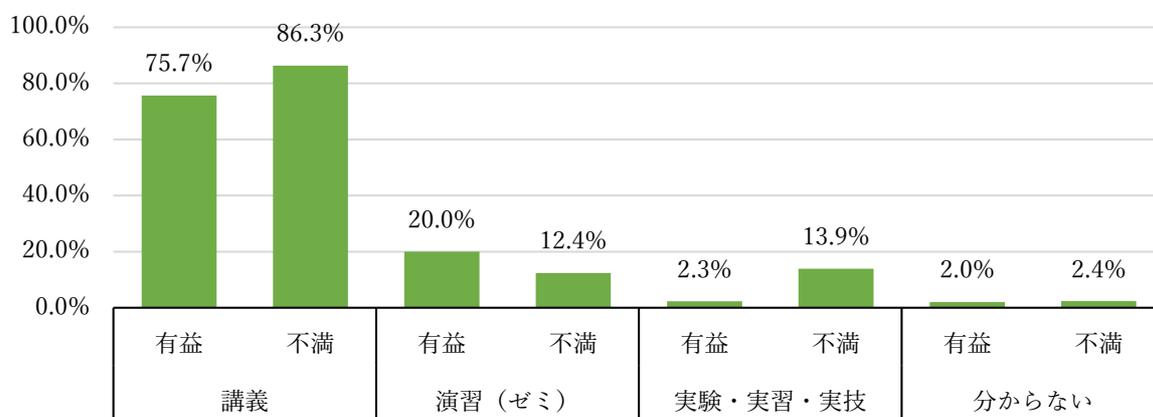


図4-3 授業区分別(1)の有益・不満授業比較 (春学期)

「実験・実習・実技」については、対面が必要な場面もあり、不満に感じた学生がより多かったと推察される。

次にまた異なる授業区分ではどうであったか（図4-4）。「専門教育」では同値（50.3%）であるものの、不満のある授業として「一般教育」（40.4%>25.4%）、「語学」（22.8%>16.7%）がやや高い結果となった。先述したとおり不満のある授業は複数回答であるので値が高くなる傾向に注意したい。

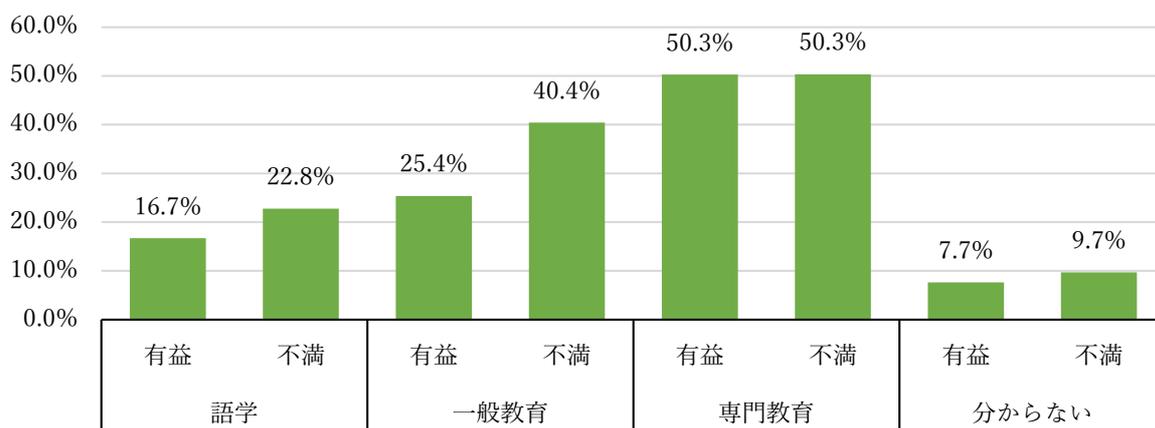


図4-4 授業区分別（2）の有益・不満授業比較（春学期）

### 4-3. クラス規模

次に、クラス規模はどうであったか。これまで対面を基礎にした国内外での調査研究ではクラス規模の重要性も指摘されている。春学期の結果をみると、有益な授業では、比較人数が少ない「10人以下」（9.7%>2.2%）、「11～30人」（27.8%>16.6%）でより高い値となった。一方で、不満な授業では「分からない」（36.5%>21.2%）が高く、そもそも誰がどのくらい履修しているのか把握できる状況ではなかったことが示唆される。

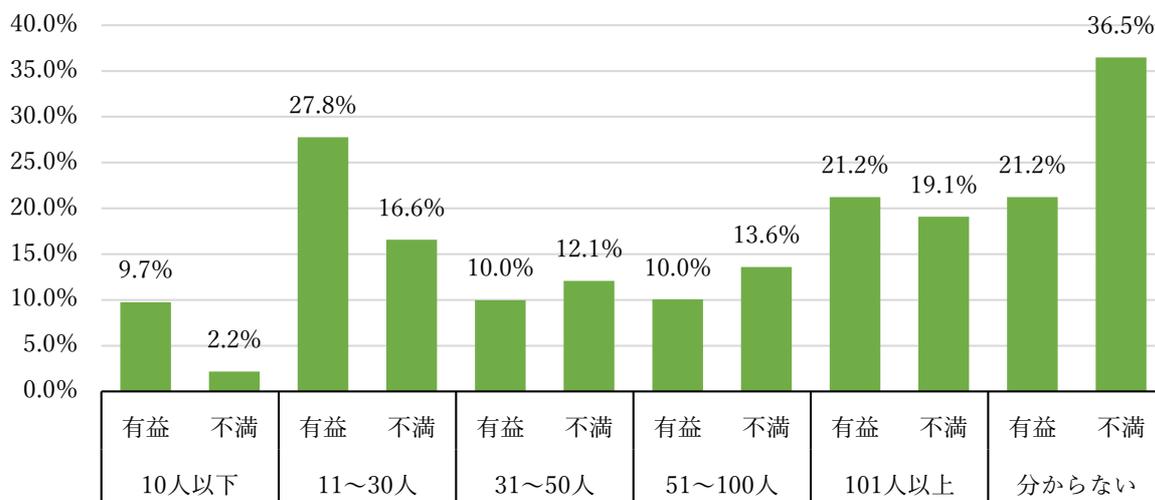
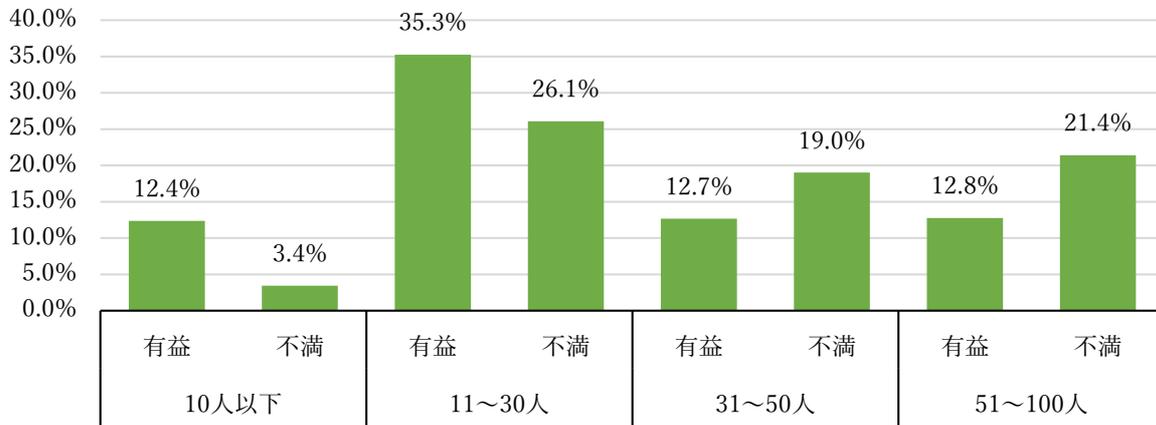


図4-5 クラス規模別（1）の有益・不満授業比較（春学期）

そこで、「分からない」を除いてクラス規模を算出した（図4-6）。すると、有益な授業は「10人以下」（12.4%>3.4%）、「11～30人」（35.3%>26.1%）という比較的少人数で高い結果であった。逆に、不満のある授業は、「31～50人」（19.0%>12.7%）、「51～100人」（21.4%>12.8%）において高い結果となった。

図4-6 クラス規模別（2）の有益・不満授業比較（春学期）



#### 4-4. 授業形式

それでは、授業形式について比較する（図4-7）。早稲田大学では、オンライン授業として「課題提示型」、「オンデマンド型」、「リアルタイム型」でオンライン授業が行われた。この項目は、有益な授業も複数の形式で行われていた場合には、複数回答とした。結果を見ると、有益な授業では「リアルタイム型」（51.9%>38.5%）が高く、不満のある授業においては「課題提示型」（51.0%>19.4%）が高い結果となった。オンデマンド型はほぼ同値となった。

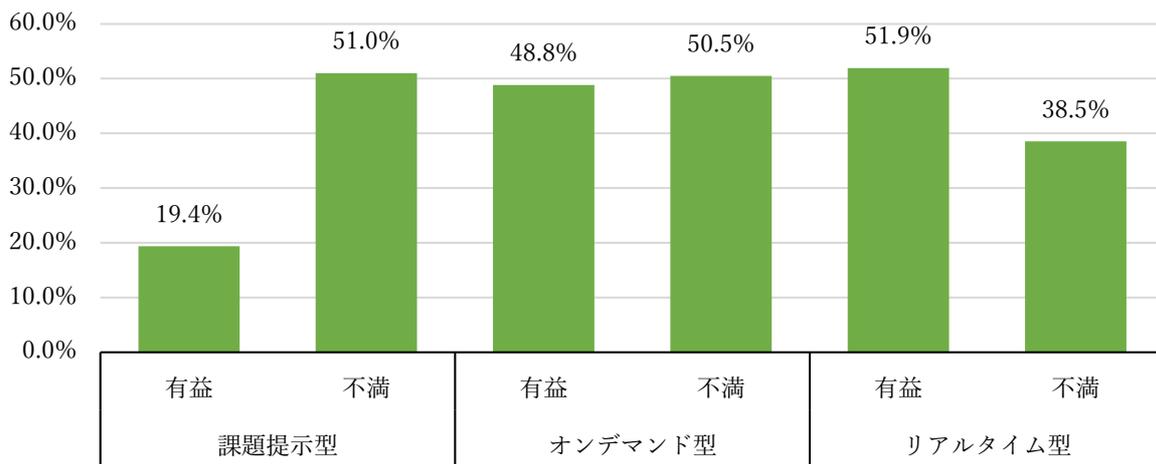


図4-7 授業形式別の有益・不満授業比較（春学期）

最も有益な授業において、3つの授業形式の回答状況から7つのパターンに分け整理した(図4-8)。最も高かったのは「3.リアルタイム型」(41.6%)であり、次に「2.オンデマンド型」(34.1%)であった。この2つのみで回答全体の75.7%を占めた。「1.課題提示型」(6.9%)は「2.オンデマンド型」、「3.リアルタイム型」よりもかなり低い結果となった。さらに、組合せ別では「4.課題提示型\*オンデマンド型」(7.0%)が最も高かった。

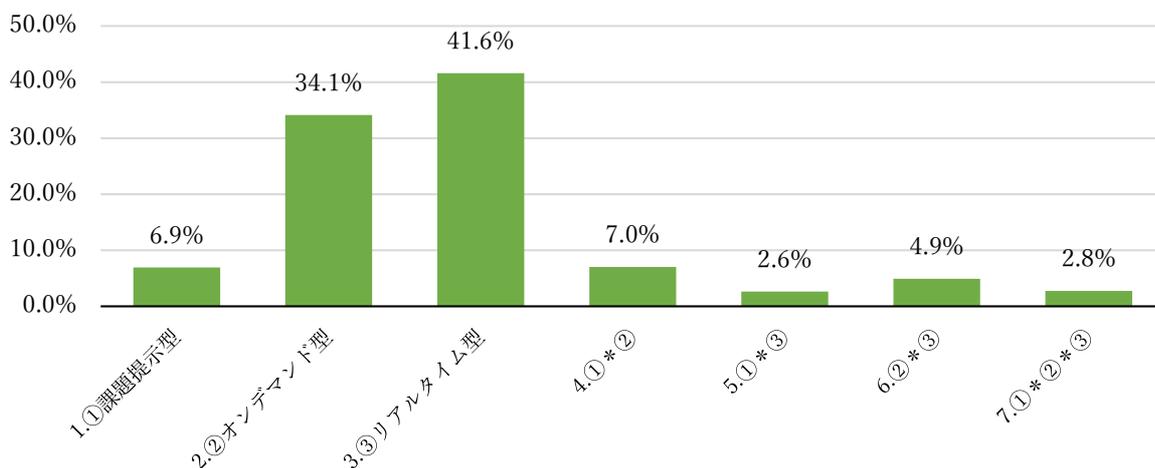


図4-8 有益な授業の授業形式(春学期)

#### 4-5. 授業方法

満足した・不満足な授業の対比の最後に、授業方法の比較を示す(図4-9)。ここでは各項目が当該授業でどのくらいあったのか4件法で尋ねたうち肯定的な回答(「よくあった」+「まあまああった」)を示した。

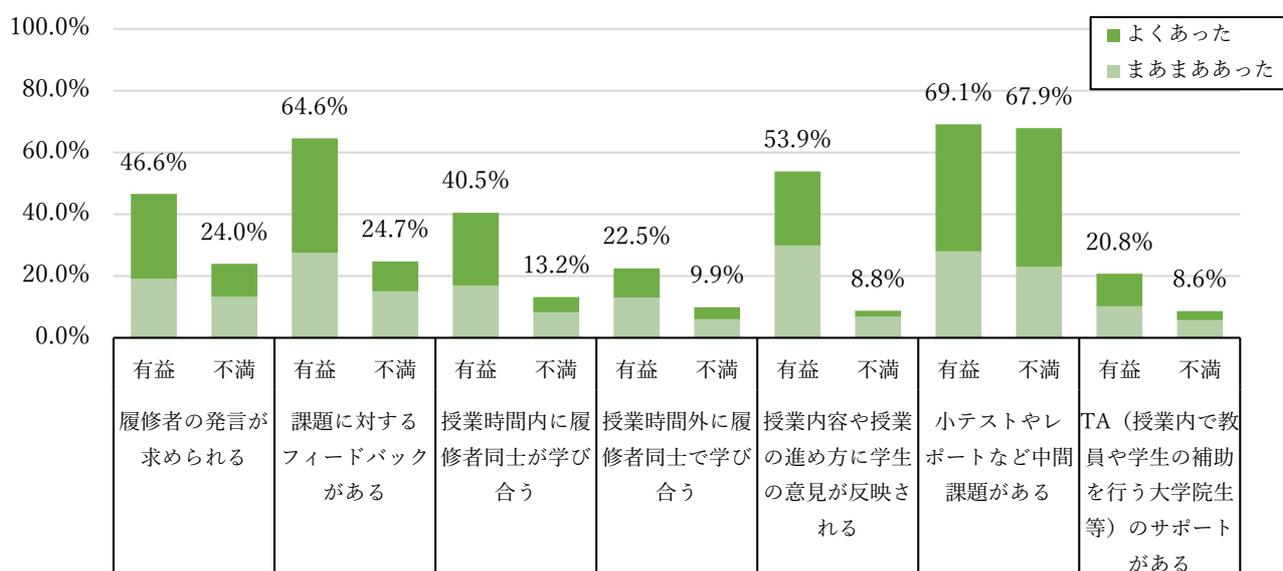


図4-9 授業方法別の有益・不満授業比較(春学期)

まず肯定的な回答が有益な授業・不満な授業で、「小テストやレポートなど中間課題がある」がともに高い。しかしながら、他の全ての項目については有益な授業が、不満な授業よりも高い結果となった。特に差が大きい項目として、「授業内容や授業の進め方に学生の意見が反映される」(53.9%>8.8%)、「課題に対するフィードバックがある」(64.6%>24.7%)、「授業時間内に履修者同士が学び合う」(40.5%>13.2%)、「履修者の発言が求められる」(46.6%>24.0%) があげられる。

#### 4-6. 動画の長さ

第4章の最後に、比較分析ではないが、学生が適切と考える動画の長さについて示す。この項目は春学期のみ設定された。図4-10は、左が1動画あたり、右が1授業あたり適切な動画の長さを箱ひげ図で示した。1動画あたりでは、中央値29、平均値30.3となった。1授業あたりでは中央値60、平均値54.0となった。

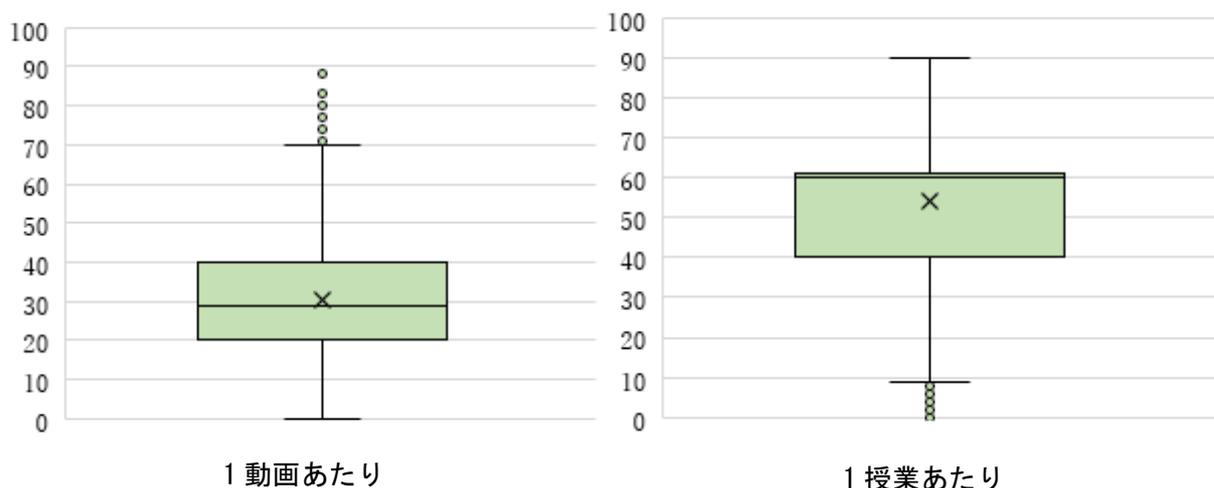


図4-10 授業動画の適切な長さ (春学期)

1動画あたりの学年別(図4-11)、1授業あたりの学年別(図4-12)についても示す。学部2・3年生では1動画あたりの適切な長さがやや低い。1授業あたりではそれほど違いは見られなかった。同じように、1動画あたりの文理別(図4-13)、1授業あたりの文理別(図4-14)についても示す。1動画あたりでは、文系に比べ理系のほうがやや短い(中央値:25<30)。一方、1授業あたりではあまり違いは見られなかった。

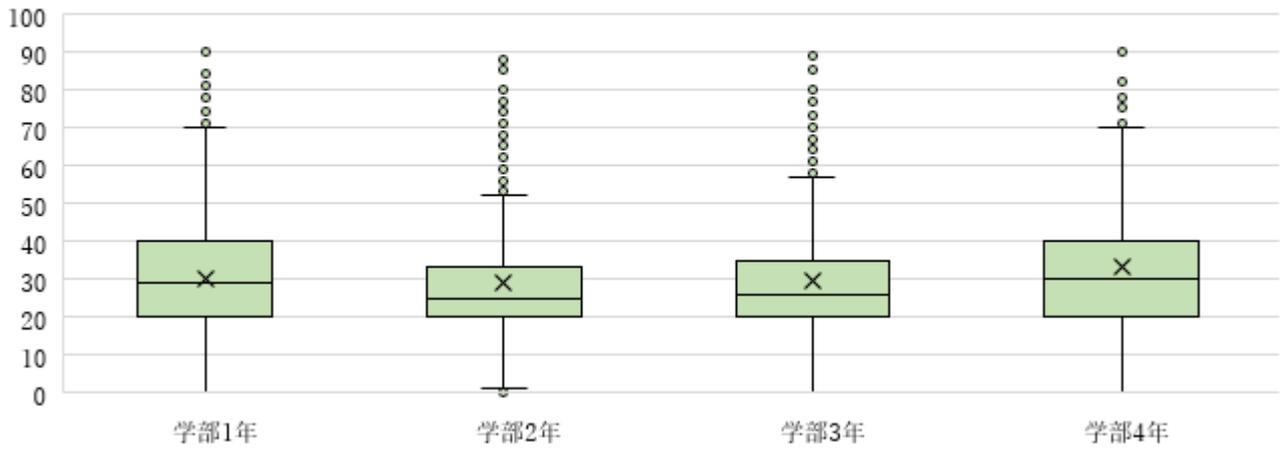


図4-11 1動画の適切な長さ・学年別（春学期）

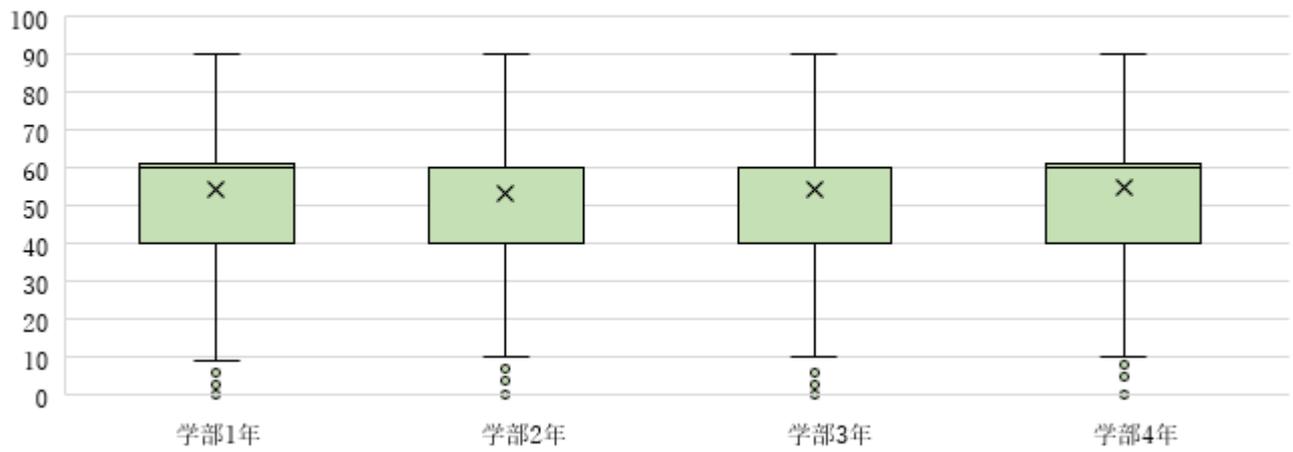


図4-12 1授業の適切な長さ・学年別（春学期）

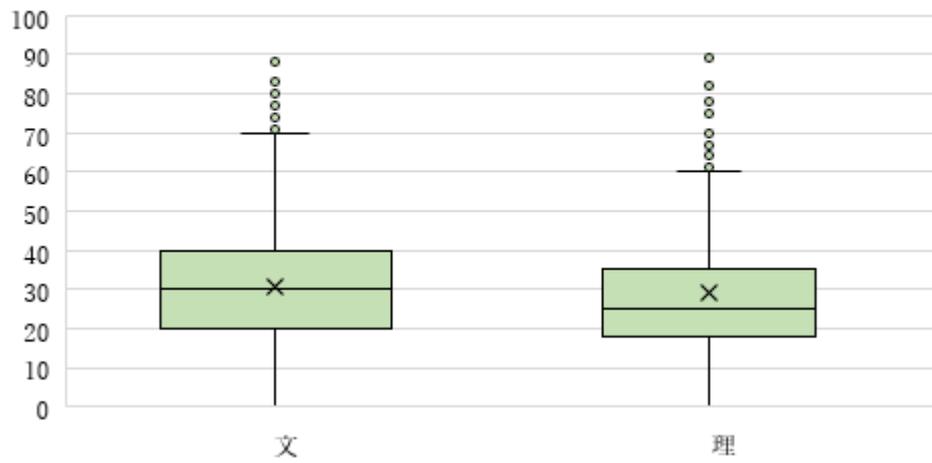


図 4 -13 1 動画の適切な長さ・文理別（春学期）

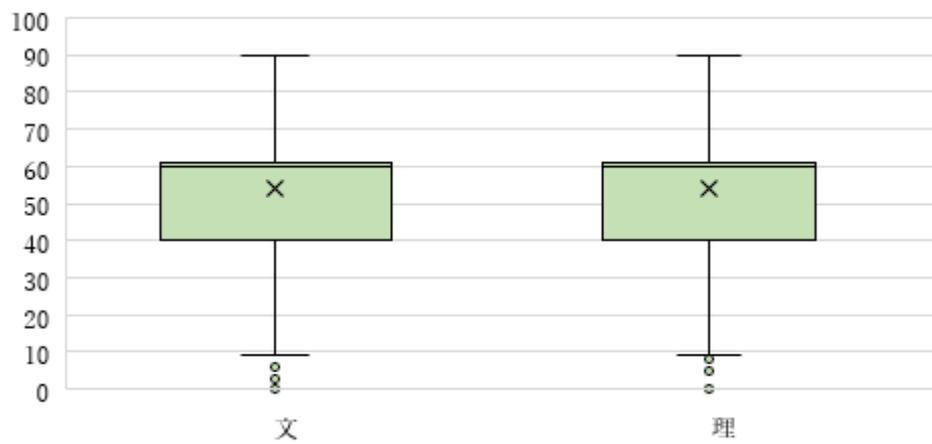


図 4 -14 1 授業の適切な長さ・文理別（春学期）

## 第5章 秋学期の授業展開と有益な授業・不満のある授業

### 5-1. 有益な授業

第5章では、春学期と秋学期の比較を中心としつつ、前章で検討した有益な授業と不満のある授業について示していく。図5-1は、有益であった授業数の結果である。秋学期にかけての変化は、「3つ以上」が43.0%から35.5%に減少し、「1つ」が19.1%から23.6%へ上昇した。また、「有益な授業はなかった」は7.9%から8.7%に微増した。

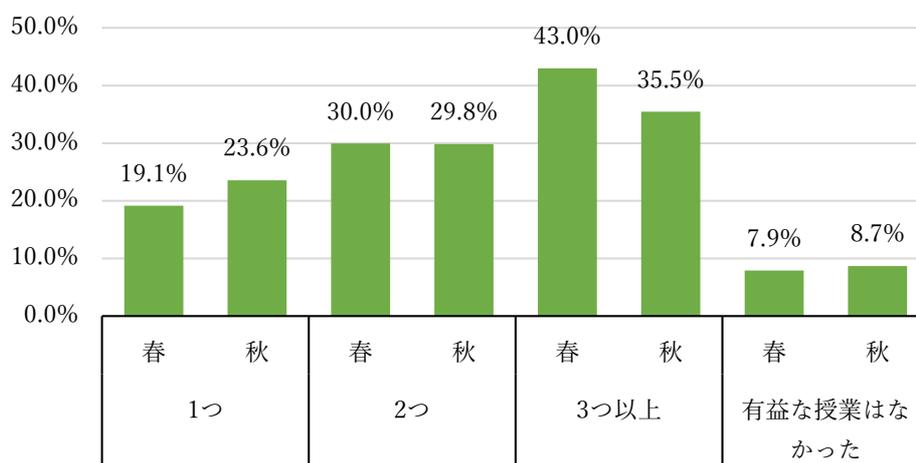


図5-1 有益な授業数・春秋別

授業区分で比較すると、「講義」が75.7%から67.7%に減少し、「演習（ゼミ）」が20.0%から22.7%に微増し、「実験・実習・実技」は2.3%から6.3%に増加した。「実験・実習・実技」の増加は、対面での授業が再開されたことによるものと推察される。

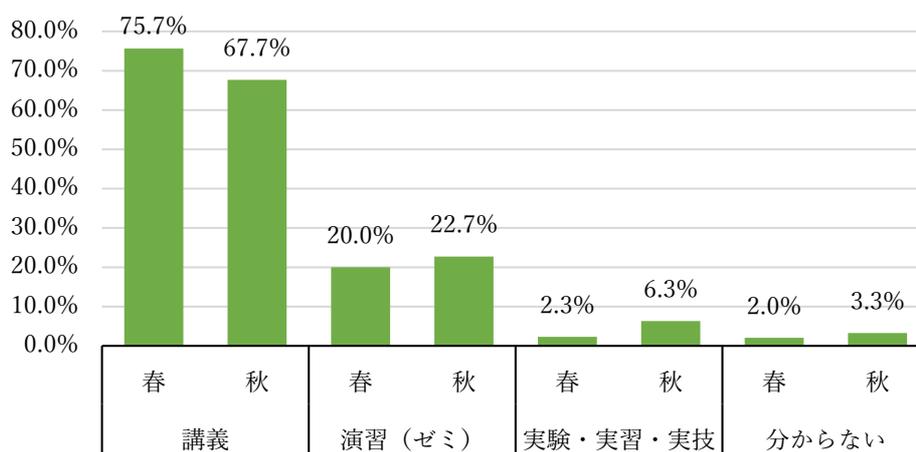


図5-2 有益な授業の授業区分（1）・春秋別

また、図5-3における授業区分では、「語学」が16.7%から12.8%に減少し、「専門教育」が50.3%から52.9%に微増した。なお「分からない」は7.7%から10.6%微増した。

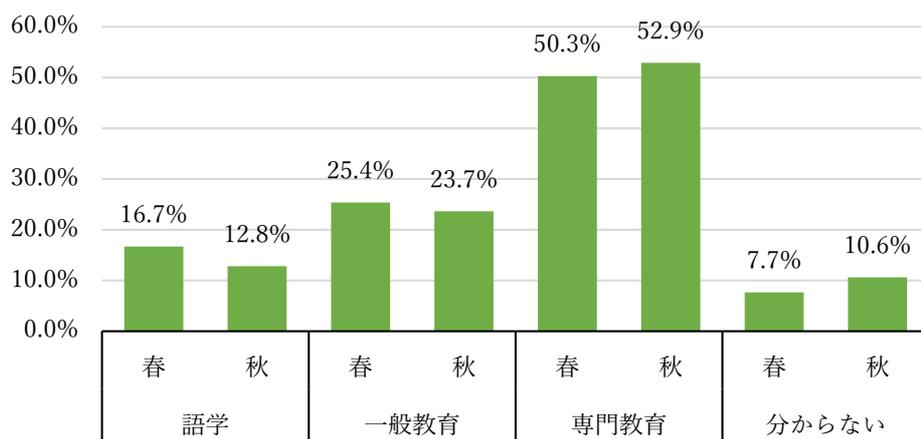


図5-3 有益な授業の授業区分(2)・春秋別

次にクラス規模について示す。「11～30人」が27.8%から29.3%に微増し、「101人以上」が21.2%から17.8%に減少した。図5-4の「分からない」を除くと、図5-5のような結果となった。傾向は変わらず、「11～30人」が35.3%から38.2%に微増し、「101人以上」が27.0%から23.2%に減少した。

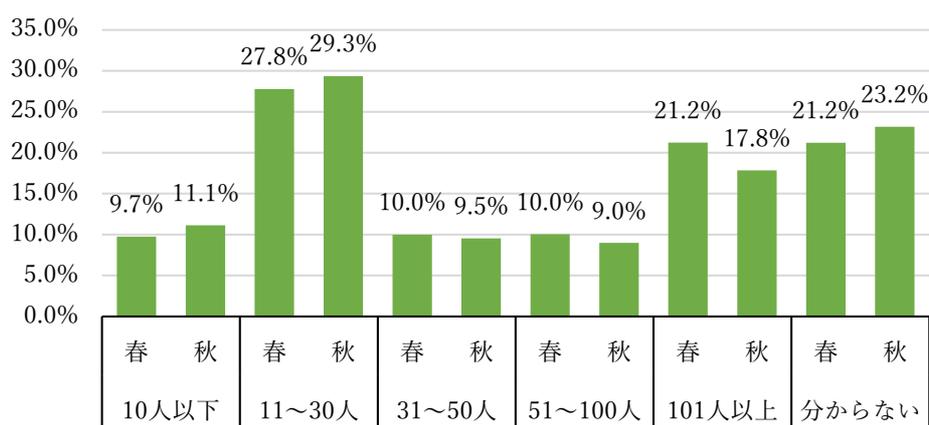


図5-4 有益な授業のクラス規模(1)・春秋別

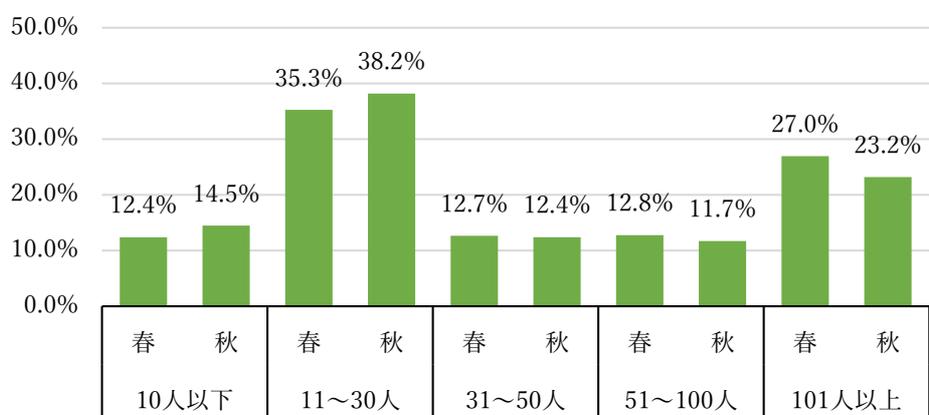


図5-5 有益な授業のクラス規模(2)・春秋別

最も有益な授業に限定した授業形式（図5-6）については、「課題提示型」が19.4%から25.3%に増加し、「オンデマンド型」は48.8%から43.5%に減少し、「リアルタイム型」は51.9%から55.6%に微増した。秋学期の「対面型」は12.3%となった。

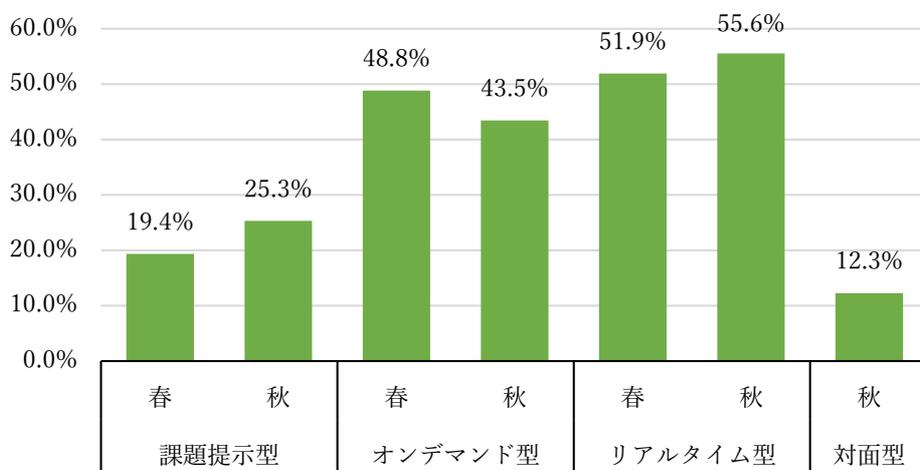


図5-6 有益な授業の授業形式・春秋別

図5-6は複数の形式を用いている場合には、複数回答ができるように設定されていたため、図5-7ではその組合せの全15パターンを春学期と比較した上で示す。すると、秋学期においては、「3. リアルタイム型」(34.3%)が最も高く、次に「2. オンデマンド型」(24.1%)、そして、「5. 課題提示型\*オンデマンド型」(8.4%)の順に高い結果となった。秋学期において①~③の組合せを行う授業は、最も有益な授業のなかで35.0%であり、各割合は決して高くはないものの、多様な授業形式が展開された。

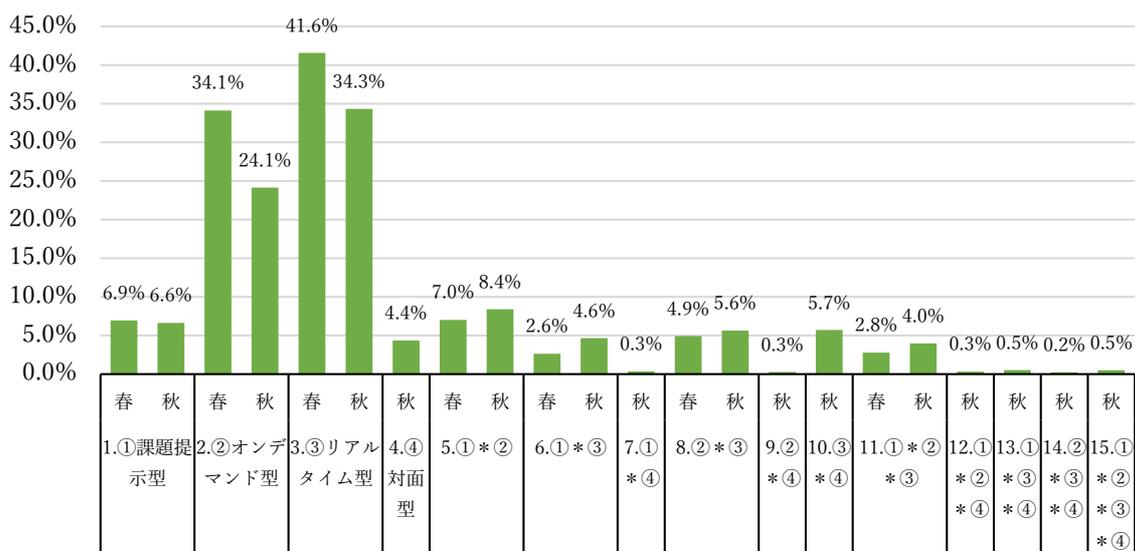


図5-7 有益な授業の授業形式

本節の最後に、有益な授業ではいかなる授業方法が見られたのか。図5-7で示した15タイプごとに示していく。なお、15タイプのうち該当件数が低いものについては、参考値としたい。まず、「履修

者の発言が求められる」(図5-8)については、「3. リアルタイム型」(82.4%)や「4. 対面型」(82.8%)、さらに、「10.リアルタイム型\*対面型」(90.7%)、「13 課題提示型\*リアルタイム型\*対面型」において肯定的な回答が多かった。一方で、「2. オンデマンド型」(12.5%)や「5. 課題提示型\*オンデマンド型」(14.7%)においては肯定的な回答が少なかった。

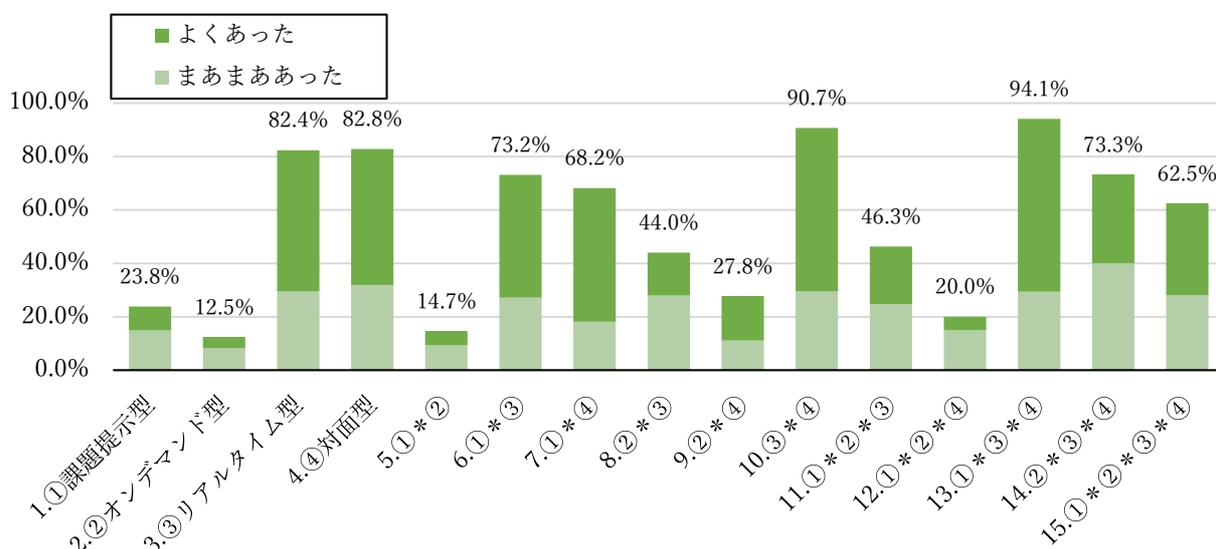


図5-8 有益な授業の授業形式別の授業方法(履修者の発言)

「課題に対するフィードバックがある」(図5-9)については、「7. 課題提示型\*対面型」(90.9%)や「13. 課題提示型\*リアルタイム型\*対面型」(97.1%)、さらに、「14.オンデマンド型\*リアルタイム型\*対面型」(93.3%)において肯定的な回答が多かった。一方で、「2. オンデマンド型」(46.9%)については、タイプ別で唯一肯定的な回答が50%に満たなかった。

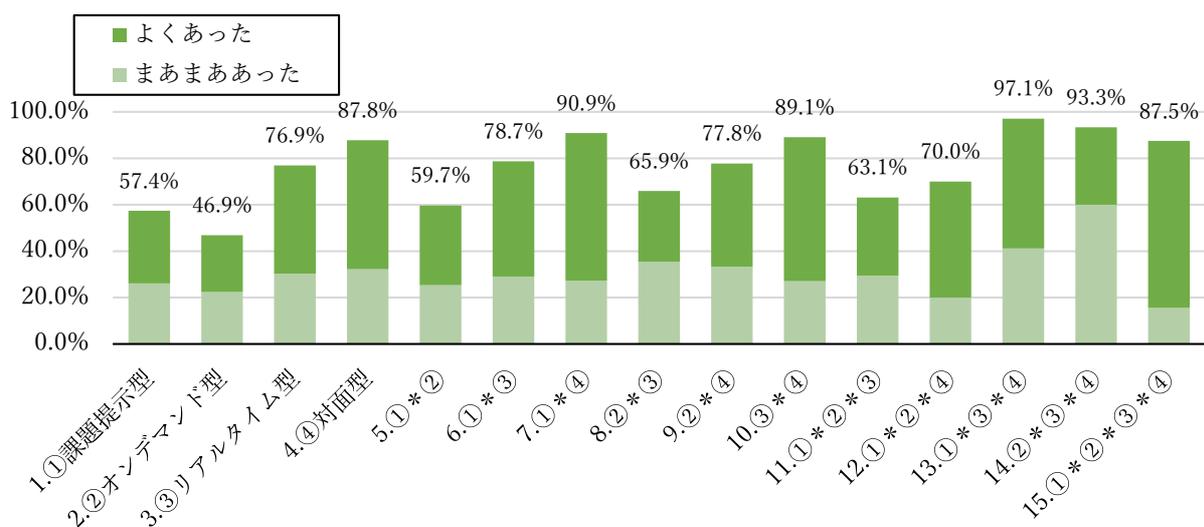


図5-9 有益な授業の授業形式別の授業方法(課題のフィードバック)

「授業時間内に履修者同士が学び合う」（図5-10）については、「4. 対面型」（88.2%）、「10.リアルタイム型\*対面型」（87.4%）、「13.課題提示型\*リアルタイム型\*対面型」（82.4%）、「14.オンデマンド型\*リアルタイム型\*対面型」（86.7%）、「15.課題提示型\*オンデマンド型\*リアルタイム型\*対面型」（81.3%）において肯定的な回答が多かった。一方で、「2. オンデマンド型」（9.3%）や「5. 課題提示型\*オンデマンド型」（13.2%）においては、肯定的な回答は少ない。

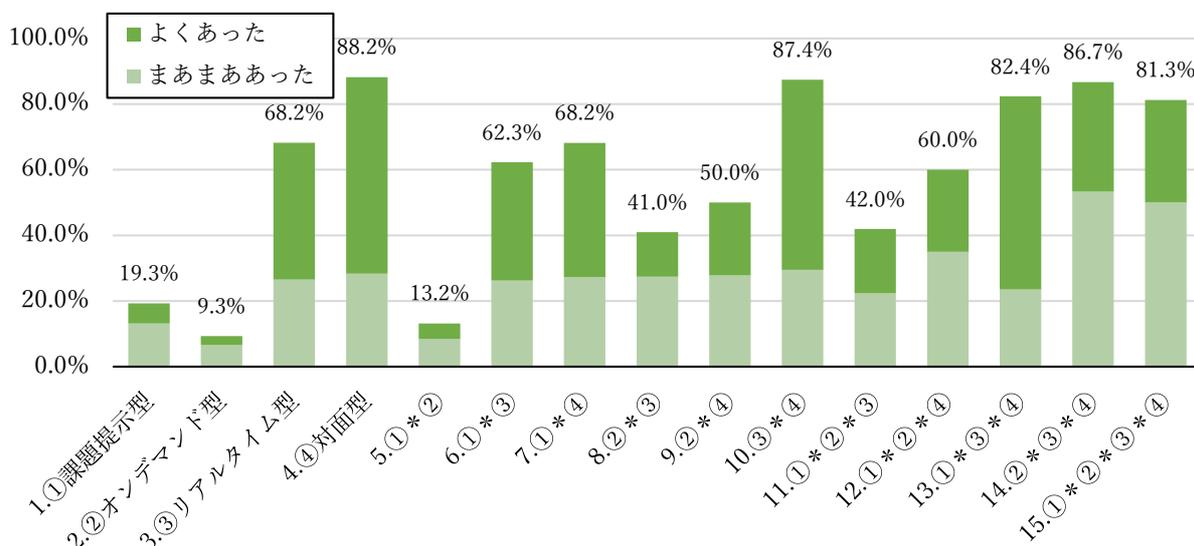


図5-10 有益な授業の授業形式別の授業方法（授業中の履修者同士の学び合い）

「授業内容や授業の進め方に学生の意見が反映される」（図5-11）については、「10.リアルタイム型\*対面型」（80.9%）、「13.課題提示型\*リアルタイム型\*対面型」（88.2%）において肯定的な回答が多かった。一方で、「9. オンデマンド型\*対面型」（22.2%）は肯定的な回答が最も低かった。

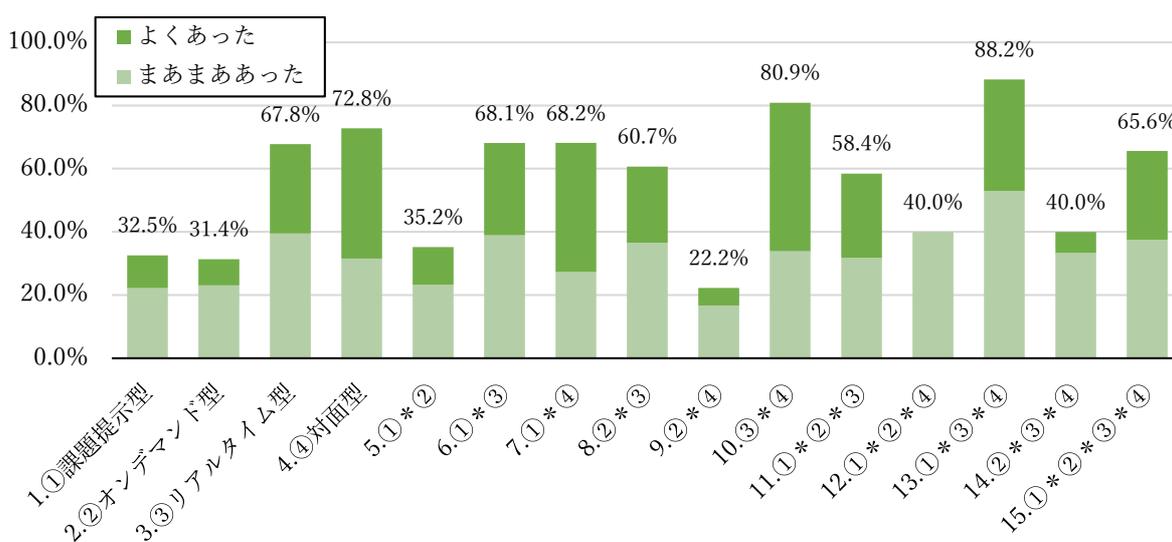


図5-11 有益な授業の授業形式別の授業方法（授業の進め方に学生の意見が反映）

「小テストやレポートなど中間課題がある」(図5-12)については、これまでの項目とは異なり、多くのタイプで肯定的な回答が高い結果となった。しかしながら、「4. 対面型」(52.0%)や「10. リアルタイム型\*対面型」(53.8%)においては相対的に肯定的な回答は少なかった。

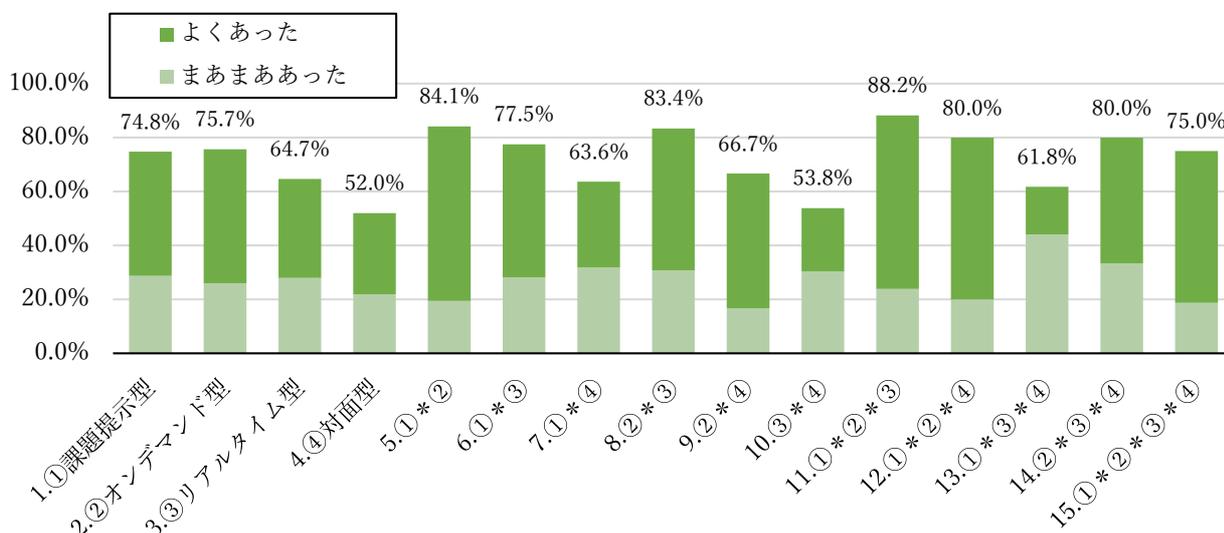


図5-12 有益な授業の授業形式別の授業方法 (小テストやレポートなど中間課題がある)

最後に「TA (授業内で教員や学生の補助を行う大学院生等) のサポートがある」については、「14. オンデマンド型\*リアルタイム型\*対面型」(73.3%)や「9. オンデマンド型\*対面型」(66.7%)、「15. 課題提示型\*オンデマンド型\*リアルタイム型\*対面型」(62.5%)において肯定的な回答が多かった。一方で、「1. 課題提示型」(19.1%)、「2. オンデマンド型」(16.6%)、「5. 課題提示型\*オンデマンド型」では、肯定的な回答は20%未満となった。

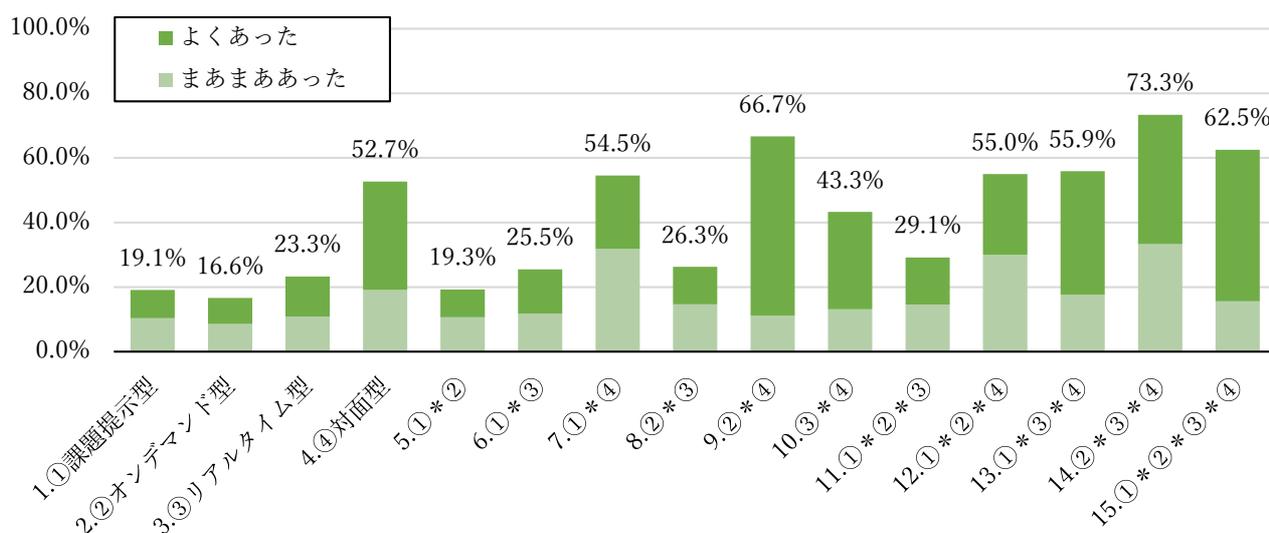


図5-13 有益な授業の授業形式別の授業方法 (TAのサポートがある)

## 5-2. 不満のある授業

本節では、満足いかなかった（不満のある）授業について春秋比較を中心に示す。まず、不満のある授業の有無については、「満足いかなかった授業はあった」が春学期 79.9%から秋学期 61.0%に減少した。

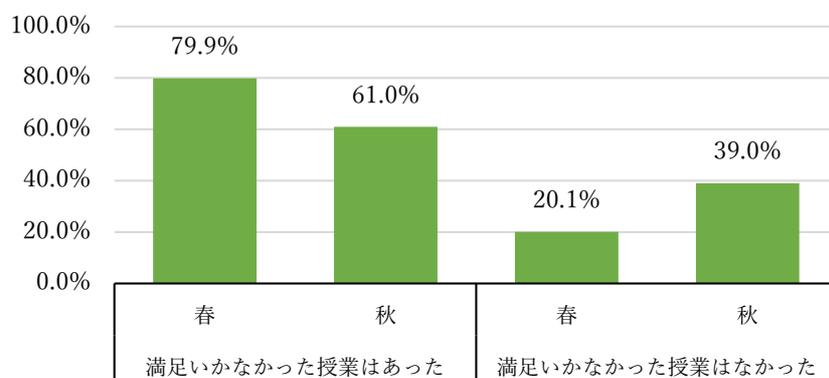


図5-14 不満のある授業の有無・春秋別

学年別に見てみると（図5-15）、各学年ともに「満足いかなかった授業はあった」の割合は減少した。春学期においては1～3年生でほぼ同程度であり、秋学期には、3年生（23.3%減少）、2年生（18.0%減少）、1年生（12.6%減少）の順に減少の幅が大きかった。

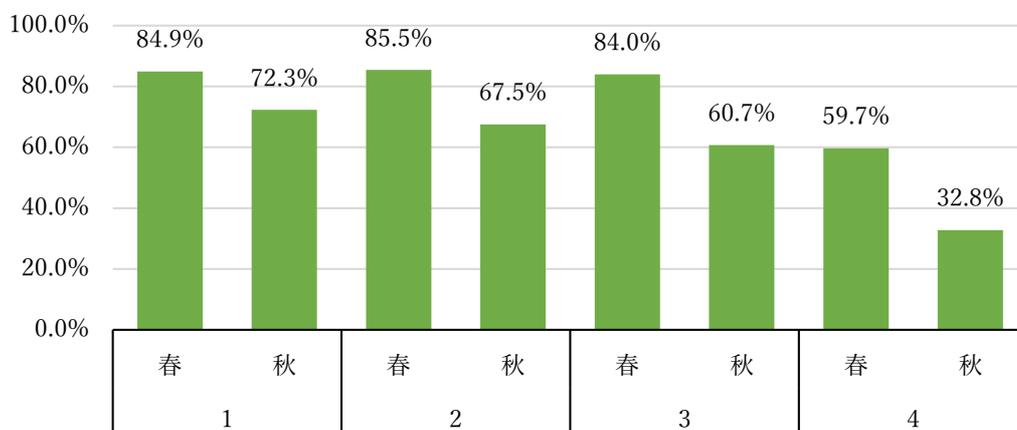


図5-15 不満のある授業の有無・学年・春秋別

授業区分については（図5-16）、春秋で特に大きな変化はなく、いずれにおいても「講義」、「実験・実習・実技」、「演習（ゼミ）」の順に高い結果となった、

異なる授業区分では（図5-17）、「専門教育」が春学期 50.3%から秋学期 46.7%に微減していたものの、それ以外は特に大きな変化はなかった。春秋いずれにおいても「専門教育」、「一般教育」、「語学」の順に高い結果であった。

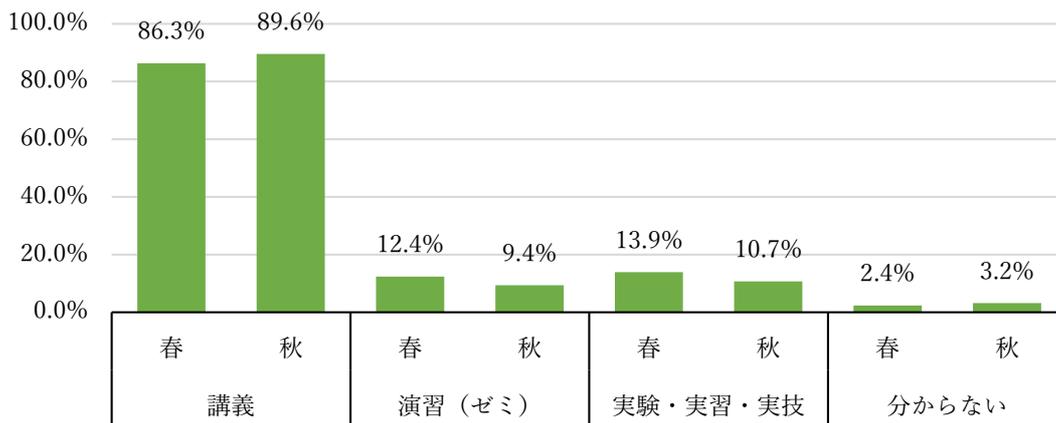


図5-16 不満のある授業の授業区分（1）・春秋別

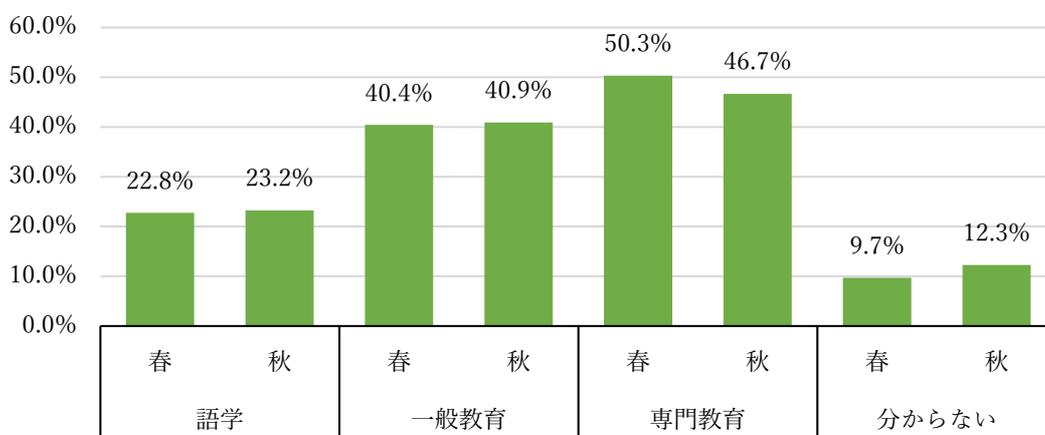


図5-17 不満のある授業の授業区分（2）・春秋別

クラス規模については（図5-18）、春秋で「101人以上」が19.1%から14.6%に微減し、「分からない」が36.5%から40.1%に微増した。それ以外は特に大きな変化は見られなかった。

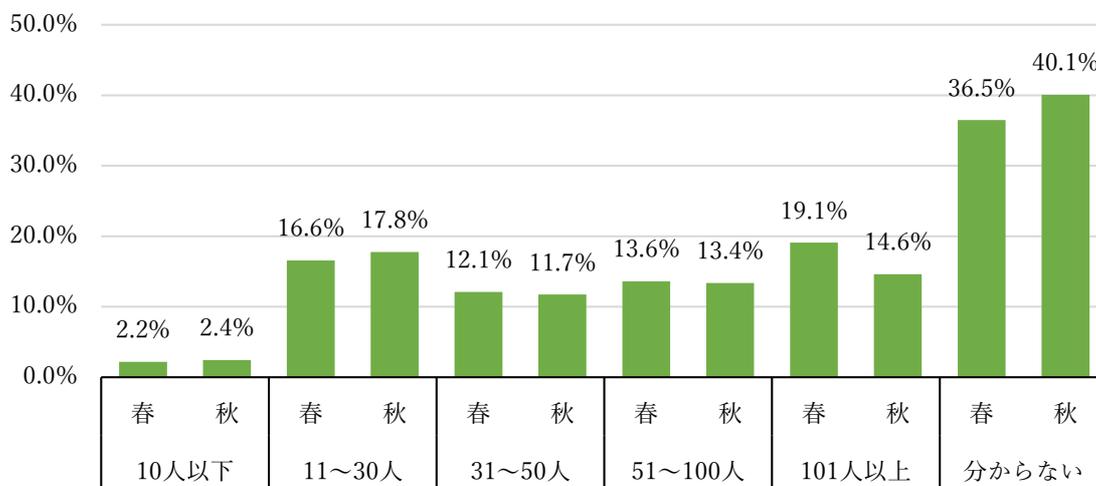
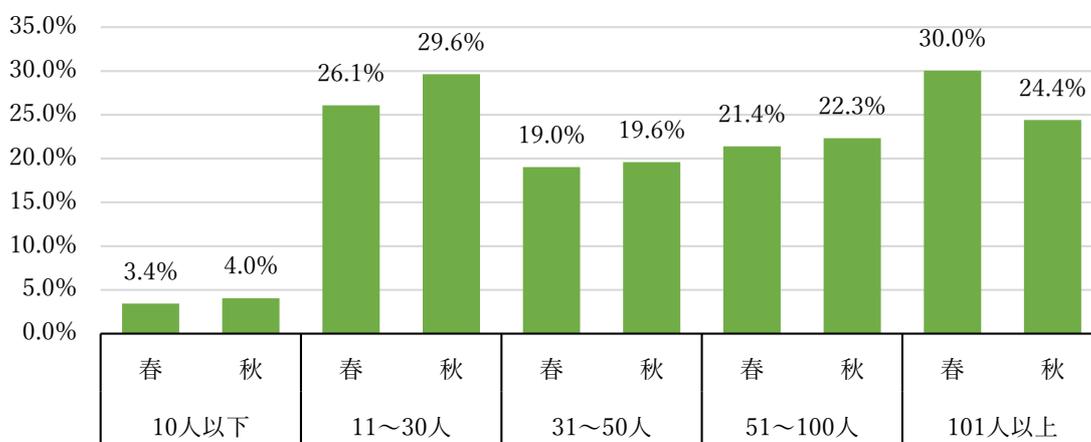


図5-18 不満のある授業のクラス規模（1）・春秋別

前章までと同じように、クラス規模について「分からない」を除いた結果を示す（図5-19）。すると、「11～30人」が26.1%から29.6%に微増する一方で「101人以上」が30.0%から24.4%に減少した。

図5-19 不満のある授業のクラス規模（2）・春秋別



授業形式について見ると（図5-20）、「2. オンデマンド型」、「3. リアルタイム型」が増加した。複数回答の項目なので、ハイブリッド授業が増加した結果なのかもしれない。また、「4. 対面型」については4.6%となった。

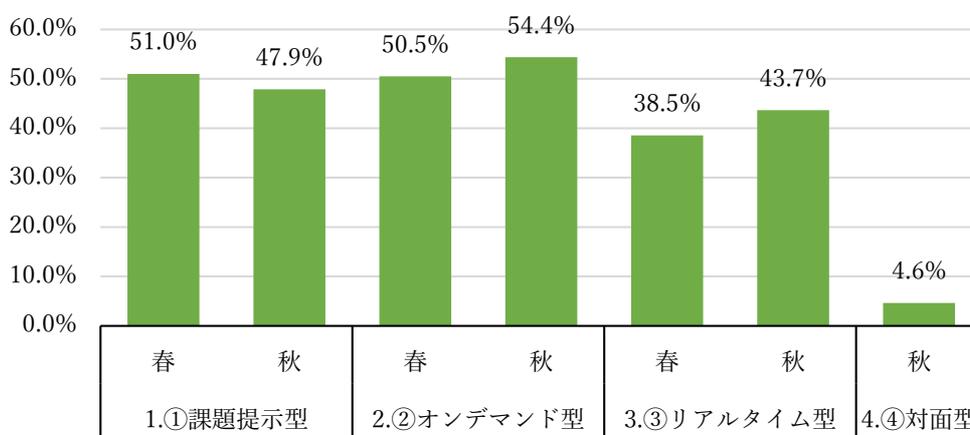


図5-20 不満のある授業の授業形式・春秋別

最後に授業方法について、最も有益な授業と不満のある授業で比較した（図5-21）。結果としては春学期と同様の傾向であった。「小テストや中間課題がある」については最も有益な授業（71.1%）と不満のある授業（66.5%）双方で高く、むしろ最も有益な授業の方が高い。しかしながら、「課題に対するフィードバックがある」（67.2%＞21.3%）や「授業内容や授業の進め方に学生の意見が反映される」（54.0%＞7.8%）、「授業時間内に履修者同士が学び合う」（45.4%＞12.8%）については、特に差のある項目であった。

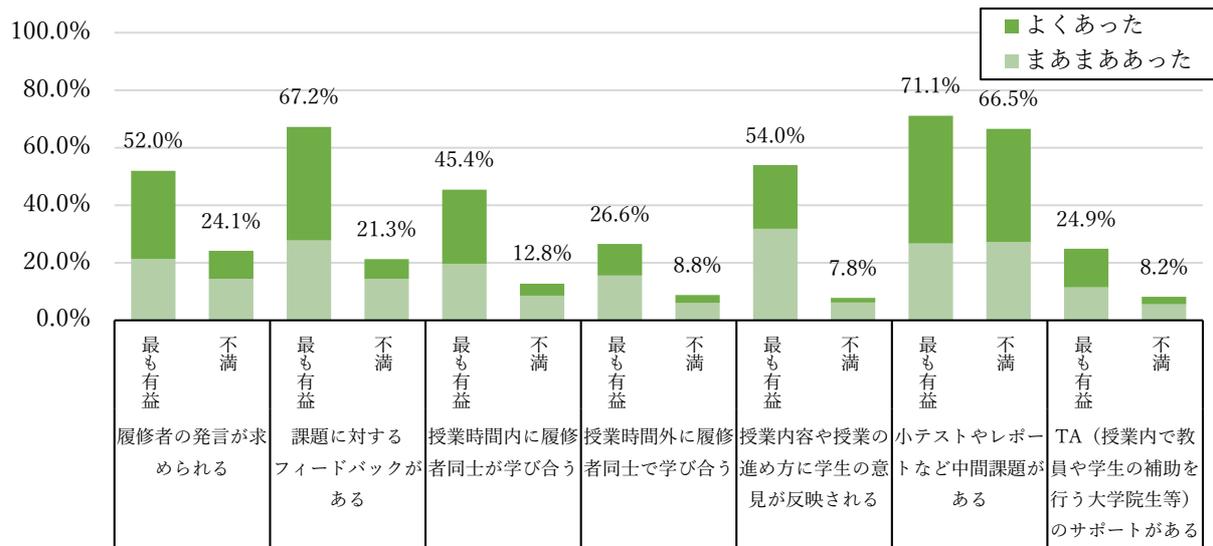


図5-21 最も有益・不満のある授業別の授業方法（秋学期）

## 第6章 秋学期にかけての変化

### 6-1. 対面授業の割合

本章は、秋学期にかけての変化について授業全体の状況や学生生活について示していく。まず、秋学期におけるオンライン授業の割合を示すと(図6-1)、最も多いのは「10割」(60.7%)で、「9割」(22.1%)、「8割」(6.9%)と続いた。秋学期においても多くの学生は、オンライン授業が中心であった。

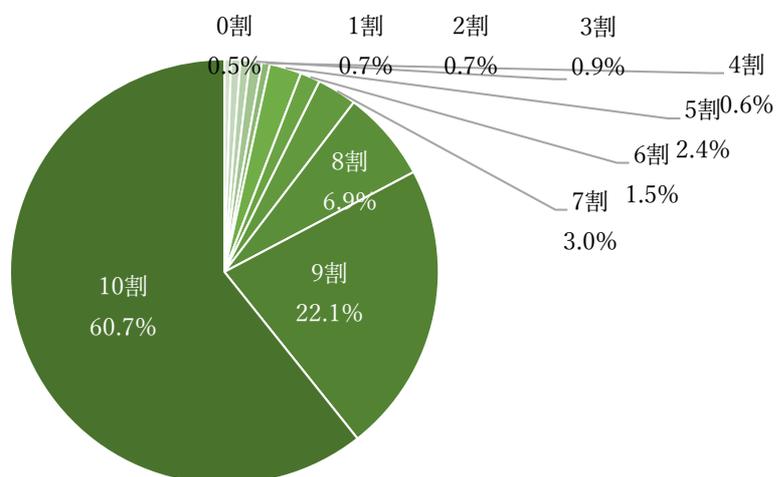


図6-1 オンライン授業の割合 (秋学期)

文理別に見ると(図6-2)、理系に比べて文系の方が、オンライン授業の割合が多かったようである。「10割」は文系が65.2%に対して理系47.6%であった。

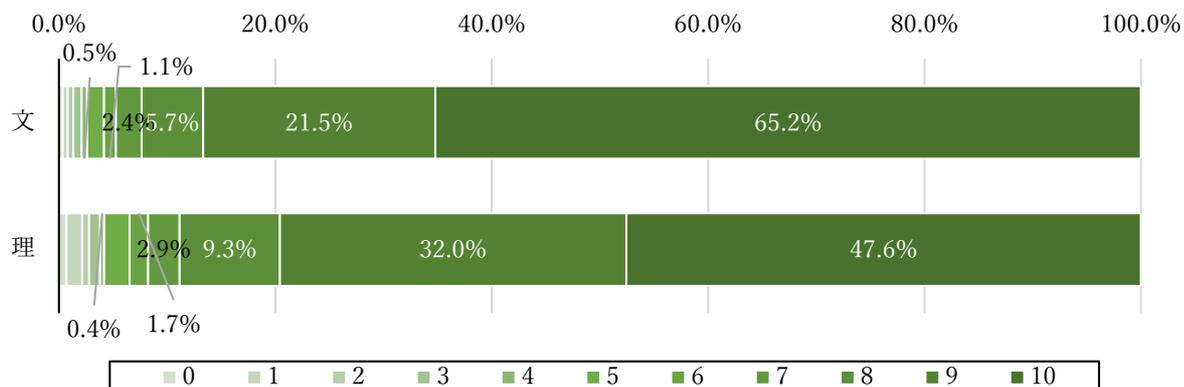


図6-2 オンライン授業の割合・文理別 (秋学期)

学年別を示すと(図6-3)、学年間で最もオンライン授業の割合が高いのは2年生で「10割」が69.2%となった。3年生においては、「10割」が54.0%と最も低い結果となった。また1年生においては、「10割」は60.6%であった。

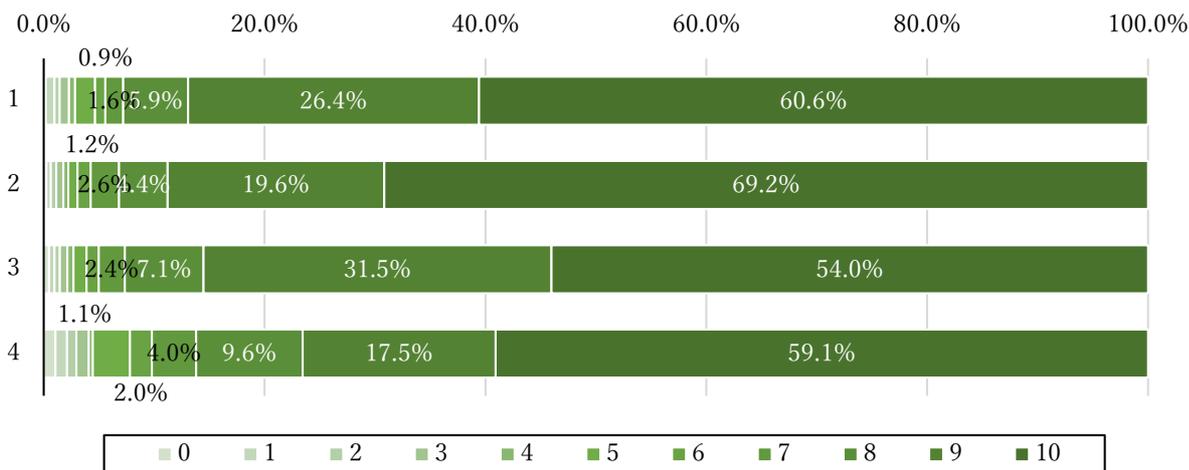


図 6-3 オンライン授業の割合・学年別（秋学期）

## 6-2. 満足度

学生の満足度について春学期・秋学期それぞれについて示すと（図 6-4）、「学生生活の満足度」、「オンライン等の授業の満足度」、「授業以外の学生生活、サークル活動等の満足度」、「授業以外の大学サービスの満足度」すべてにおいて春学期から秋学期にかけて「満足」（満足している＋まあまあ満足している）の割合が増加した。特に「オンライン等の授業の満足度」については、「満足」が 28.1%から 49.1%へ大きく増加した。

一方で、授業以外の学生生活や大学サービスについては、秋学期にかけて満足度は上昇しているものの「不満」（あまり満足していない＋まったく満足していない）の割合が「満足」の割合よりも多い。

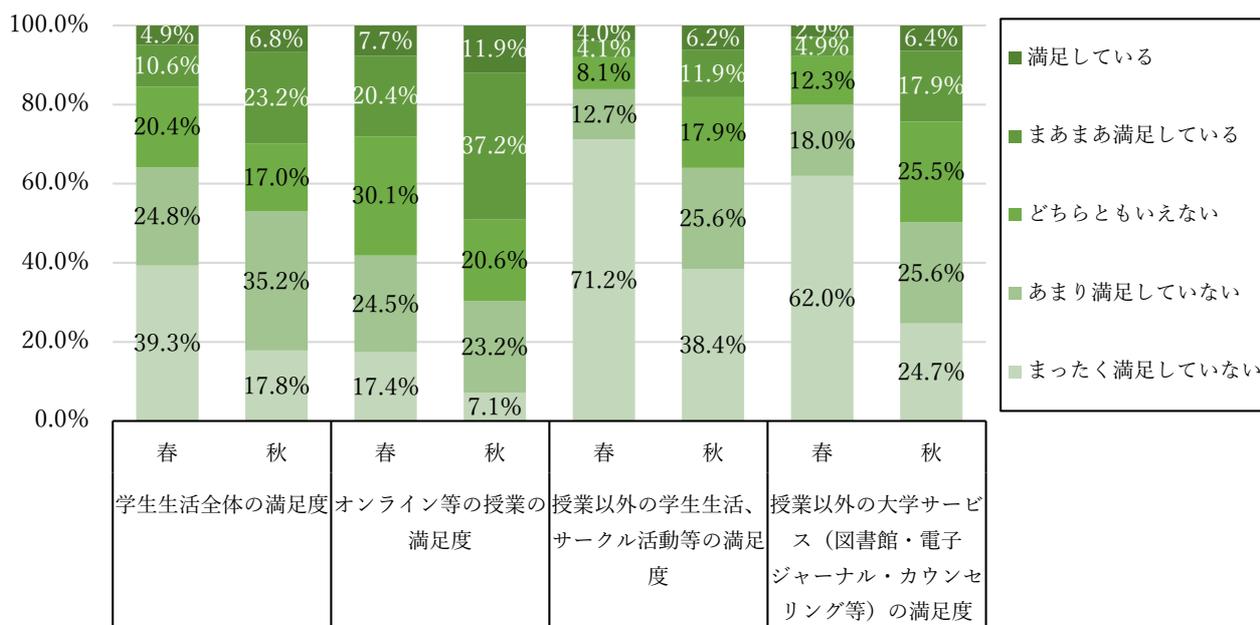


図 6-4 満足度・春秋別

### 6-3. 対面授業・ブレンド型授業と満足度

ここでは、本章第1節で示したオンライン授業の割合と第2節で示した満足度の関係について示す。オンライン・対面授業の割合は、満足度とどのような関係にあったのだろうか。なお満足度は、「まったく満足していない」=1、「あまり満足していない」=2、「どちらともいえない」=3、「まあまあ満足している」=4、「満足している」=5として、オンライン授業の割合別に平均値を示した。

「学生生活全体の満足度」について見ると（図6-5）、オンライン授業の割合が高い、低いからといって満足度が高くなるわけではない。「オンライン等の授業の満足度」については（図6-6）、オンライン授業割合が7割以上になると、やや高い傾向にある。「課外活動の満足度」（図6-7）、「大学のサービスの満足度」（図6-8）についてもオンライン授業の割合が高い、低いからといって満足度が高くなるわけではない。

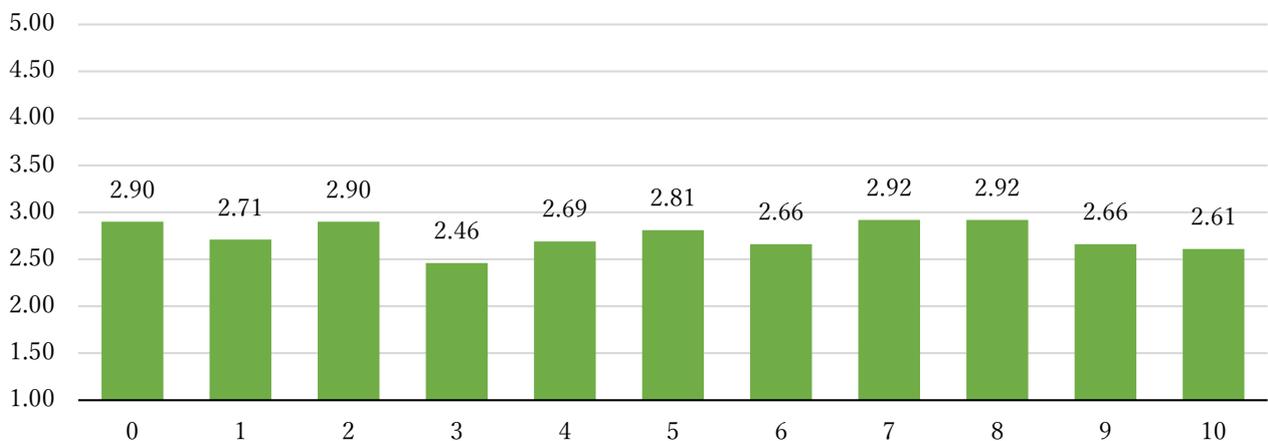


図6-5 オンライン授業割合別の学生生活全体の満足度（秋学期）

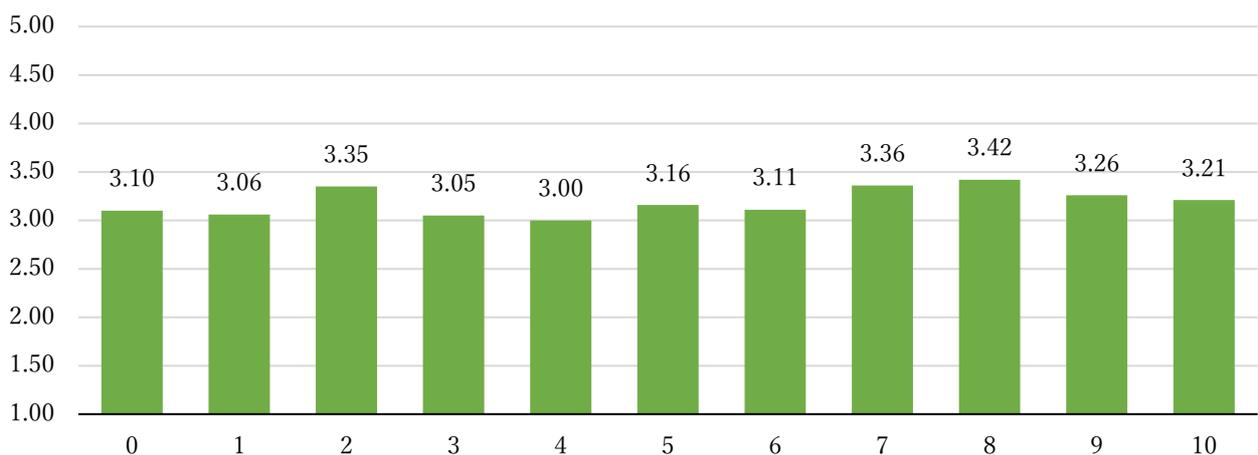


図6-6 オンライン授業割合別のオンライン等の授業の満足度（秋学期）

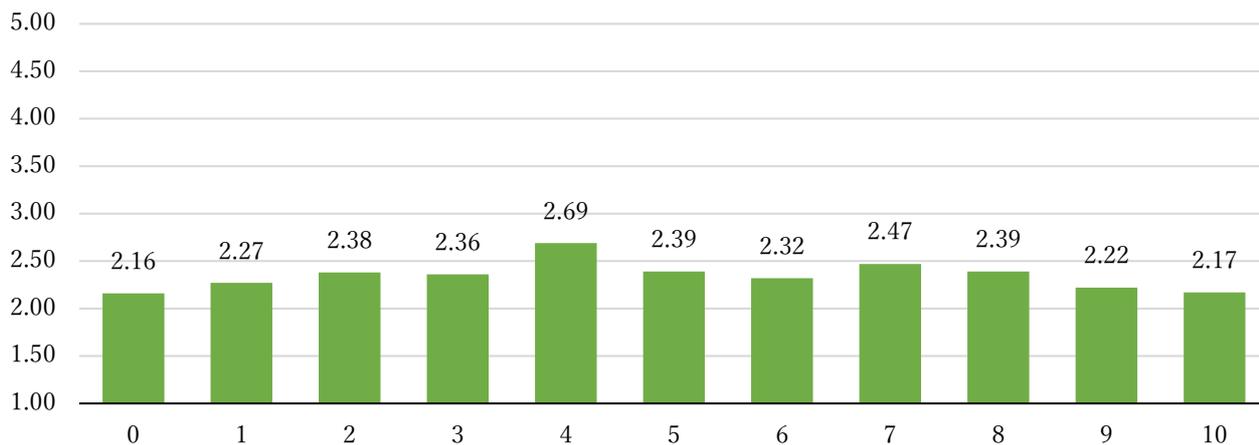


図6-7 オンライン授業割合別の課外活動の満足度（秋学期）

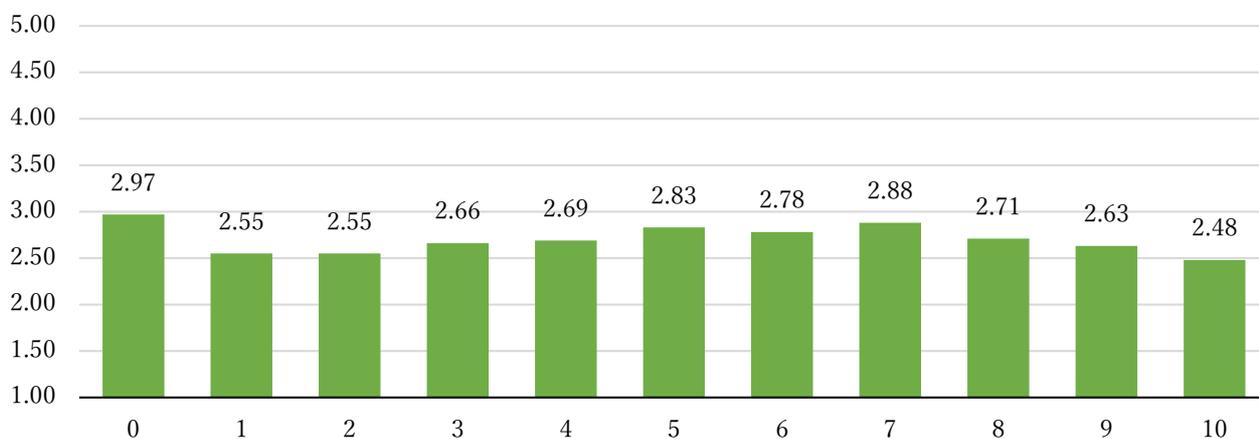


図6-8 オンライン授業割合別の大学のサービスの満足度（秋学期）

#### 6-4. 学習時間の変化

1週間あたりの予復習時間について春学期と秋学期の変化について示す。春学期末7月下旬においては、全体で「6～10時間」(13.7%)、「4～5時間」(12.9%)、「2～3時間」(12.4%)、「31時間以上」(12.2%)の順に高い結果となった。

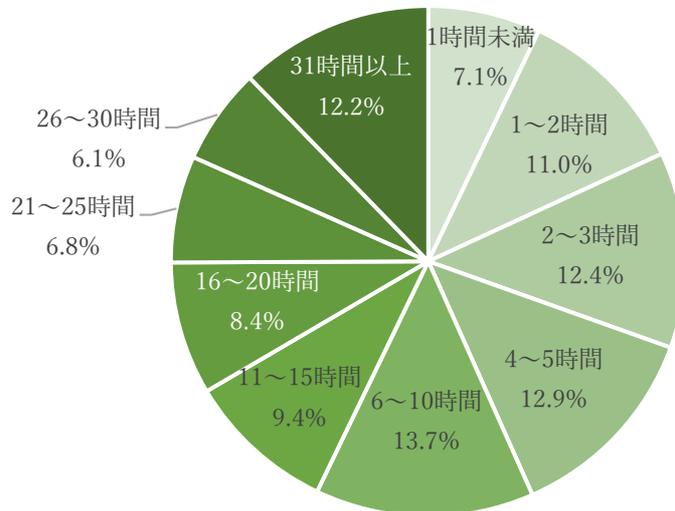


図6-9 2020年7月下旬の1週間あたりの予復習時間（春学期）

一方秋学期末1月下旬においては、全体で「1～2時間」(16.5%)、「2～3時間」(15.1%)、「4～5時間」(14.3%)、「1時間未満」(13.1%)の順に高い結果となった。春学期と比較すると、1週間あたりの予復習時間は減少した。

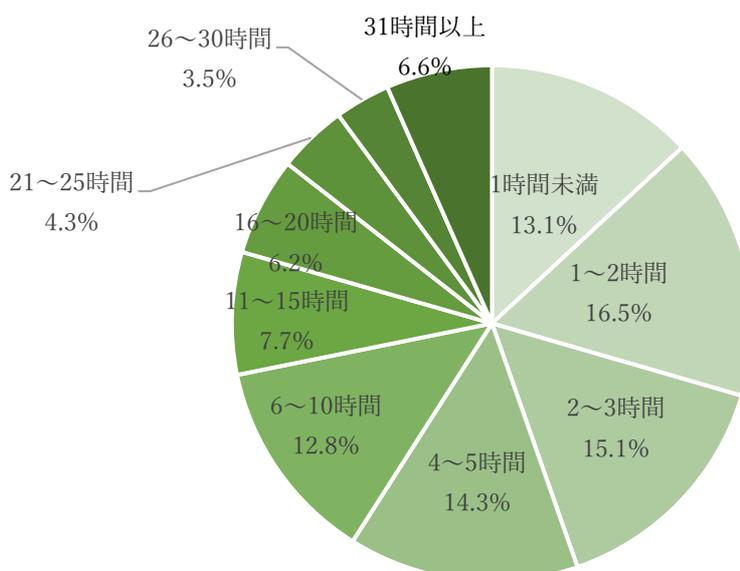


図6-10 2021年1月下旬の1週間あたりの予復習時間（秋学期）

予復習時間について、文系・理系別に春秋学期別の結果を示した（図6-11）。理系においては、春学期の「31時間以上」（24.3%）と最も多く、次に「26～30時間」（10.2%）が多かった。この層では、平均して平日の予復習時間が1日5時間以上と非常に高い結果となった。秋学期になると、「31時間以上」（13.7%）、「26～30時間」（5.6%）は春学期に比べると減少しているものの、「31時間以上」は最も高い結果であった。次に、「6～10時間」（12.8%）、「4～5時間」（11.6%）が続いた。

一方、文系では春学期には「6～10時間」（14.1%）が最も多く、次に「4～5時間」（13.5%）が多かった。秋学期には、「1～2時間」（17.6%）が最も高く、次に「2～3時間」（16.3%）が高かった。予復習時間については文系・理系で大きな違いが示された。



図6-11 1週間あたりの予復習時間・文理・春秋別

1週間あたりの予復習時間について、学年別に示す（図6-12）。なお、2年生以上については、春学期の調査において「昨年度秋学期の1週間あたりの予復習時間」を尋ね、3つの時点で比較した。

まず全体的な傾向としては、既に示している通り、春学期から秋学期にかけて予復習時間は減少傾向にあった。また、2年生以上においては、調査前年度秋学期よりも、春学期の予復習時間は増加していた。全体的には、春学期に一時的に増加した1週間あたりの予復習時間が秋学期には調査前年度並になったと読み取れる。

1年生については、春学期は「31時間以上」（14.2%）が最も多く、秋学期は「6～10時間」（14.7%）が最も多かった。2年生については、春学期は「31時間以上」（18.7%）が最も多く、秋学期は「4～5時間」（14.7%）が最も多かった。3年生については、春学期は「31時間以上」（14.8%）が最も多く、秋学期は「2～3時間」（19.0%）が最も多かった。4年生については、春学期は「6～10時間以上」（11.5%）が最も多く、秋学期は「1時間未満」（30.5%）が最も多かった。

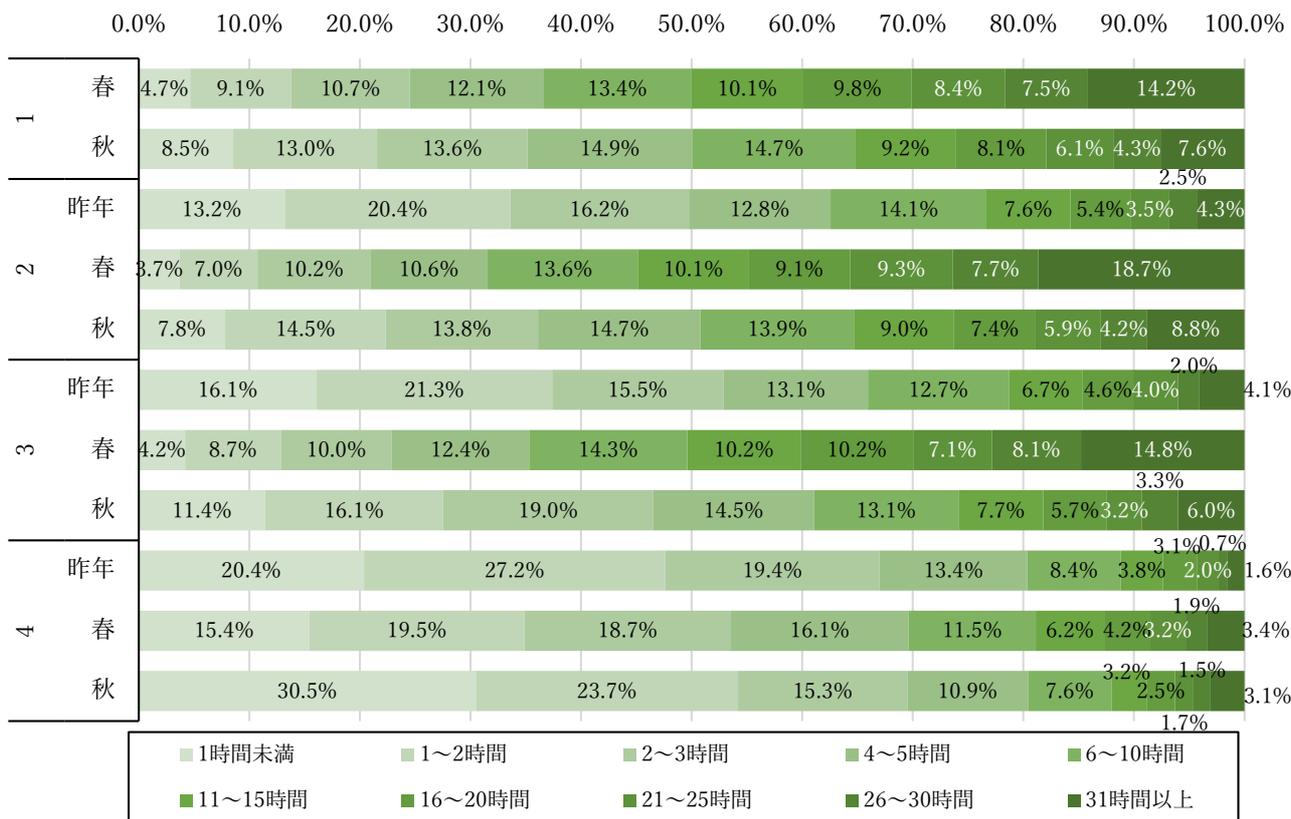


図6-12 1週間あたりの予復習時間・学年・春秋別

### 6-5. 学生生活の変化

次に学生生活の変化について示す(図6-13)。緊急事態宣言下や感染予防による行動制限によって学生の生活は春学期から秋学期にかけて、どのように変化したのだろうか。

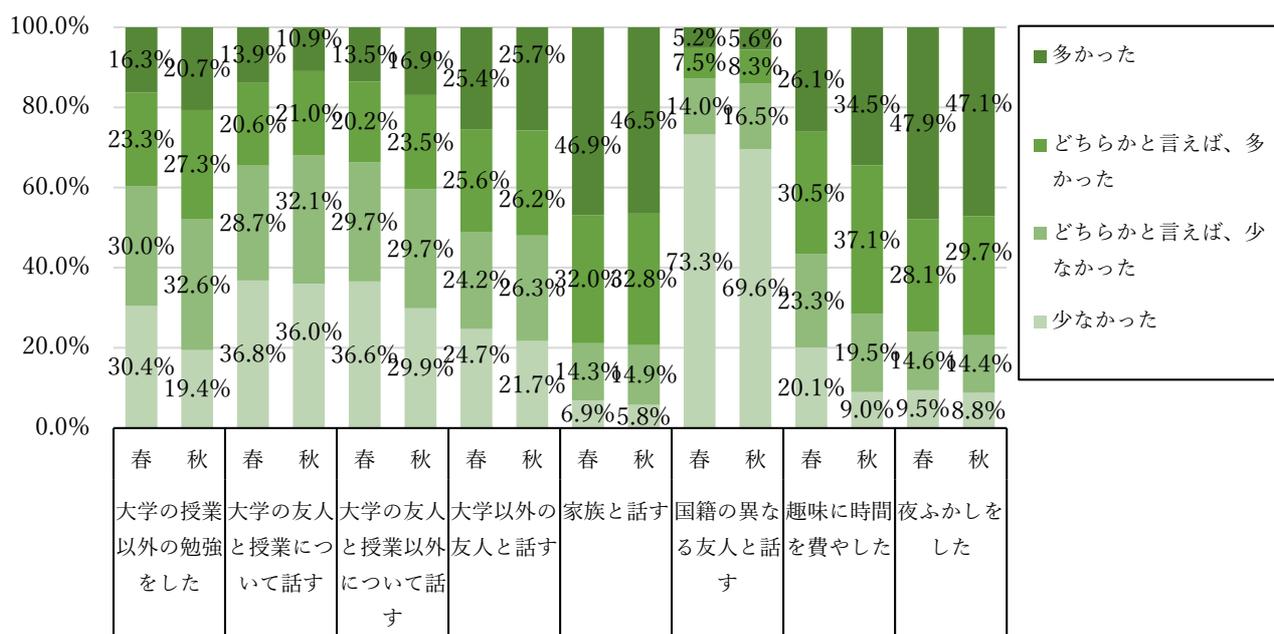


図6-13 学生生活の状況(春学期)

春学期と秋学期で変化した項目を指摘すると、「大学の授業以外の勉強をした」の「多かった」（「どちらかと言えば、多かった」＋「多かった」）が、39.6%から48.0%に増加した。また、「趣味に時間を費やした」も「多かった」の割合が、56.6%から71.6%に増加した。前節で春学期の予復習時間が多かったことを考えると、春学期に授業の予復習時間以外の学習に割ける時間が少なかったものと考えられる。さらに、「大学の友人と授業以外について話す」の「多かった」は33.7%から40.4%に増加した。対面授業の再開や課外活動の制限緩和によって、より授業以外の話題を話せるようになったのかもしれない。この3項目以外については春学期、秋学期にかけて大きな変化は見られなかった。生活習慣に該当する項目「夜ふかしをした」も「多かった」割合は、春学期76.0%、秋学期76.8%とそれほど変化がない。

次に、春学期の文系・理系別に示す（図6-14）。理系と比較して文系は「大学の授業以外の勉強をした」（41.6%＞32.2%）、「家族と話す」（80.2%＞73.9%）、「趣味に時間を費やした」（60.0%＞44.1%）の項目がより高い。一方、文系と比較して理系では、「大学の友人と授業について話す」（44.1%＞31.9%）がより高い結果となった。先述したとおり、理系では文系と比較して予復習時間が多く、授業に関して友人とコミュニケーションをとる機会が多く、授業以外の活動に割ける時間が文系より少なかったものと推察される。

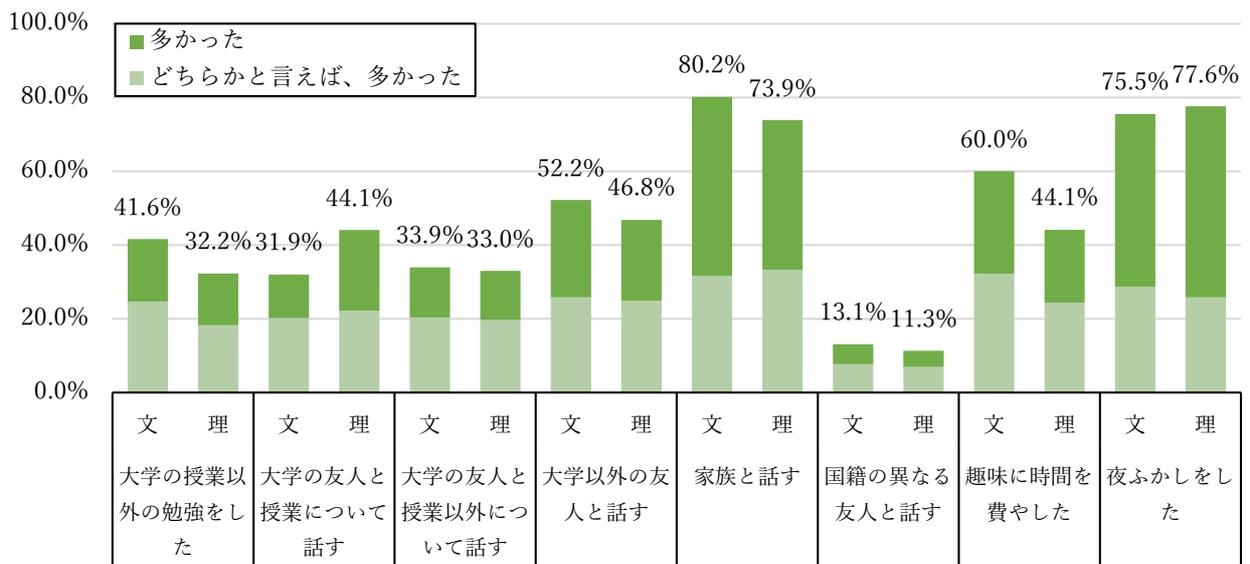


図6-14 学生生活・文理別（春学期）

学年別に見ると（図6-15）、学年間で違いが見られたものとして「大学の友人と授業について話す」、「大学の友人と授業以外について話す」、「大学以外の友人と話す」友人関係に関する項目があげられる。具体的には、1年生において「大学の友人と授業について話す」（26.4%）、「大学の友人と授業以外について話す」（23.3%）が他学年と比較して低く、「大学以外の友人と話す」（57.3%）については他学年よりも高い結果となった。大学入学から間もなくかつ急遽オンライン授業が展開されたため、大学の友人、つまり高校の同級生等と話す機会が比較的多かったのかもしれない。

また、「大学の授業以外の勉強をした」や「趣味に時間を費やした」においては学年が上がると割合も高くなる傾向にある。下位学年ほど授業の予復習時間が多かったため、それ以外の勉強に割ける時間が相対的に少なかったものと考えられる。

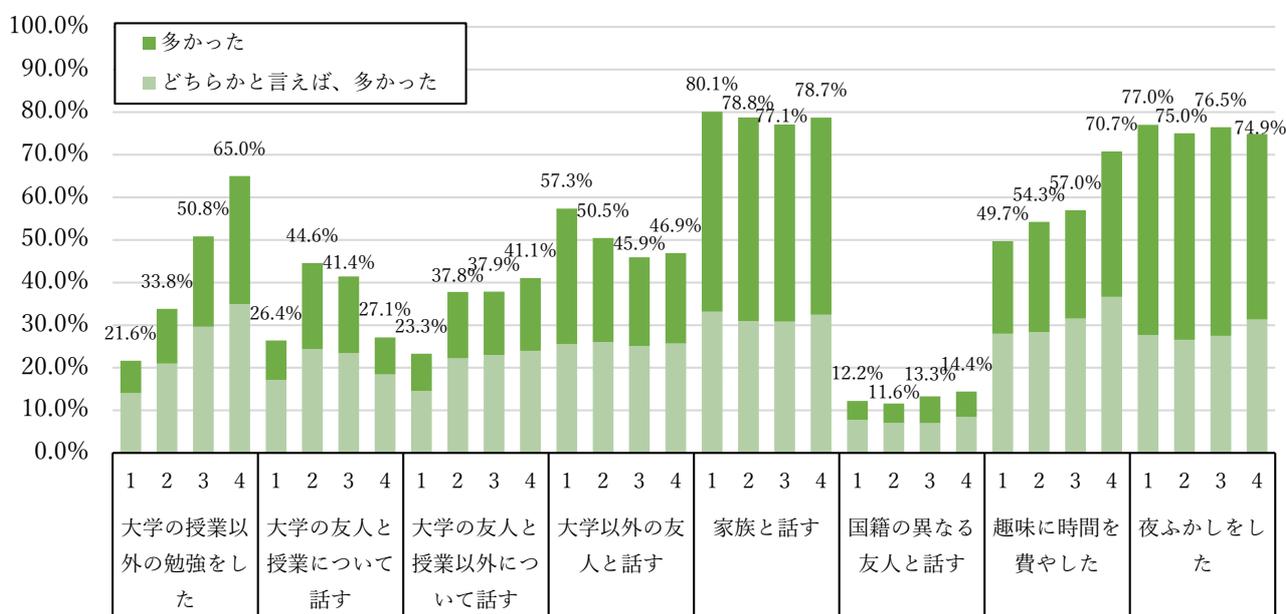


図6-15 学生生活・学年別（春学期）

これらは秋学期になってどのように変化したのだろうか。同様に、文系・理系別で示す（図6-16）。理系と比較して文系は「大学の授業以外の勉強をした」（50.2%>39.9%）、「家族と話す」（80.5%>75.3%）、「趣味に時間を費やした」（74.2%>62.1%）の項目が春学期と同様により高い。一方、秋学期においては、「大学の友人と授業について話す」が文系41.0%、理系38.4%とそれほど違いは見られなかった。

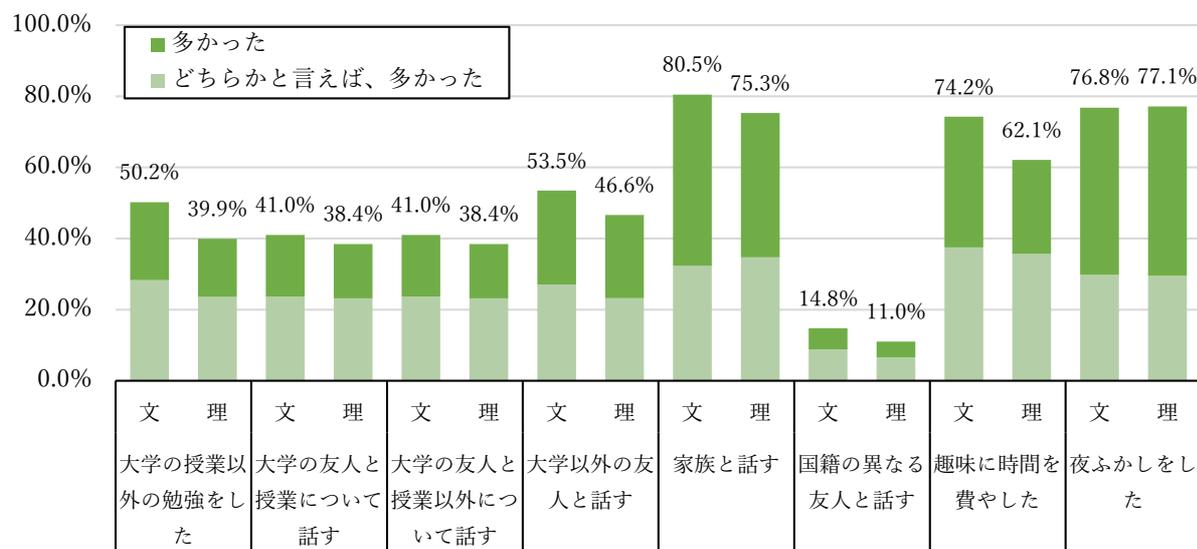


図6-16 学生生活・文理別（秋学期）

同じく学年別で示すと（図6-17）、学年間で違いが見られたものとして春学期と同様に「大学の友人と授業について話す」、「大学の友人と授業以外について話す」、「大学以外の友人と話す」といった友人関係に関する項目があげられる。具体的には、1年生において「大学の友人と授業について話す」（31.2%）、「大学の友人と授業以外について話す」（35.6%）が他学年と比較して低く、「大学以外の友人と話す」（54.8%）については他学年よりも高い結果となった。秋学期においては1年生の友人と話す機会は学年間の差はあるが、春学期と比較すると増加していた。

また、「大学の授業以外の勉強をした」や「趣味に時間を費やした」においては学年が上がる割合も高くなる傾向は春学期と同様である。ただし、「趣味に時間を費やした」については学年間の差が春学期と比べて減少した。下位学年においても授業以外の活動に費やせる時間があつたものと推察される。

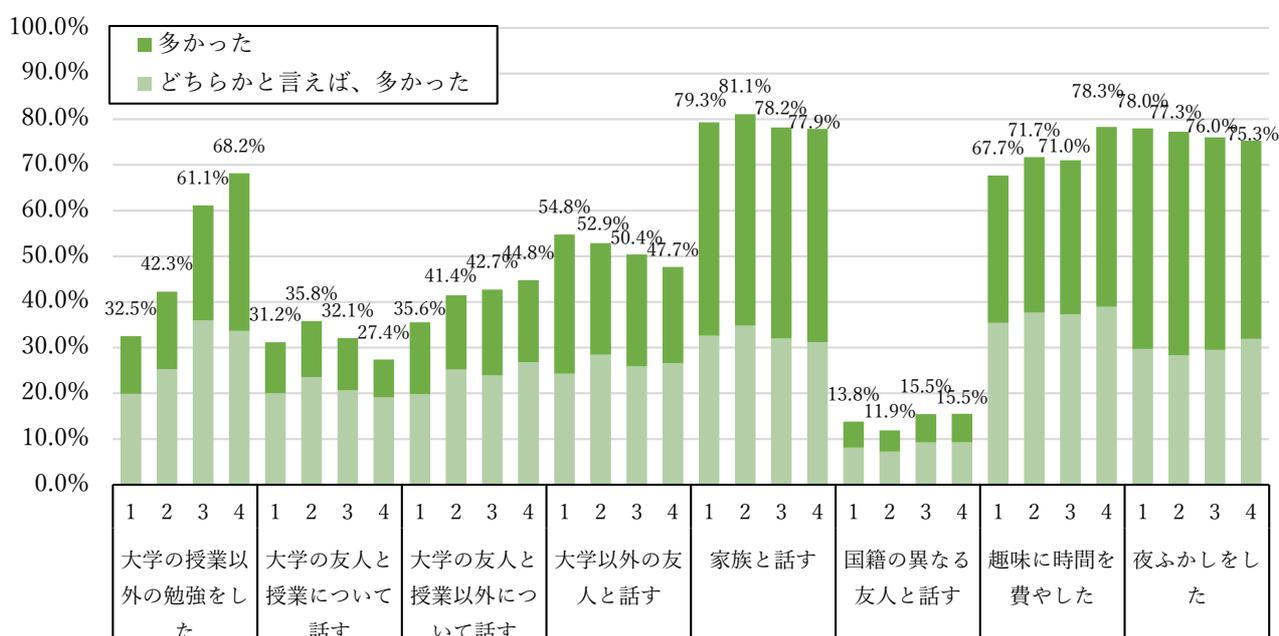


図6-17 学生生活・学年別（秋学期）

## 第7章 今後の対面・オンライン授業の割合

### 7-1. 春学期の希望

本章では、学生が希望するオンライン授業の割合について示す。なお、質問文では「感染症リスク下における場合」と「感染症リスクがなくなった場合」を設定した。

春学期において、「感染症リスク下における場合」のオンライン授業の希望割合で最も高かったのは、「10割」(21.0%)で、次に「8割」(19.0%)、「7割」(15.7%)の順に高かった。「0割」、つまりすべて対面授業を希望したのは1.8%であった。

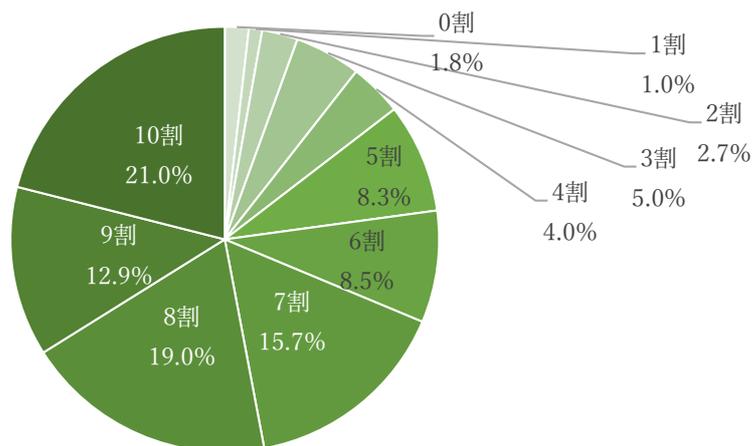


図7-1 感染症リスク下におけるオンライン授業の希望割合（春学期）

「感染症リスクがなくなった場合」のオンライン授業の希望割合で最も高かったのは、「2割」(17.8%)で、次に「3割」(16.9%)、「1割」(12.2%)の順に高かった。すべて対面授業を希望する「0割」は16.9%であった。残りの83.1%は、割合の差はありつつもオンライン授業の継続を希望していた。

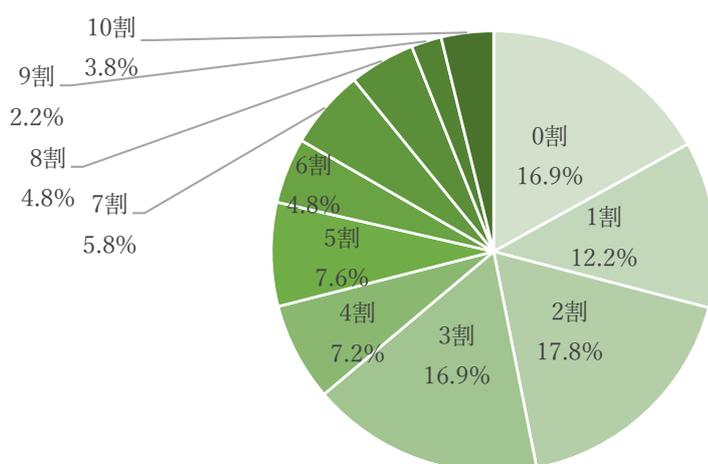


図7-2 感染症リスクがなくなった場合におけるオンライン授業の希望割合（春学期）

春学期における結果を文系・理系別に示した（図7-3）。なお、「感染症リスク下における場合」をウィズ・コロナ、「感染症リスクがなくなった場合」をポスト・コロナと表記した。ウィズ・コロナにおいては、理系の方がオンライン授業を希望する割合がやや高い。7割以上では、文系66.7%に対して、理系70.6%であった。ポスト・コロナにおいても、理系の方がオンライン授業を希望する割合がやや高い。3割以上は、文系49.3%に対して、理系55.9%であった。



図7-3 ウィズ・ポストコロナにおけるオンライン授業の希望割合・文理別（春学期）

次に学年別に示す（図7-4）。ウィズ・コロナにおいては、3年生がオンライン授業を希望する割合がやや高い。7割以上では、3年生73.5%であった。一方、1年生では、7割以上を希望する割合は、59.5%となった。ポスト・コロナにおいても、3年生がオンライン授業を希望する割合がやや高い。3割以上は、41.3%であった。一方、1年生の3割以上は25.4%と学年間で最も少なく、ポスト・コロナ下では、多くの対面授業を希望している。1年生の「0割」（26.2%）の多さも目立つ結果である。

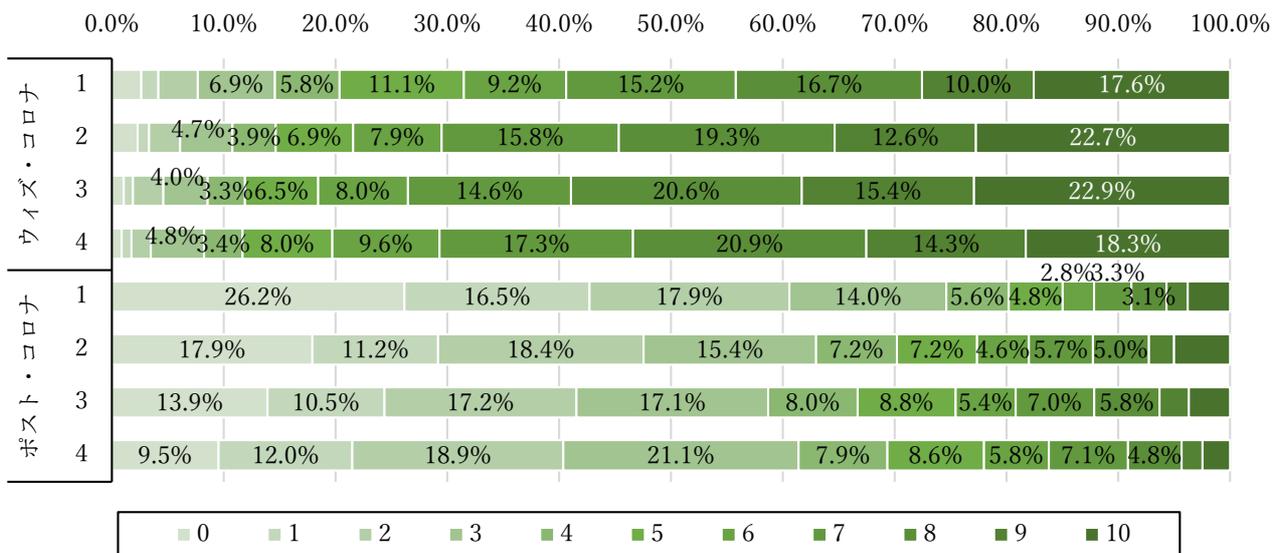


図7-4 ウィズ・ポストコロナにおけるオンライン授業の希望割合・学年別（春学期）

## 7-2. 秋学期の希望

秋学期にも今後のオンライン授業の希望割合について同様に尋ねた。「感染症リスク下における場合」のオンライン授業の希望割合で最も高かったのは、「10割」(18.5%)で、次に「8割」(16.2%)、「7割」(16.0%)の順に高かった。「0割」(1.4%)は春学期同様に低い結果であった。傾向としては春学期とそれほど変化はない。

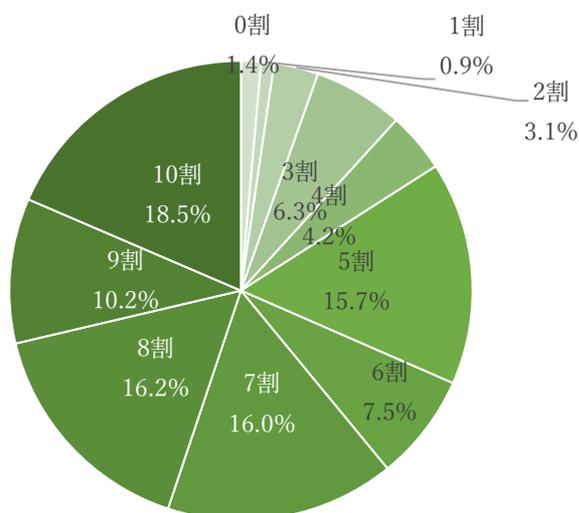


図7-5 感染症リスク下におけるオンライン授業の希望割合（秋学期）

「感染症リスクがなくなった場合」のオンライン授業の希望割合で最も高かったのは、「3割」(16.6%)で、次に「5割」(16.2%)、「2割」(14.1%)の順に高かった。すべて対面授業を希望する「0割」は11.5%であった。残りの88.5%は、割合の差はあってもオンライン授業の継続を希望していた。春学期と比較すると、オンライン授業の割合がより高くなっており、3割以上を希望する割合は春学期53.1%から秋学期66.1%へ増加している。

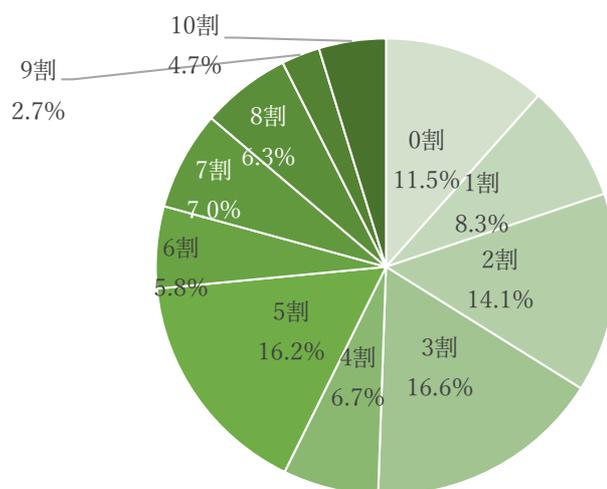


図7-6 感染症リスクがなくなった場合におけるオンライン授業の希望割合（秋学期）

秋学期における結果を文系・理系別に示した（図7-7）。ウィズ・コロナにおいては、春学期同様に理系の方がオンライン授業を希望する割合がやや高い。7割以上では、文系 59.2%に対して、理系 62.9%であった。ポスト・コロナにおいては、春学期とは異なりあまり違いは見られなかった。3割以上は、文系 64.4%に対して、理系 66.1%であった。

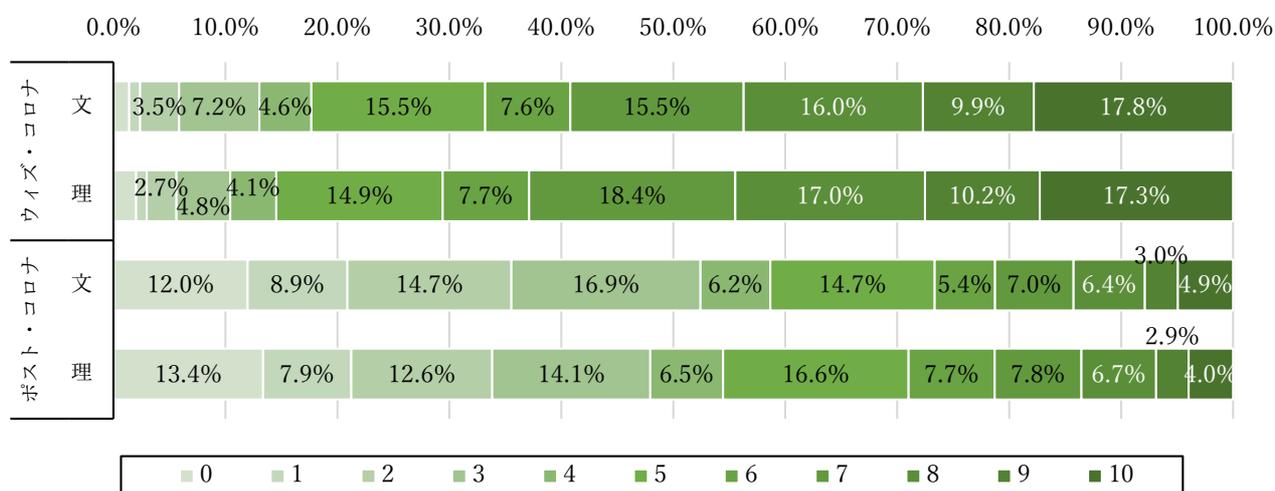


図7-7 ウィズ・ポストコロナにおけるオンライン授業の希望割合・文理別（秋学期）

次に学年別に示す（図7-8）。ウィズ・コロナにおいては、春学期と同様、3年生がオンライン授業を希望する割合がやや高い。7割以上では、3年生 68.3%であった。一方、1年生では、7割以上を希望する割合は、51.7%となった。ポスト・コロナにおいても、3年生がオンライン授業を希望する割合がやや高い。3割以上は、54.8%であった。一方、1年生の3割以上は 44.4%と学年間で最も少なく、比較的多くの学生がポスト・コロナ下では、対面授業を希望している結果となった。

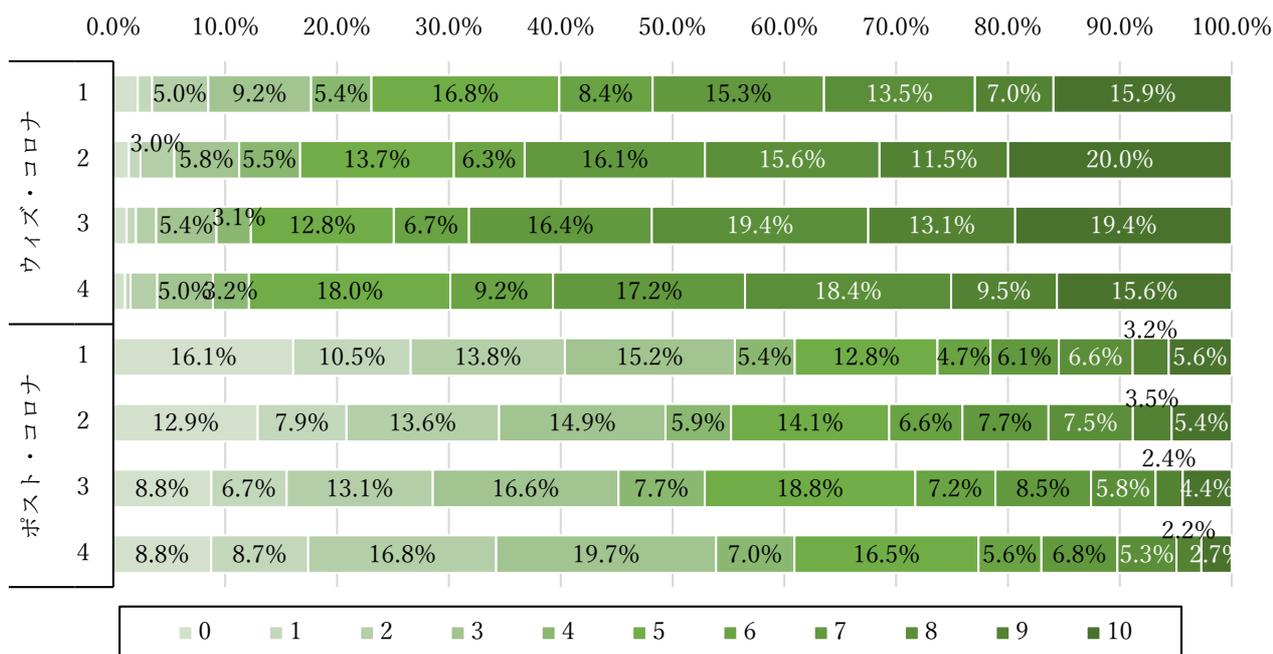


図7-8 ウィズ・ポストコロナにおけるオンライン授業の希望割合・学年別（秋学期）

## 第8章 大学院生の学習・生活環境

### 8-1. 新型コロナウイルス感染症の影響

本章では、これまで扱ってきた学部生ではなく、大学院生に着目し、オンライン授業下における学生生活などを示す。

図8-1では、履修地域を示す。学部生と異なり、大学院生に特徴的なのは、「首都圏の実家以外」の割合が高い点にある。ただし、その割合は春学期32.7%、秋学期32.0%とあまり変わらない。一方で「首都圏以外の国内」が春学期8.2%から秋学期5.4%に減少し、「海外」は春学期5.5%から8.6%に増加した。

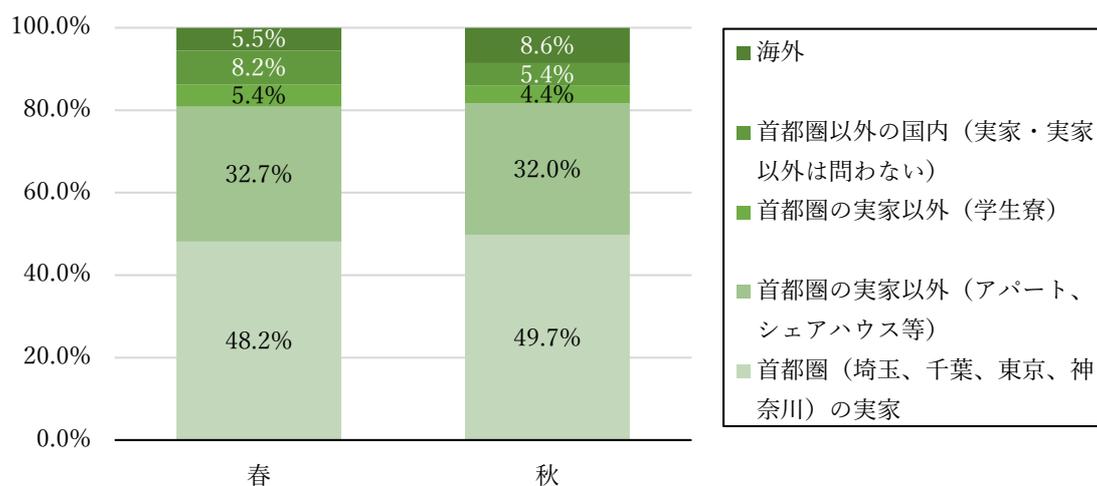


図8-1 大学院生の履修地域・春秋別

新型コロナウイルスの影響として、大学院生に影響のあるものを図8-2に示す。回答は複数回答で、該当するものの選択率となる。最も影響のあったのは、「アルバイト収入が減少した」(52.9%)であり、「気分が落ち込んだり、食欲がないことがあった」(39.5%)が次に高かった。

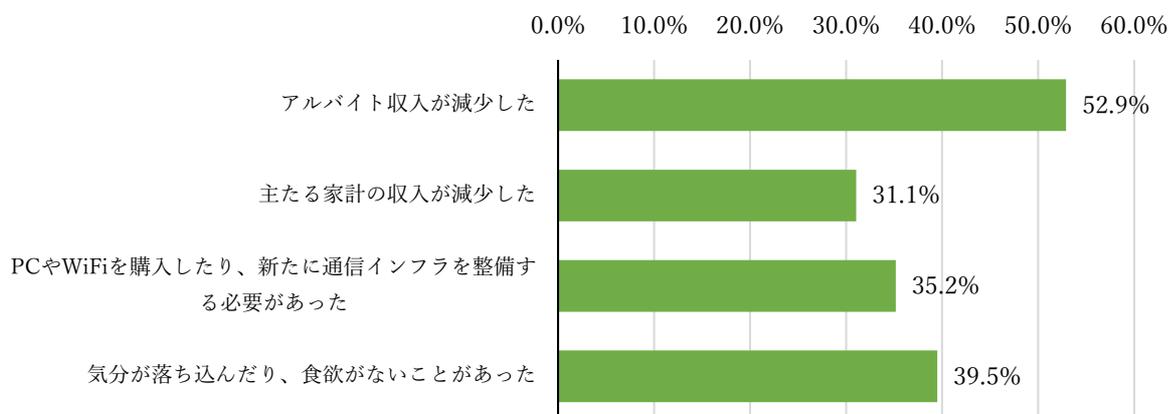


図8-2 大学院生の新型コロナウイルスの影響 (春学期)

次に、春学期に大学院生が活用した経済的支援の状況を示す（図8-3）。最も活用されていたのは「早稲田大学の緊急支援金（10万円）」（25.7%）であり、回答者の4人に1人が活用していた。次に、「文部科学省による支援（「学びの継続」のための「学生支援緊急給付金）」（13.7%）が高かった。

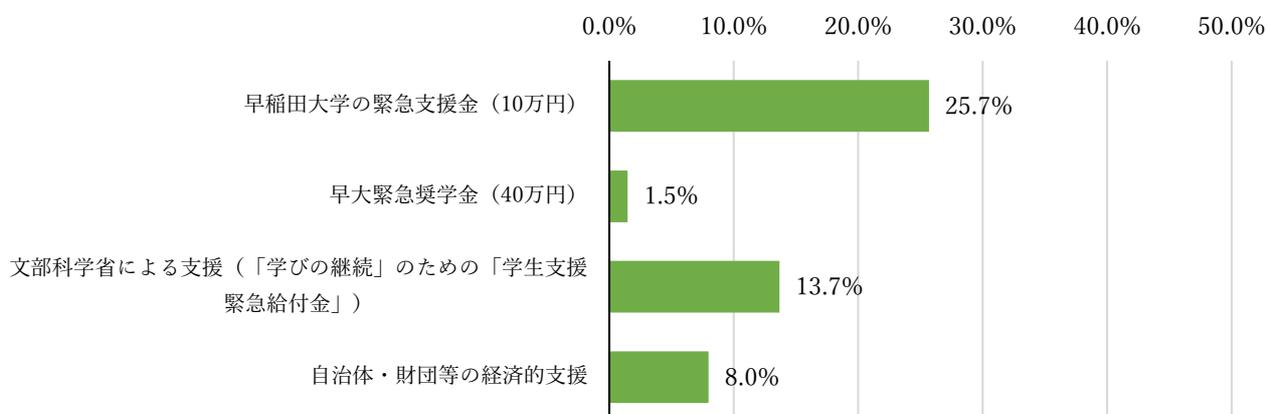


図8-3 大学院生の活用した経済的支援（春学期）

春学期の非経済的支援の利用状況について見ると（図8-4）、「Learn Anywhere」（19.5%）、「早稲田大学図書館の郵送サービス」（7.4%）など大学が提供するサービスの利用状況が選択肢のなかでは高い結果となった。また「早稲田大学のモバイルWiFiルーターの無償貸与」（5.7%）も学部生と比較して若干高い項目もあった。

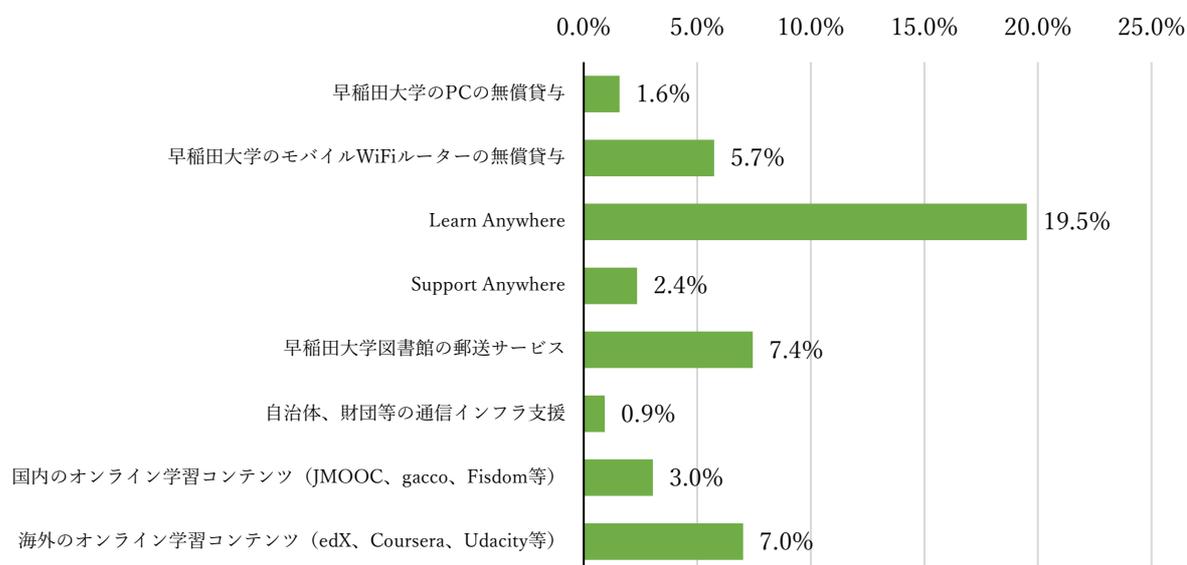


図8-4 大学院生の活用したサービス（春学期）

## 8-2. オンライン授業のメリット・デメリット

次にオンライン授業のメリットとデメリットについて示す。春学期と秋学期にかけては大きな変化はなかった。最も高かったのは、「自宅で学習できる」で、次に「自分のペースで学習できる」や「通学時間を学習に有効活用できる」があげられた。

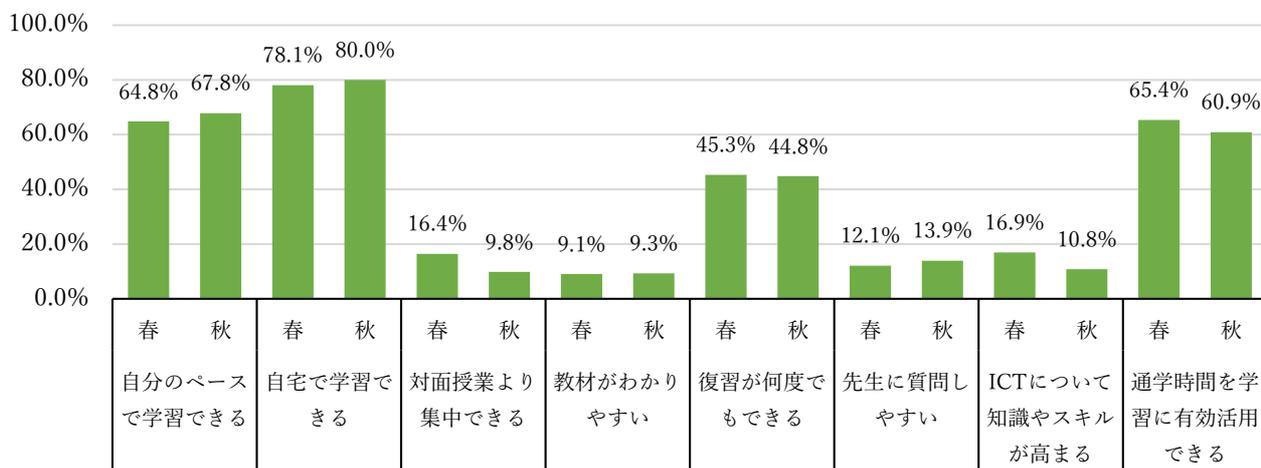


図8-5 大学院生のオンライン授業のメリット・春秋別

一方、デメリットでは、春学期・秋学期ともに比較的高い項目として、「目や耳、肩など身体的な疲れをより感じる」や「友達と一緒に学べず孤立感を感じる」といった項目であった。前者については春学期49.9%から秋学期44.3%へと微減したものの、後者については春学期、秋学期も同程度となった。また、「集中力が続かない」は春学期39.0%から40.9%に微増した。

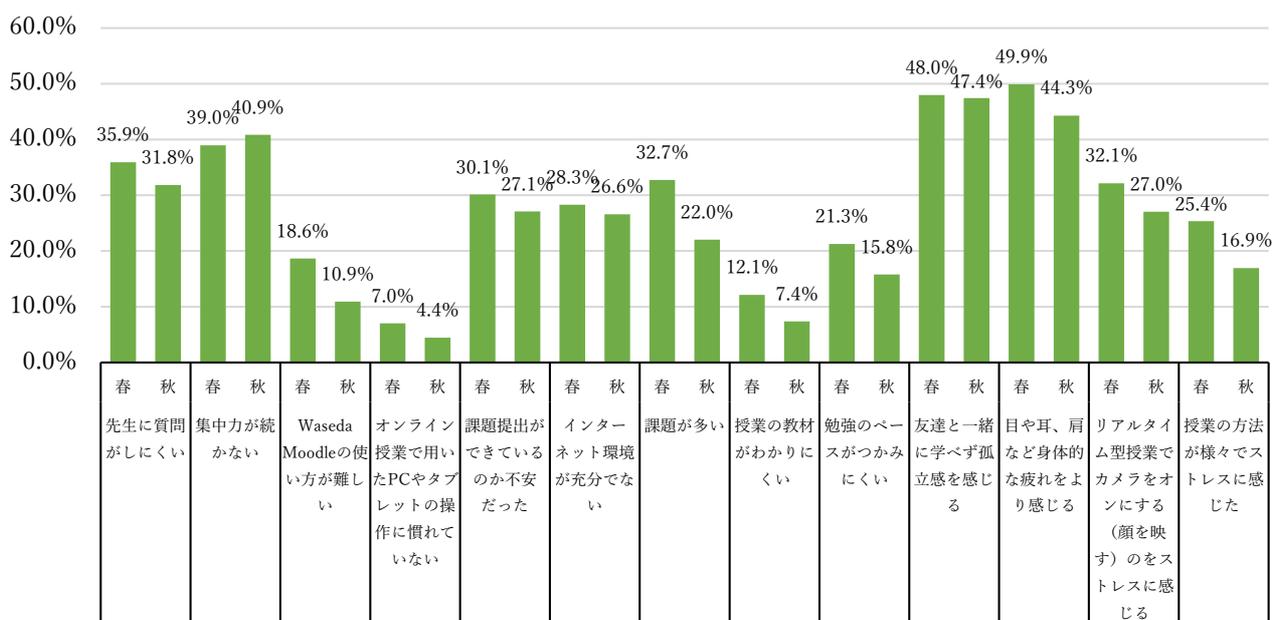


図8-6 大学院生のオンライン授業のデメリット・春秋別

### 8-3. 満足度・学生生活の変化

大学院生のそれぞれの満足度はどう変化したのか、春秋別に示した（図8-7）。すると、全ての項目で満足している割合（「満足している」＋「まあまあ満足している」）は高くなっている。特に顕著なのが、「授業以外の大学サービスの満足度」であり、春学期の満足している割合18.5%から秋学期41.2%に大きく増加した。図書館が閉館していたこともあり、春学期には大学院生の不満の割合が特に高かったのかもしれない。秋学期には大きく改善されたと読み取れる。

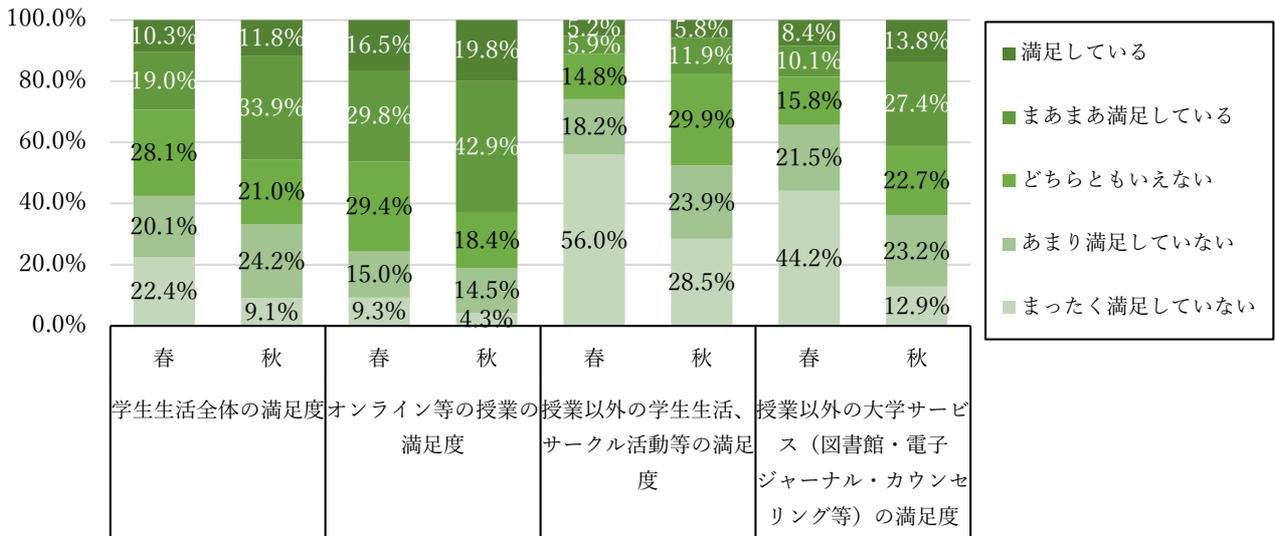


図8-7 大学院生の満足度・春秋別

学生生活の状況について春学期・秋学期別に示すと、春学期と秋学期で特に大きな変化はなかった。あえて言及するとすれば、「大学の友人と授業以外について話す」が、多いと回答した割合（「多かった」＋「どちらかと言えば、多かった」）が春学期34.8%から秋学期40.5%に増加した点である。

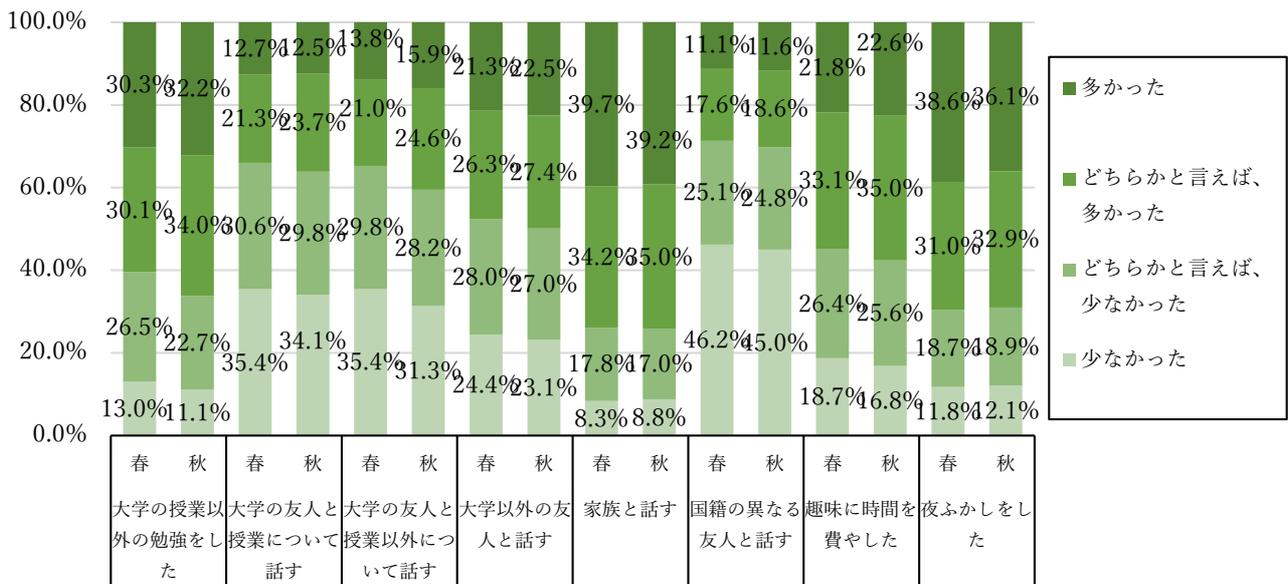


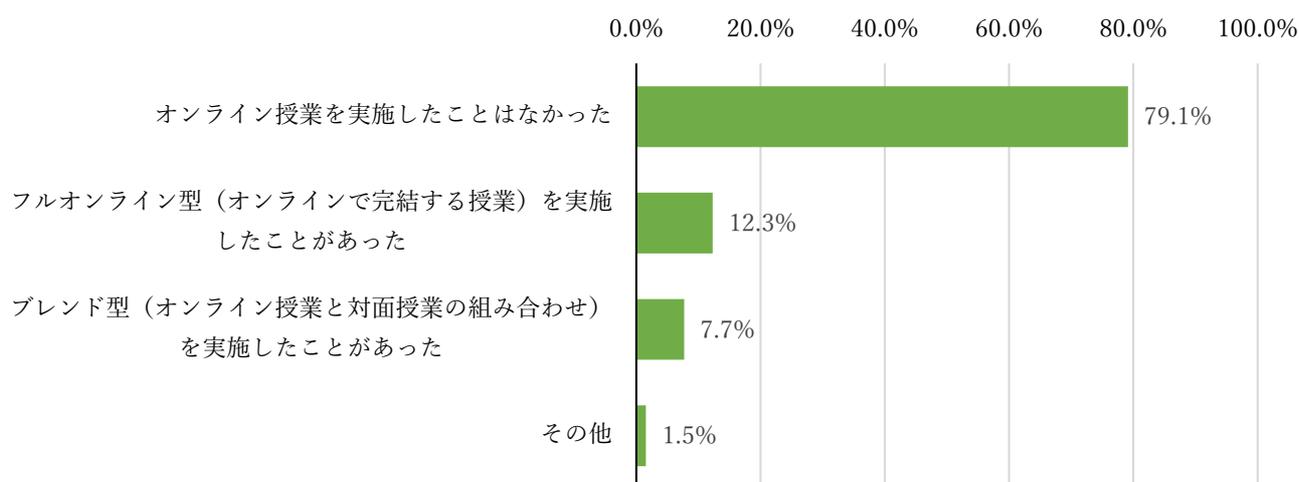
図8-8 大学院生の学生生活の状況・春秋別

## 第3部 教員

### 第9章 授業開始前の状況

#### 9-1. オンライン授業を実施した経験

春学期のアンケートで、学期開始以前にオンライン授業を担当した経験があったかどうかを尋ねたところ、回答者の約8割の教員が「担当したことはない」と回答した。つまり、2020年度春学期開始時には、オンライン授業を行うのが初めてという教員が大多数の中、全授業がオンライン化されるという状況であった。



\* 「オンライン授業を実施したことはなかった」以外、複数回答可

図9-1 春学期開始前のオンライン授業実施経験

#### 9-2. 授業に関する情報収集

オンライン授業に関する情報源は、春学期・秋学期ともに「Teach Anywhere」と答えた回答がもっとも多く、春学期には約8割、秋学期には6割強の教員が利用していた。また、「同僚へのヒヤリング」も両学期で共通して割合が高く、両学期ともに教員の半数近くが同僚の教員同士で情報交換をしていた。春学期と秋学期では、各学期の状況に合わせて選択肢の項目内容を調整したため一概に比較することはできないが、全体として情報源の利用の度合いは春学期から秋学期にかけて減少した傾向にある。教員がオンライン授業に慣れるにつれ、情報収集の方法や頻度も落ち着いていったものと考えられる。

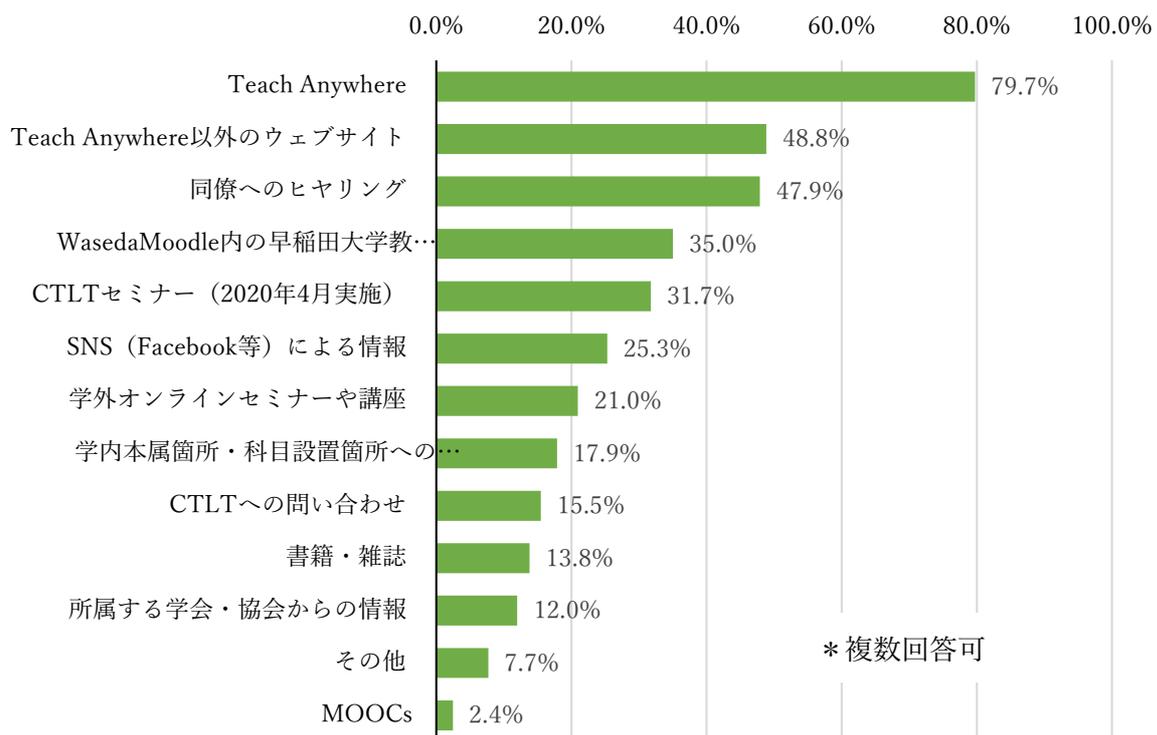


図 9 - 2 情報収集のために利用した媒体（春学期）

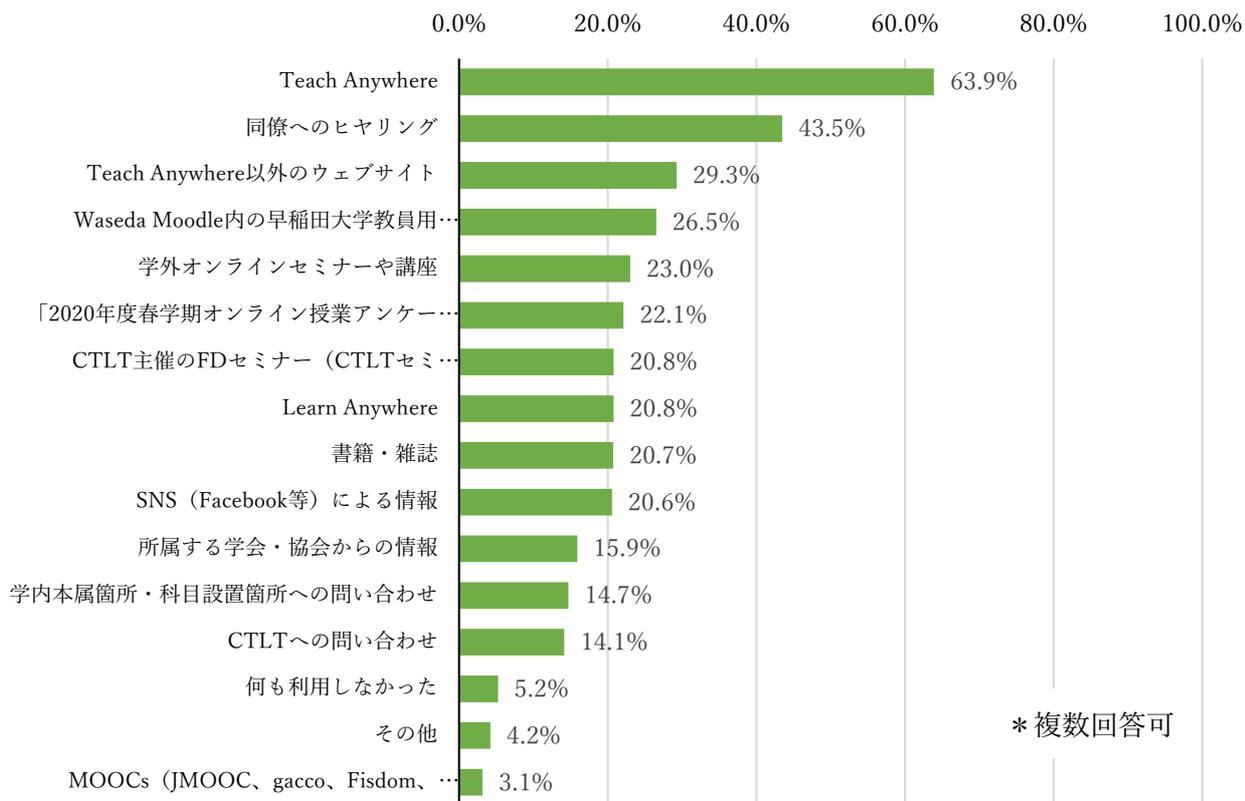


図9-3 情報収集のために利用した媒体（秋学期）

## 第10章 授業区分別の授業の実態

### 10-1. 授業形態

春学期は全学で全授業がオンライン化された。したがって、後述の授業区分別の比較においては、どの科目も同様に完全なオンライン授業であったという前提になる。一方、秋学期には一部で対面授業が再開され、多様な授業形態が展開された。ここでは秋学期の授業形態について授業区分別に振り返る。

図10-1は秋学期の授業区分別の授業形態を示している。外国語科目と講義科目は9割以上がすべてオンライン授業だったのに対し、演習/ゼミ科目、実習/実験/実技科目、研究指導科目での完全なオンライン授業は5割強にとどまり、それ以外の4割前後はハイブリッド型で実施された。

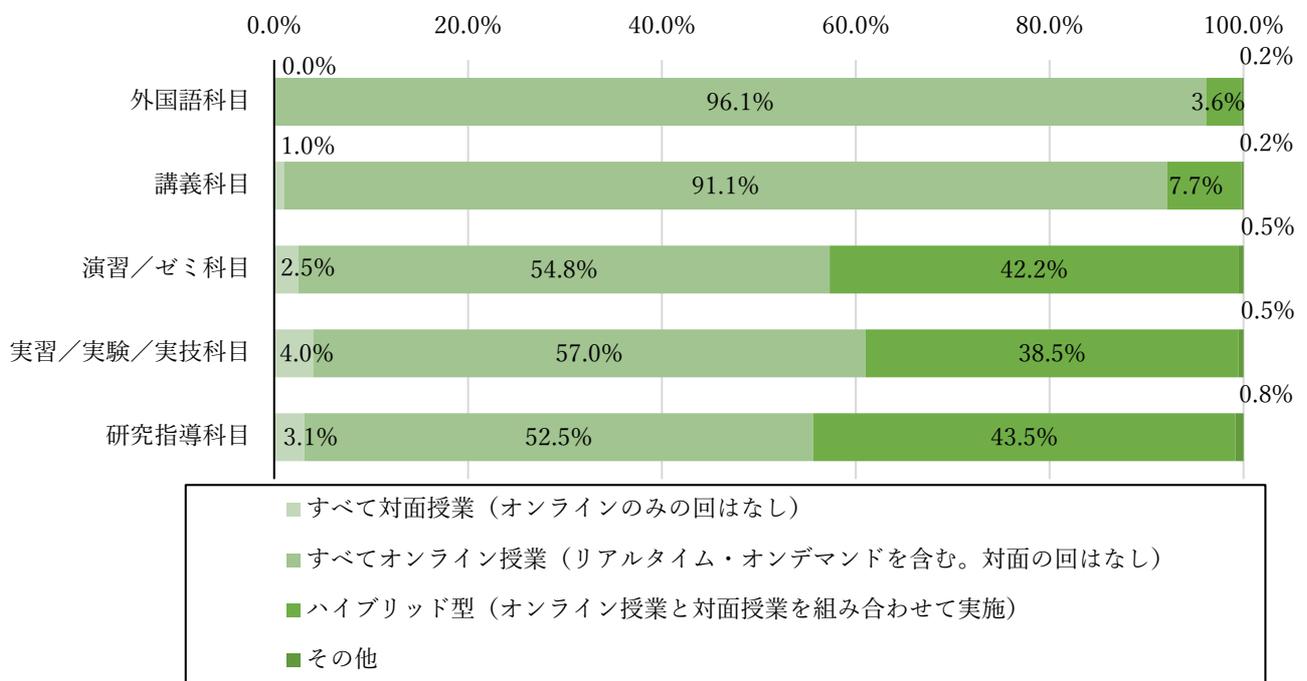


図10-1 授業形態 (秋学期)

さらに、演習/ゼミ科目、実習/実験/実技科目、研究指導科目でのハイブリッド型授業の内訳を見てみる(図10-2)。まず対面とオンラインの回を組み合わせるブレンド型授業を行ったのは、演習/ゼミ科目と実習/実験/実技科目が4割強、研究指導科目は6割近くだった。ハイブリッド型授業が4割、そのうちの4割強または6割がブレンド型授業だったということは、これらの授業区分の全授業のうち2割前後がブレンド型授業を実施したということになる。また、対面とオンラインで同時に授業を行うハイフレックス型授業は、演習/ゼミ科目が約4割で、実習/実験/実技科目と研究指導科目は3割未満だった。こちらも各授業区分の全授業に対する割合を見ると、1~2割の科目でハイフレックス型授業が行われていたと推察される。

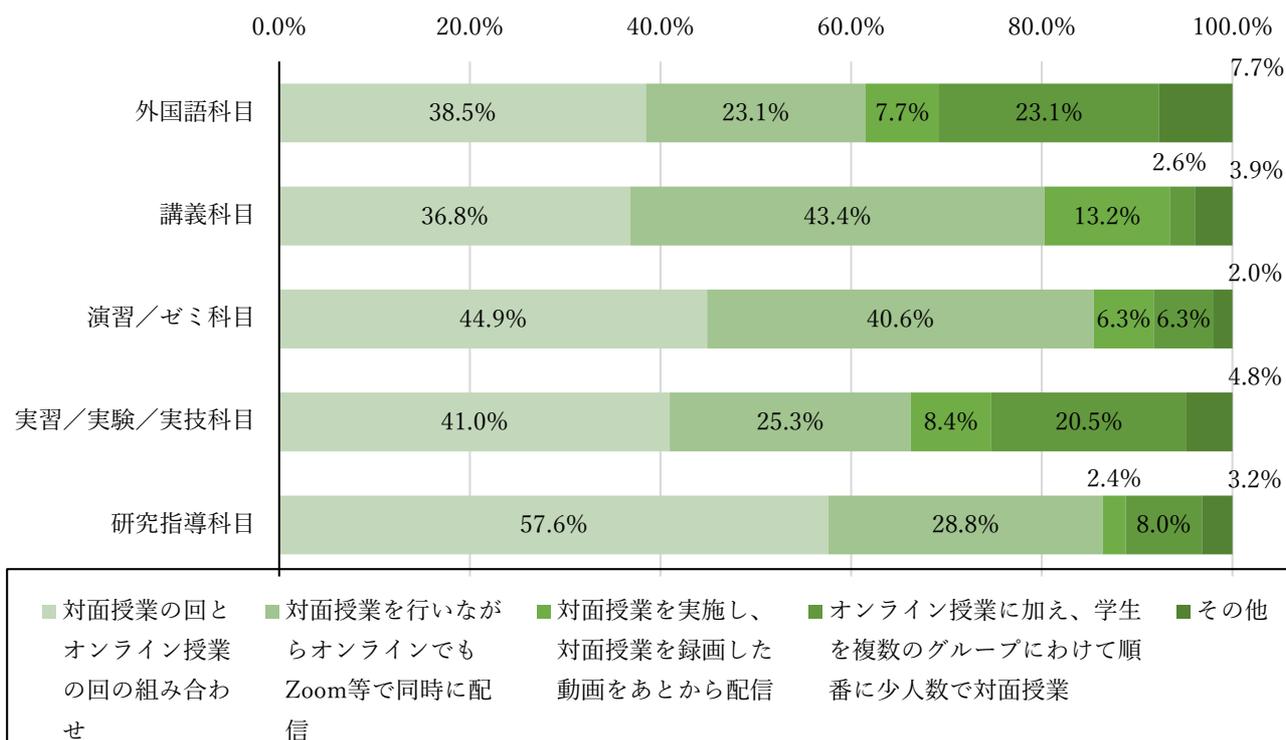


図 10-2 ハイブリッド型授業の内訳（秋学期）

また、ハイブリッド型授業での対面授業の回数の割合を尋ねたところ（図 10-3）、全体としてオンライン授業の回数の方が多かった。対面授業の回数の割合がもっとも高かった実習/実験/実技科目についても、対面の授業回数が5割未満だった科目が半数近かった（46.8%）。つまり、秋学期にハイブリッド型授業を導入した科目でも、オンライン授業を中心とした科目が多かったと考えられる。

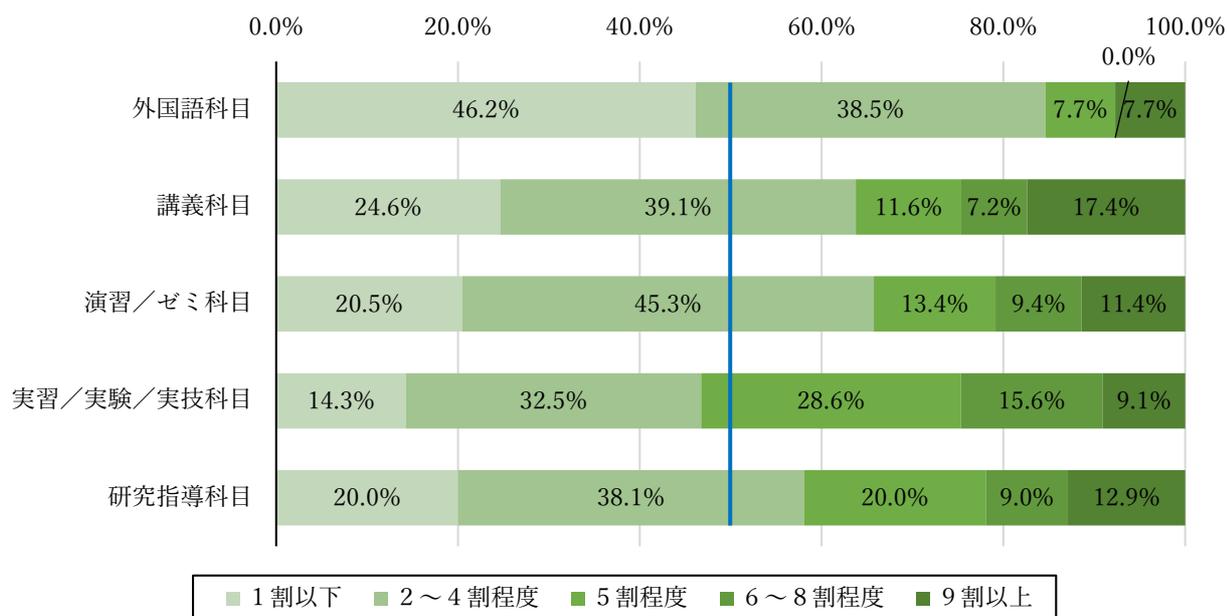


図 10-3 対面授業の回数の割合（秋学期）

## 10-2. 授業活動

春学期・秋学期ともに、様々な授業活動の頻度を授業区分別に尋ねた。春学期はリアルタイム配信とオンデマンド配信、秋学期は対面とリアルタイム配信、オンデマンド配信という授業形態ごとに、それぞれの「講義」「双方向活動」「質問への回答」の頻度を基準に授業区分別の授業活動の実態を見ていく。

各授業活動の項目への選択肢は「1. まったく行わなかった」～「4. ほぼ毎回行った」の4段階だった。以下の図10-4から図10-14では、この4段階のうち活動の頻度が高い「3」と「4. ほぼ毎回行った」を表示している。

### (1) 外国語科目

外国語科目では、春学期はオンデマンド配信よりリアルタイム配信のほうが多く実施された。この傾向は秋学期にも継続され、秋学期ではさらにリアルタイム配信の利用が増加している。また、リアルタイムの授業では、「講義」「双方向活動」「質問への回答」すべてがバランスよく取り入れられている様子もうかがえる。一方、オンデマンド配信は主に質問への回答のために利用されていたものと考えられる。

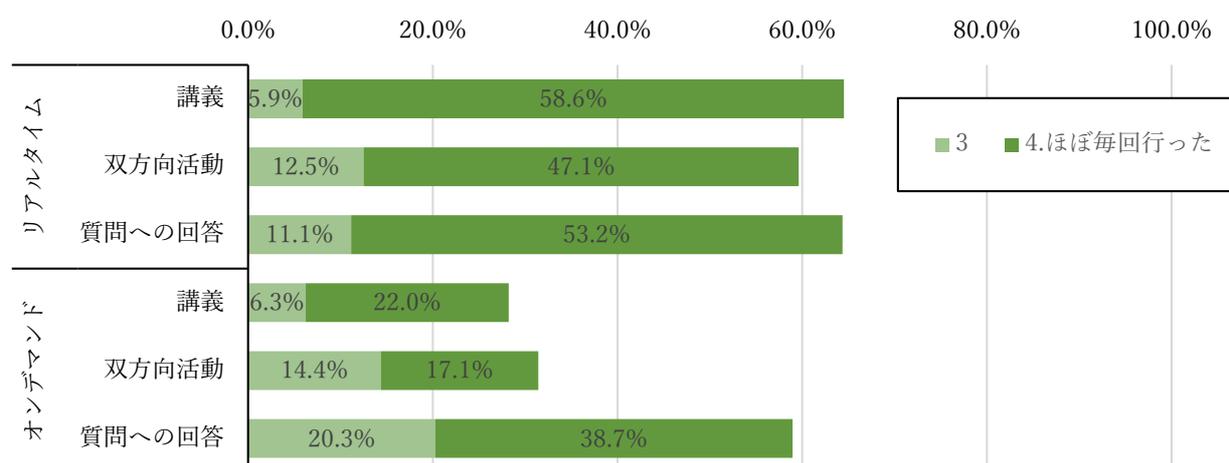


図10-4 外国語科目の授業活動（春学期）

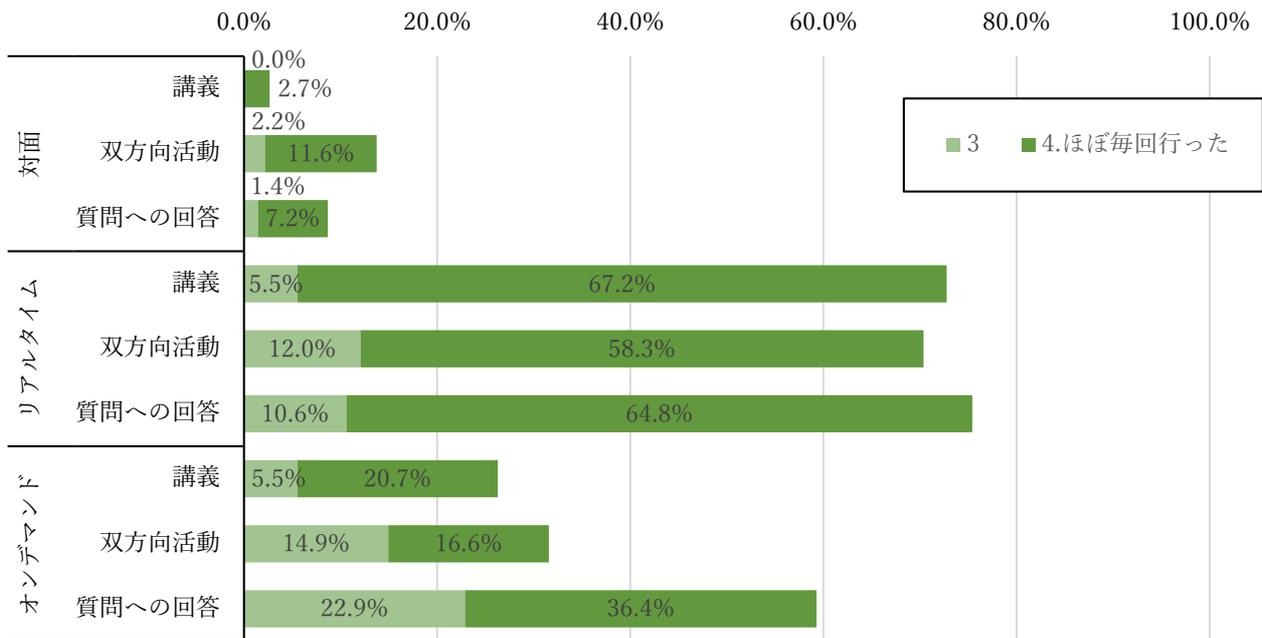


図 10-5 外国語科目の授業活動（秋学期）

## (2) 講義科目

講義科目は、春学期・秋学期ともにオンデマンド配信のほうが多かった。春学期は、約5割の科目が講義を毎回オンデマンドで配信した。秋学期もオンデマンド配信は同程度に利用されていたが、一方で、リアルタイム配信の割合も増加している。この背景には、春学期開始時点でデータ通信量の急増によるネットワーク通信障害が懸念されたため、特に大規模な授業ではリアルタイム配信でなくオンデマンドでの授業が推奨されたという事情もあった。なお、授業活動の内訳としては、春学期・秋学期をとおして、リアルタイム配信、オンデマンド配信ともに、「講義」と「質問への回答」に比べて「双方向活動」の割合が少ない傾向にある。

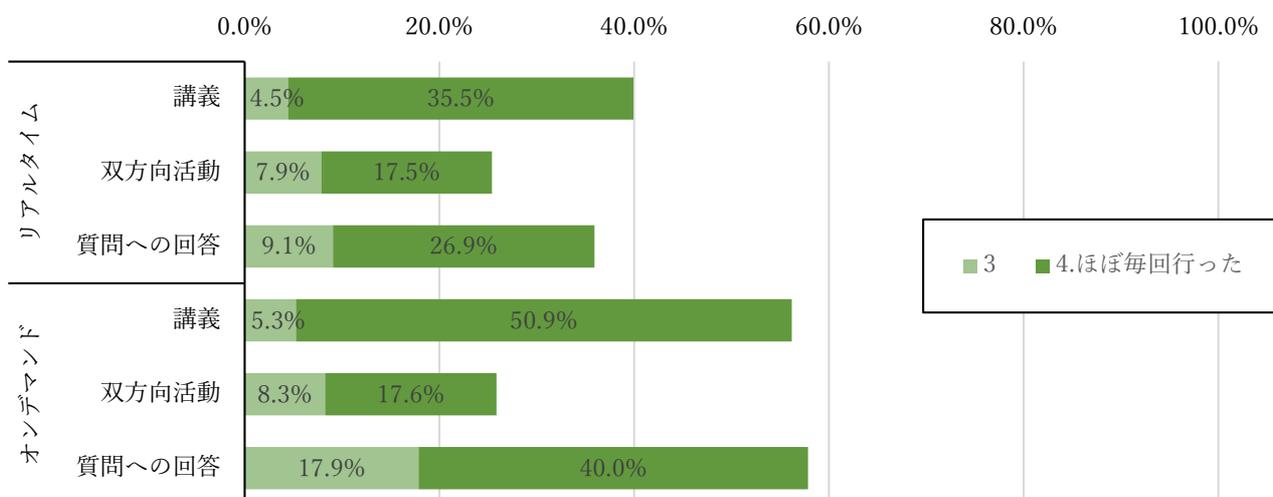


図 10-6 春学期の講義科目

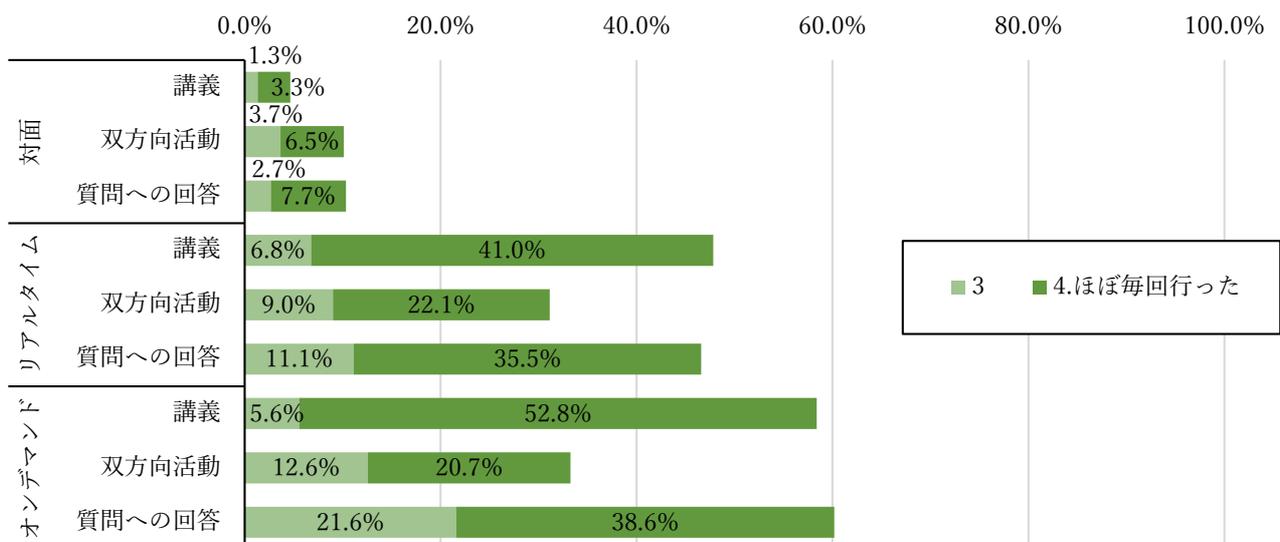


図 10-7 秋学期の講義科目

### (3) 演習／ゼミ科目

演習／ゼミ科目は、春学期・秋学期ともに7割前後の科目がほぼ毎回、または毎日に近い頻度でリアルタイム配信を行った。さらに「4. ほぼ毎回行った」とした回答の割合に注目すると、リアルタイム配信、オンデマンド配信ともに春学期より秋学期のほうが若干減少していることから、リアルタイム配信の一部の回が対面授業へと置き換わったものと考えられる。また、対面での「双方向活動」や「質問への回答」に関して25%前後の科目が「ほぼ毎回行った」と回答していることから、この割合の科目が毎回の授業を対面で行っていたものとも考えられる。なお、授業活動の内訳を見てみると、リアルタイム配信では「講義」「双方向活動」「質問への回答」がほぼ同等の頻度で取り入れられているのに対し、対面授業では「講義」に比べて「双方向活動」と「質問への回答」の割合が大きい。つまり、オンライン上で行うリアルタイム配信の環境より、教室での対面授業のほうが双方向性を確保しやすいことによるものと推察できる。

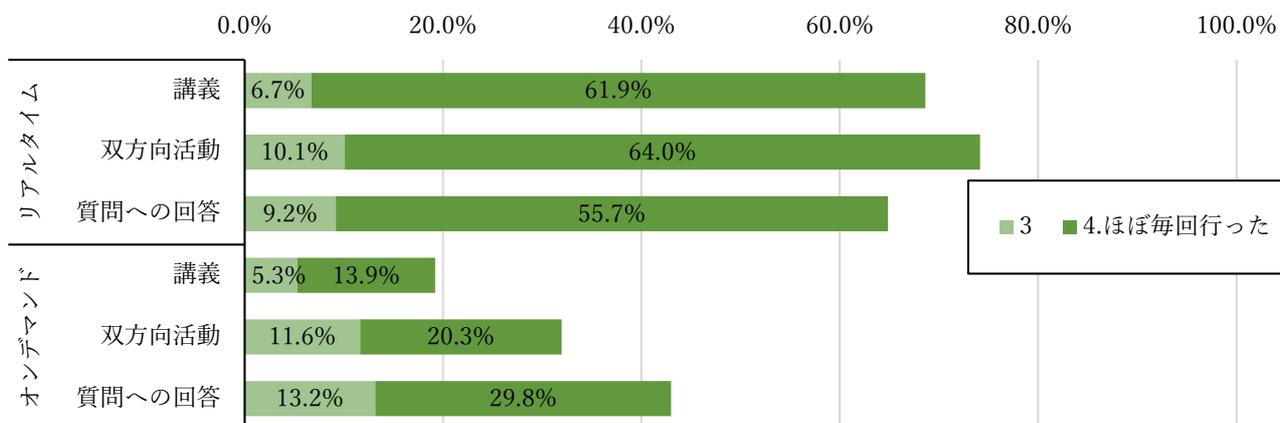


図 10-8 春学期の演習／ゼミ科目

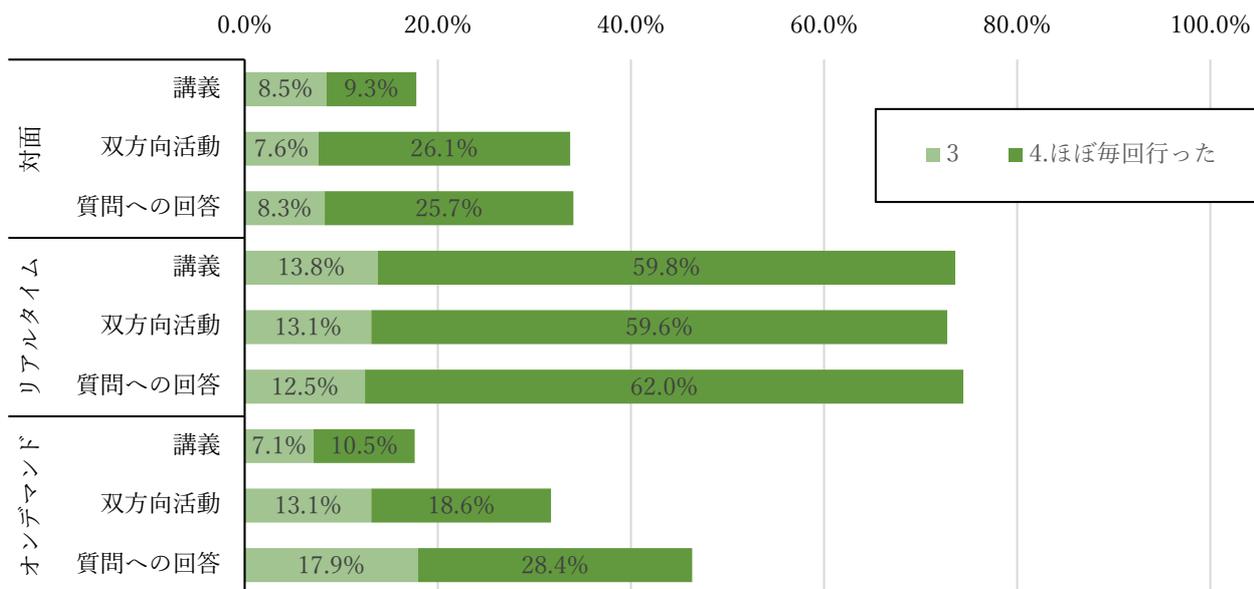


図 10-9 秋学期の演習／ゼミ科目

#### (4) 実習／実験／実技科目

実習／実験／実技科目は、春学期はオンデマンド配信のほうがやや多く、秋学期はオンデマンド配信とリアルタイム配信が同程度に実施された様子が見られる。ただし、実習・実験・実技科目は、学問の領域や科目の特性により授業でのニーズは異なると考えられるため、データから全体の傾向を俯瞰する際にはその点も留意する必要がある。

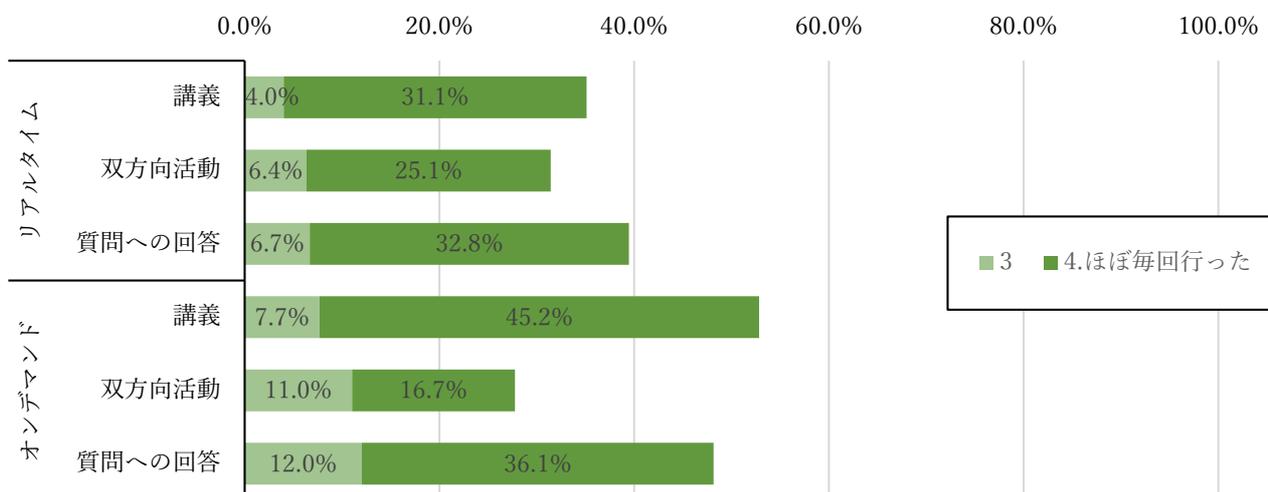


図 10-10 春学期の実習／実験／実技科目

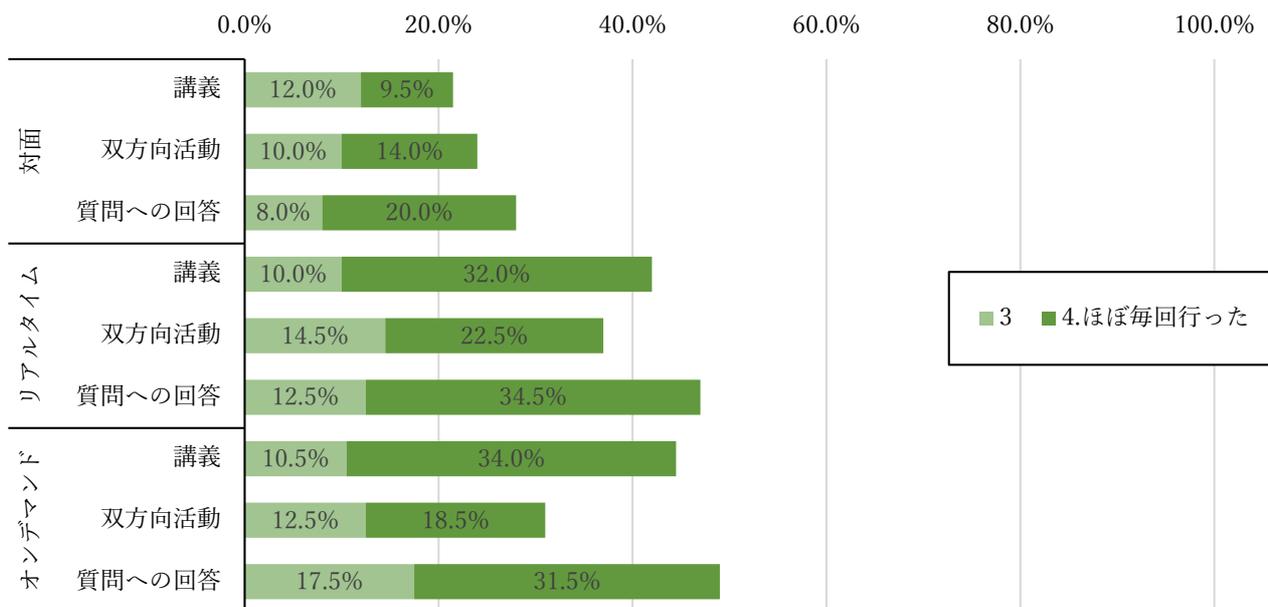


図 10-11 秋学期の実習／実験／実技科目

### (5) 研究指導科目

研究指導科目は、春学期・秋学期ともにリアルタイム配信の割合が圧倒的に大きく、7～8割程度がほぼ毎回または毎日に近い頻度でリアルタイム配信での授業を実施した。それと併せて、秋学期では、対面での「双方向活動」や「質問への回答」に関して3割近くの科目が「ほぼ毎回行った」と回答していることから、これらの3割近くの科目が毎回の授業を対面で行っていたものと推察できる。対面授業の割合は、演習／ゼミ科目と並んで他の授業区分より多い割合となっている。また、授業活動の内訳において、リアルタイム配信では「講義」「双方向活動」「質問への回答」がほぼ同等の頻度であり、対面授業では「講義」に比べて「双方向活動」と「質問への回答」の割合が大きい点も演習／ゼミ科目と同様である。

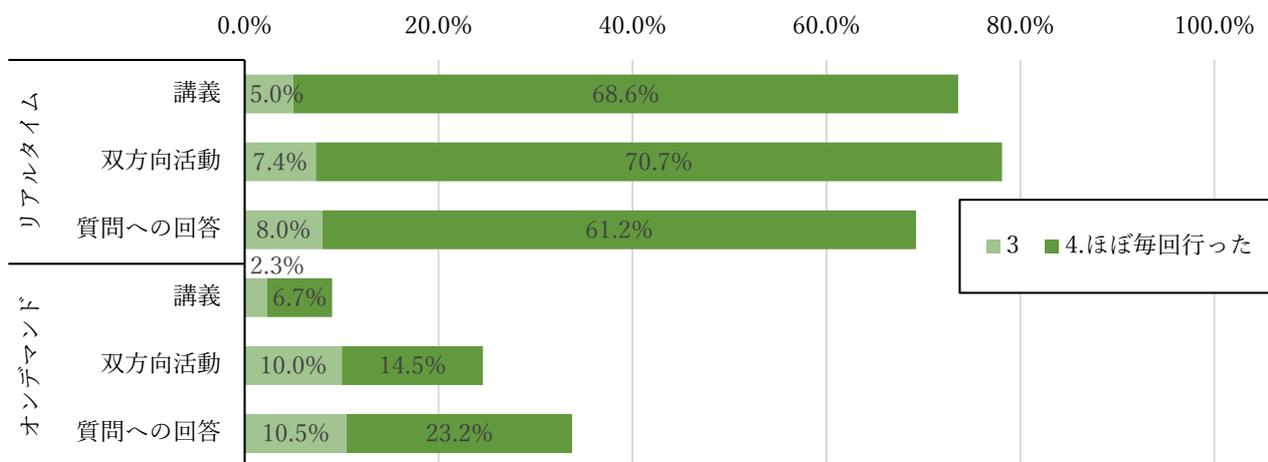


図 10-12 春学期の研究指導科目

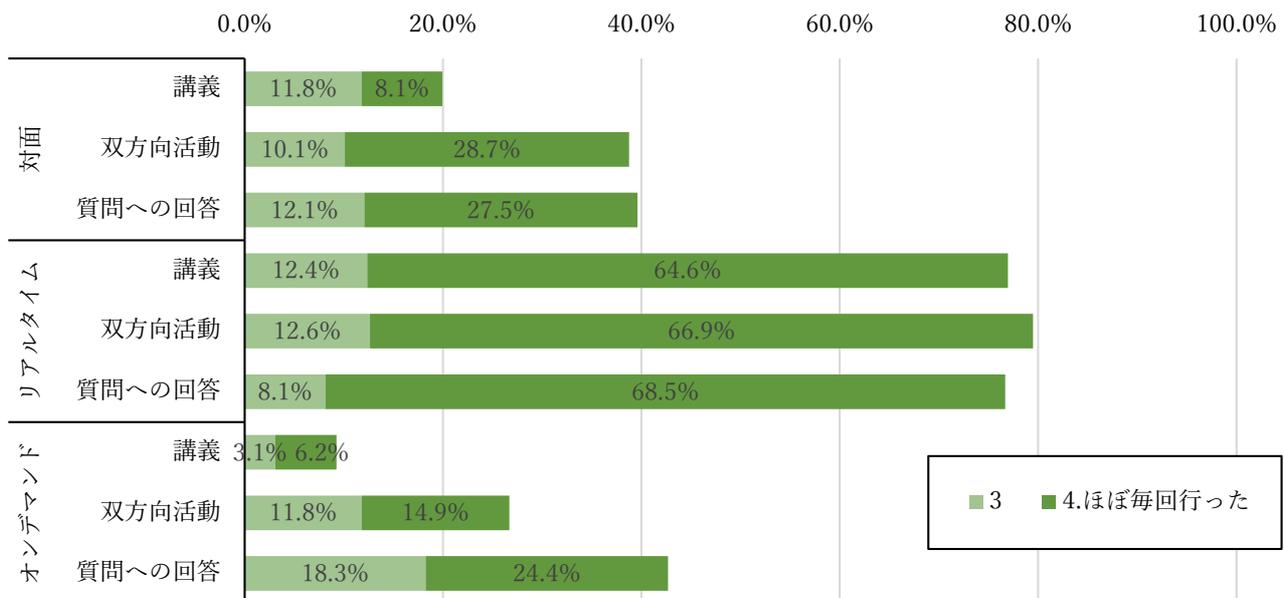


図 10-13 秋学期の研究指導科目

#### (6) 春・秋学期のオンライン授業での双方向活動の比較

学生対象のアンケート結果では、学生が有益であるとする授業においてフィードバックが得られたり、学生の意見が取り入れられたりする等の双方向性が確保されていることが示された（図概要-1）。その結果を受けて、大学総合研究センターでは「オンライン授業・ハイブリッド授業の検討および運営に関する6箇条」（<https://www.waseda.jp/top/news/70555>）を作成し、オンライン授業やハイブリッド授業でもフィードバックや対話を心がけるよう呼びかけた。

図 10-14 ではリアルタイム配信とオンデマンド配信の双方向活動の割合を春学期と秋学期で比較している。演習／ゼミ科目のリアルタイム配信を除いた全授業区分でのリアルタイム配信・オンデマンド配信両方の形態において、秋学期における双方向活動の割合が若干上昇した。なお、演習／ゼミ科目と実習／実験／実技科目、研究指導科目のリアルタイムで「4. ほぼ毎回行った」がやや減少しているのは、授業の回の一部が対面授業へと切り替わったことによる可能性が考えられる。

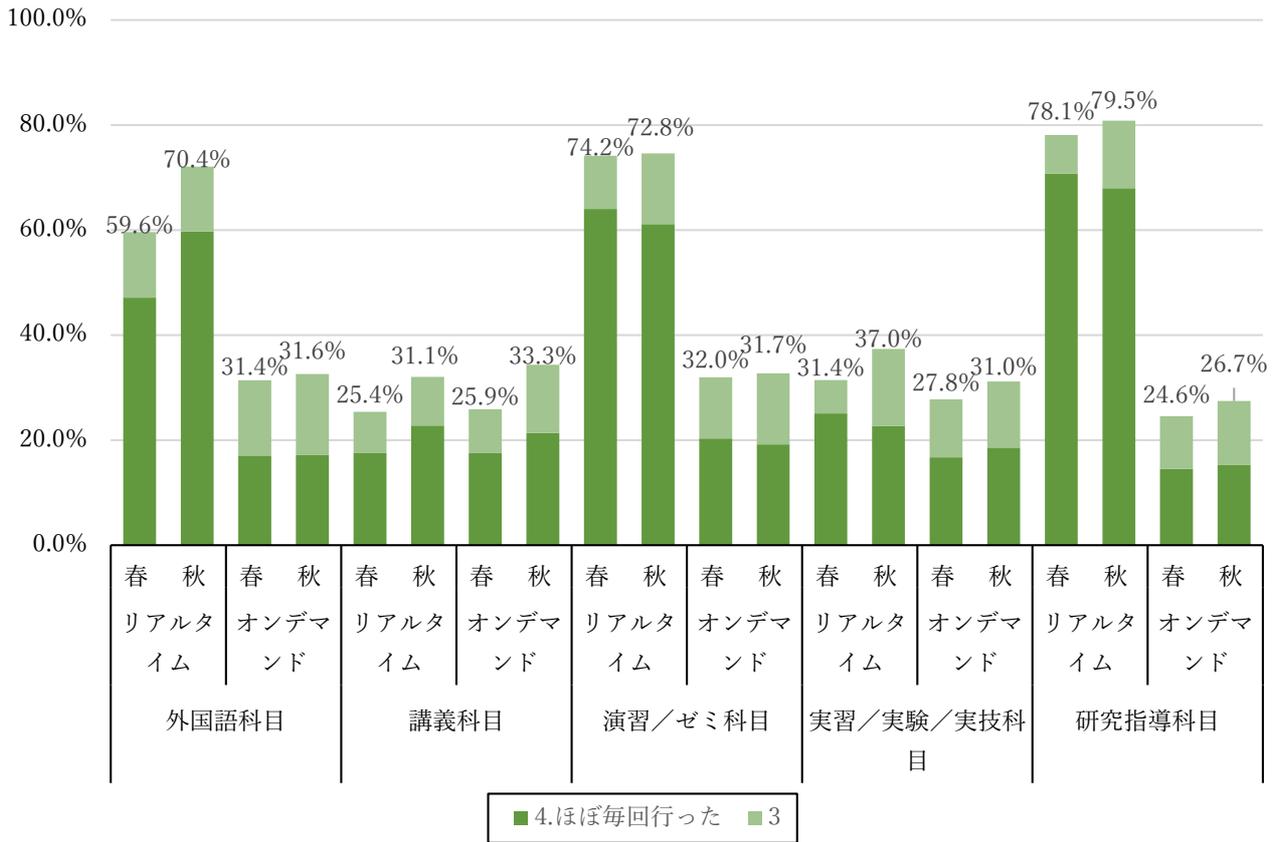


図 10-14 春学期から秋学期への双方向活動の変化

### 10-3. 評価と授業目標

授業での評価の方法については、授業区分ごとに特徴が見られたものの、春学期と秋学期ではいずれの授業区分においても大きな変化はなかった（図 10-15、10-16）。しかし、それらの評価で授業目標の到達度を適正に測ることができたかという質問に対しては、春学期から秋学期にかけて肯定的な回答が全授業区分において上昇した（図 10-17）。また、授業目標の達成度も、春学期から秋学期にかけて全授業区分において向上した（図 10-18）。

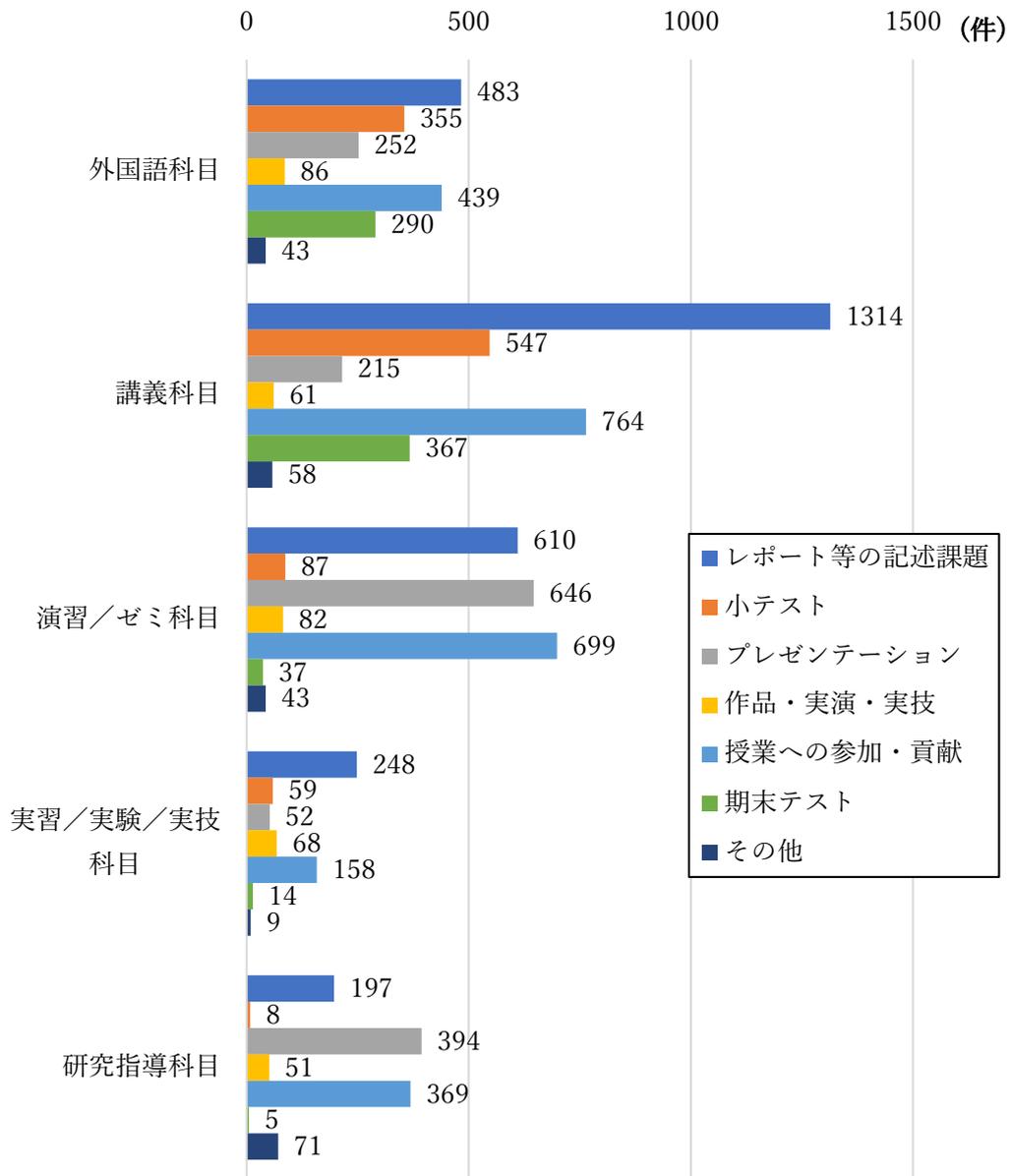


図 10-15 評価方法 (春学期)

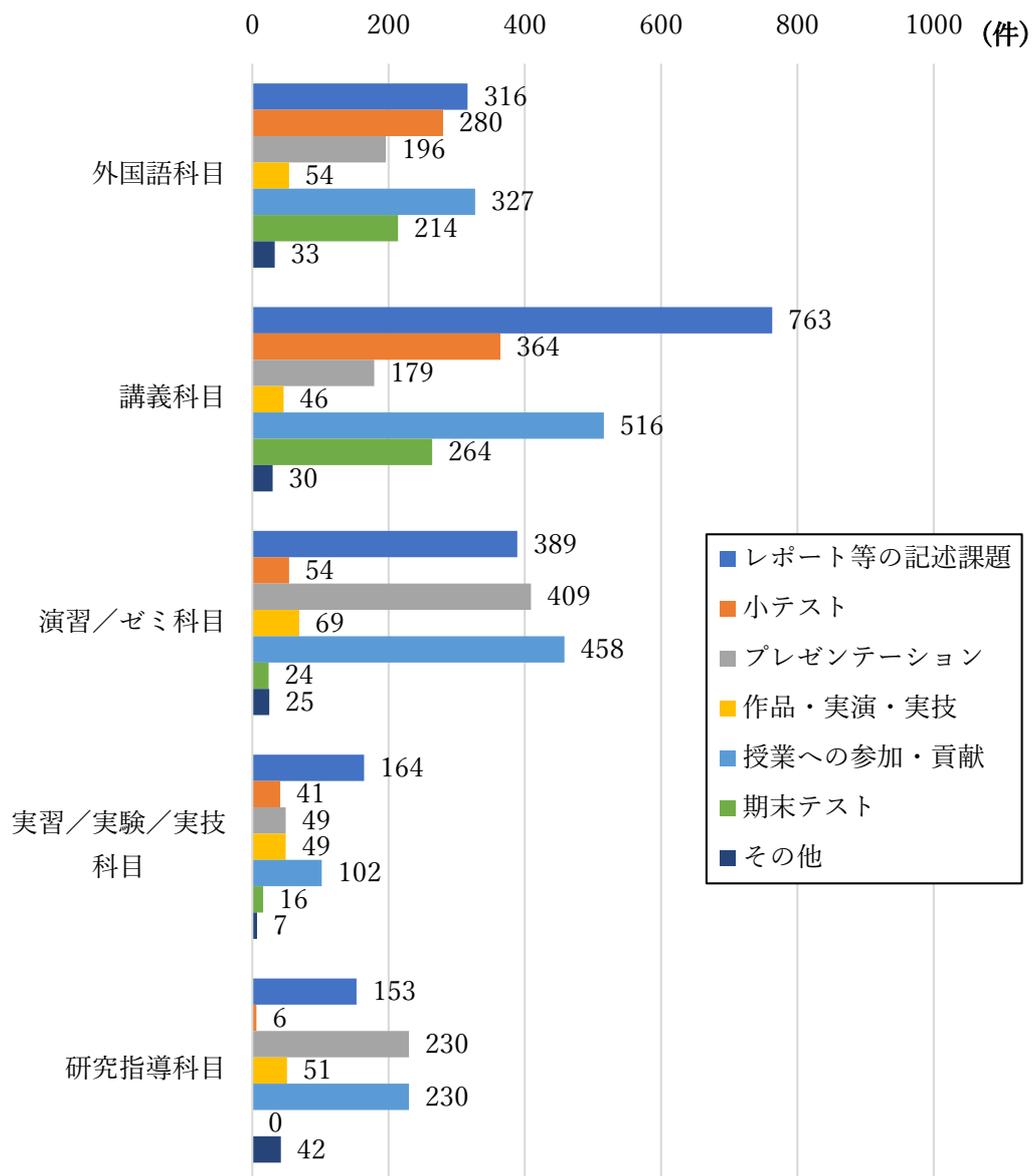


図 10-16 評価方法（秋学期）

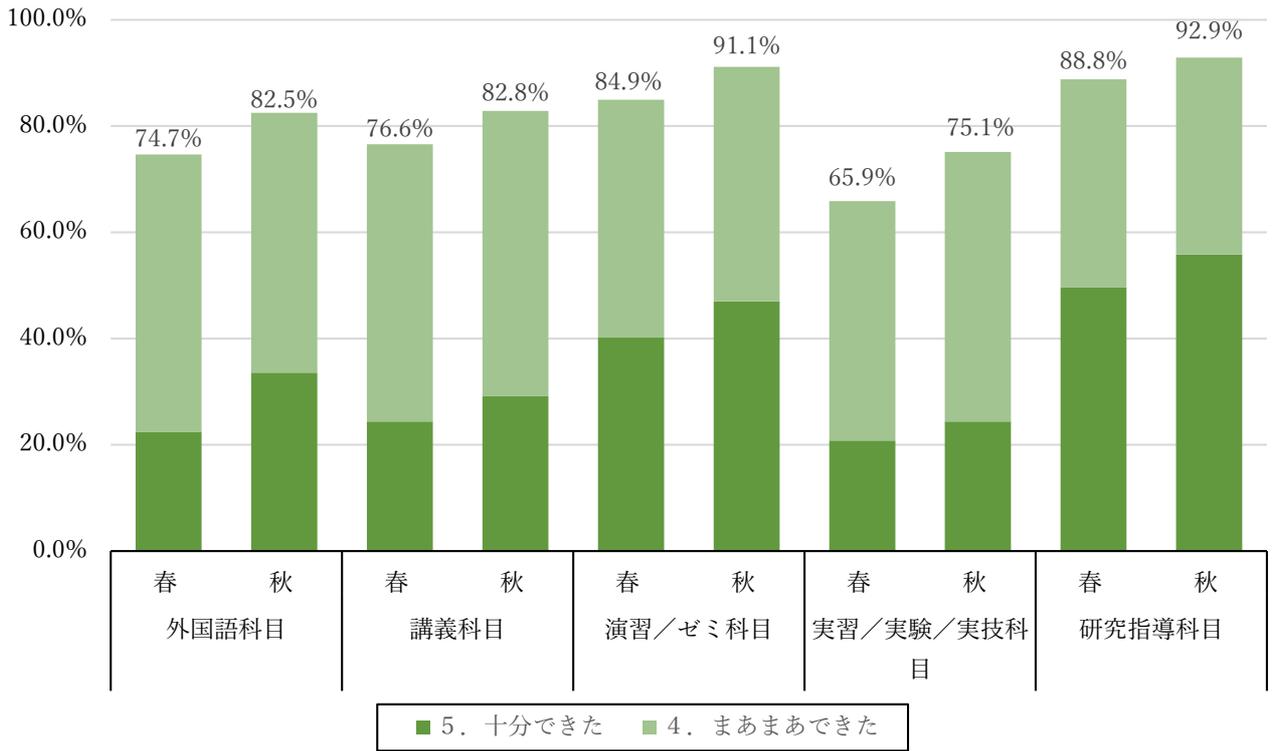


図 10-17 「評価では授業目標の到達度を適正に測ることができましたか。」の春・秋学期の比較

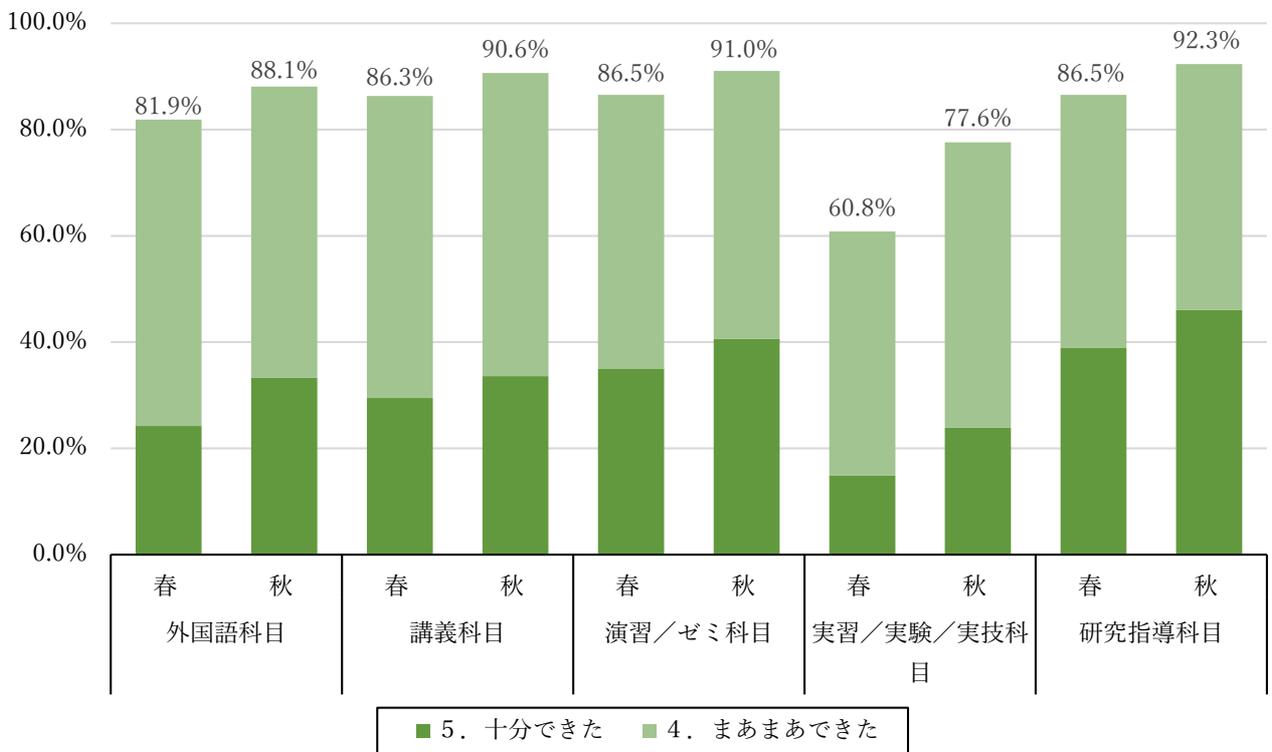


図 10-18 「授業目標を達成できましたか。」の春・秋学期の比較

## 10-4. TA

TAの業務内容としては、その多くを占めるのが「課題の採点・フィードバック」「質問への回答」「グループワークのサポート」という個々の学生への対応に関するサポートだった(図10-19、図10-20)。特に大規模な授業が多い講義科目では、「課題の採点・フィードバック」をTAがサポートしているケースが多いのが見て取れる。また、「グループワークのサポート」については、業務全体のバランスを見ると、春学期から秋学期にかけて講義科目と実習/実験/実技科目で増加している。さらに、オンライン授業で特に必要性が高いと思われる「LMS等の設定」に関しても、TAが補助をしていた科目が一定数あった。

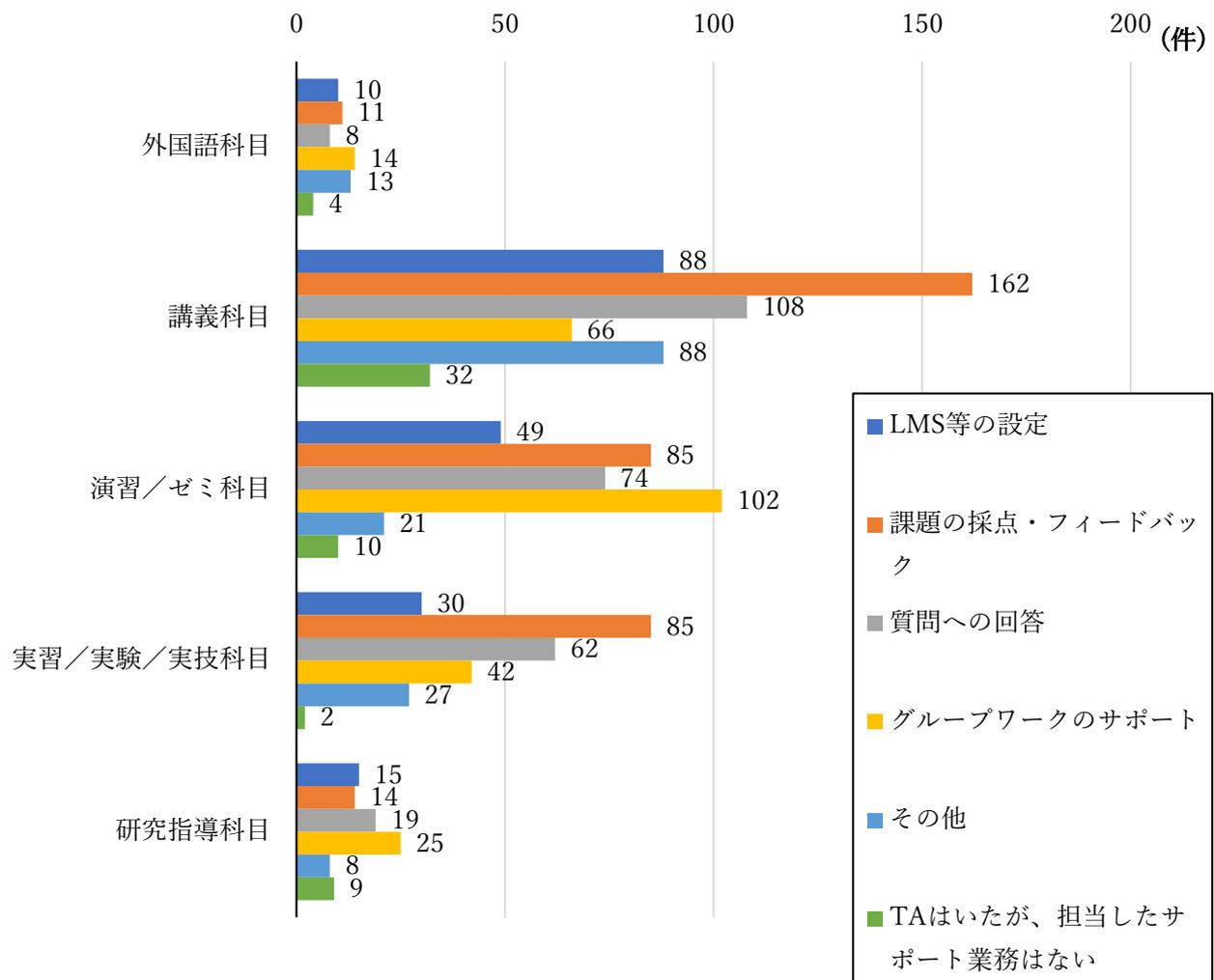


図10-19 TAの業務内容(春学期)

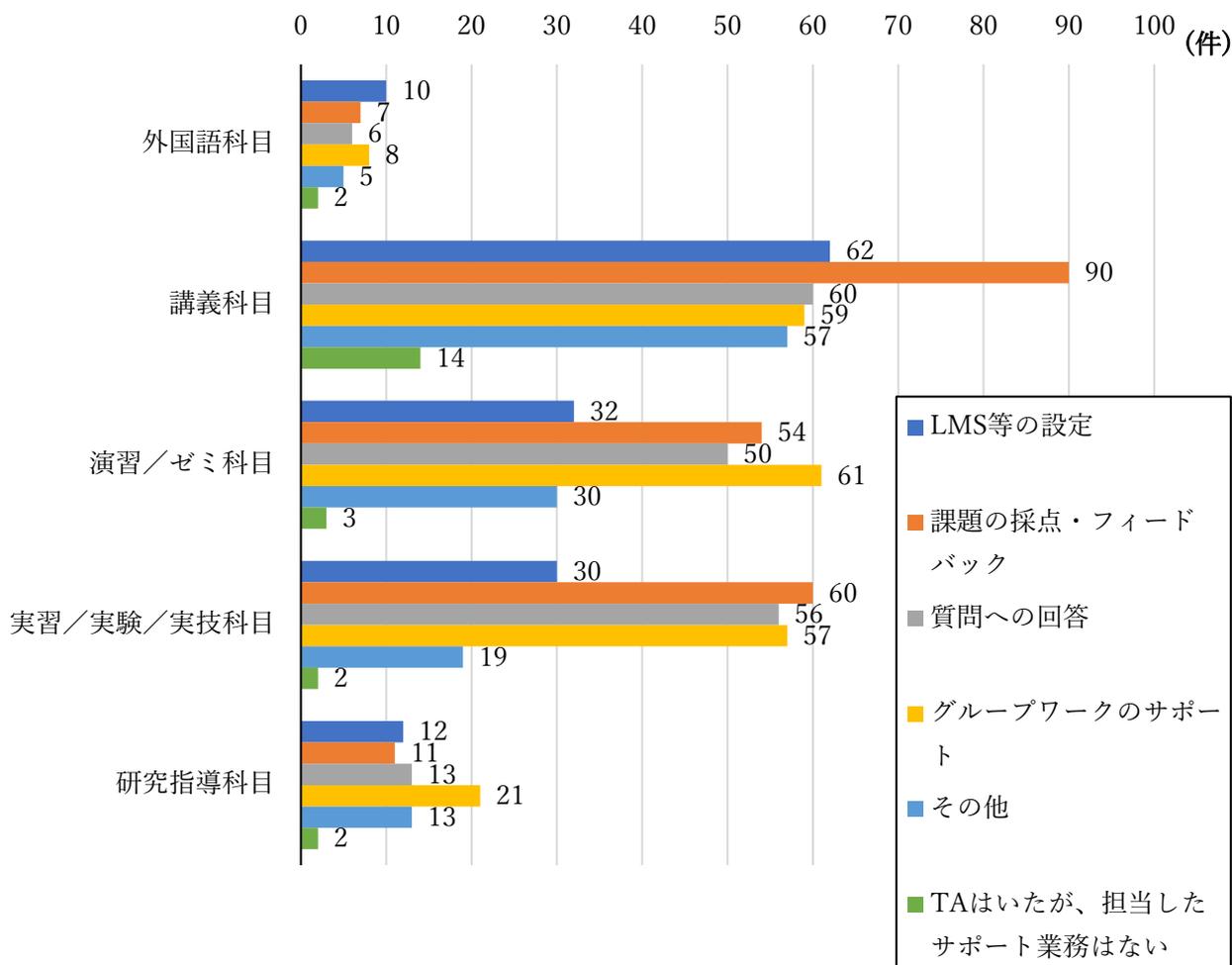


図 10-20 TA の業務内容（秋学期）

### 10-5. 今後の対面・オンライン授業の割合

授業区分別に、教育効果が高いと思われる対面授業とオンライン授業の割合について尋ねた。春学期と秋学期では教示文、選択肢ともに内容が異なったため、ここでは学期別に結果を示す。

まず、春学期の教示文は「この授業は、対面授業と比較して、オンライン授業で行う方が教育効果が高いと思いますか。」で、選択肢は「1. 対面授業の方が教育効果が高い」「2. どちらとも言えない」「3. オンライン授業の方が教育効果が高い」「4. 昨年度までにこの授業を担当していない」の4択だった。結果として、講義科目を除くすべての授業区分において対面授業の方が教育効果が高いとした回答が半数程度を占め、特に実験/実習/実技科目では7割強が対面授業を支持した。その一方で、実験/実習/実技科目以外では「2. どちらとも言えない」と回答したものが4割前後に上った。つまり、春学期には急遽やむなくオンライン授業に転換し、それまでに行ってきた対面授業がよかったとの声も半数程度あ

る反面、4割程度はオンライン授業の利点にも気づき始め、どちらとも言えないと回答したのではないだろうか。特に講義科目では、そもそも「対面授業の方が教育効果が高い」と回答したものが3割にとどまり、「2. どちらとも言えない」とオンライン授業とした回答を合わせると63.4%となった。

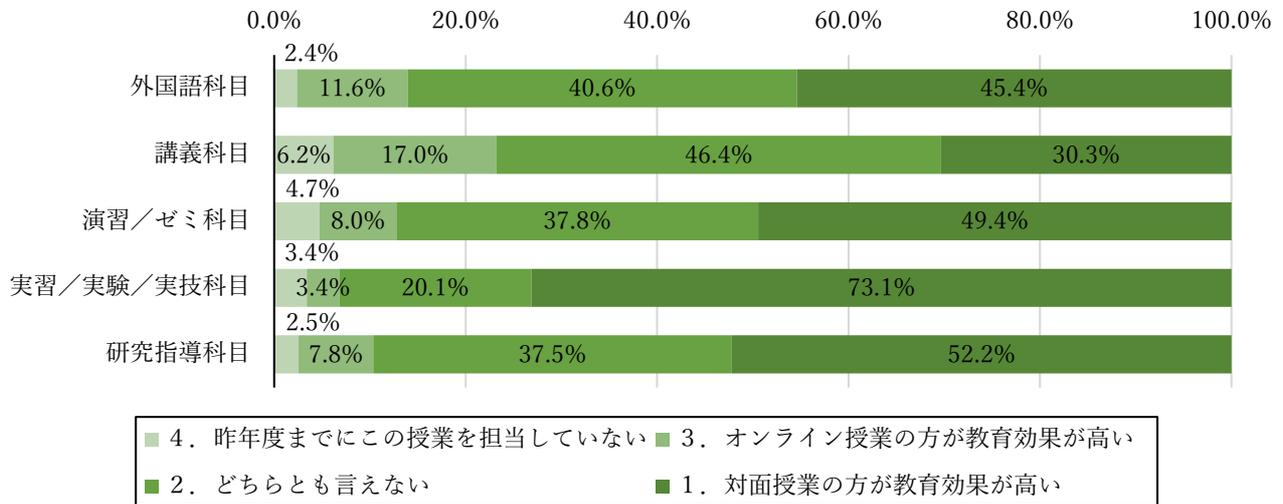


図 10-21 オンライン授業と対面授業の教育効果（春学期）

教育効果が高いのは対面授業かオンライン授業かと尋ねた春学期に対し、ハイブリッド型授業が行われた秋学期には、教育効果が高いと思われる対面授業の割合を尋ねた。教示文は「この授業は、対面授業とオンライン授業をどれくらいの割合で行うと最も教育効果が高くなると思いますか。対面授業のおおよその割合をお答えください」とし、0～10割のあいだの1割刻みの数値で回答を求めた。その結果、10割（すべて対面授業）と回答したのは、演習/ゼミ科目（27.4%）、実習/実験/実技科目（34.0%）、研究指導科目（27.3%）が30%前後であり、外国語科目（14.7%）と講義科目（12.6%）はさらに低く10%強にとどまった。逆に0割（すべてオンライン授業）と回答したものは、どの授業区分も10%未満だった。なお、図 10-22 の赤色のラインは5割と6割の境界を示している。すべての授業区分においてこのラインが50%より左に位置するということは、すなわち、オンライン授業より対面授業の割合が多いほうが効果的だとする回答がそれだけ多かったことを意味する。言い換えると、教育効果が高いと思われる授業形態は対面授業とオンライン授業の組み合わせであるが、割合としては対面授業が多いほうが望ましいということになる。特に実習/実験/実技科目、次いで演習/ゼミ科目と研究指導科目では、外国語科目や講義科目に比べて、理想とする対面授業の割合が高かった。

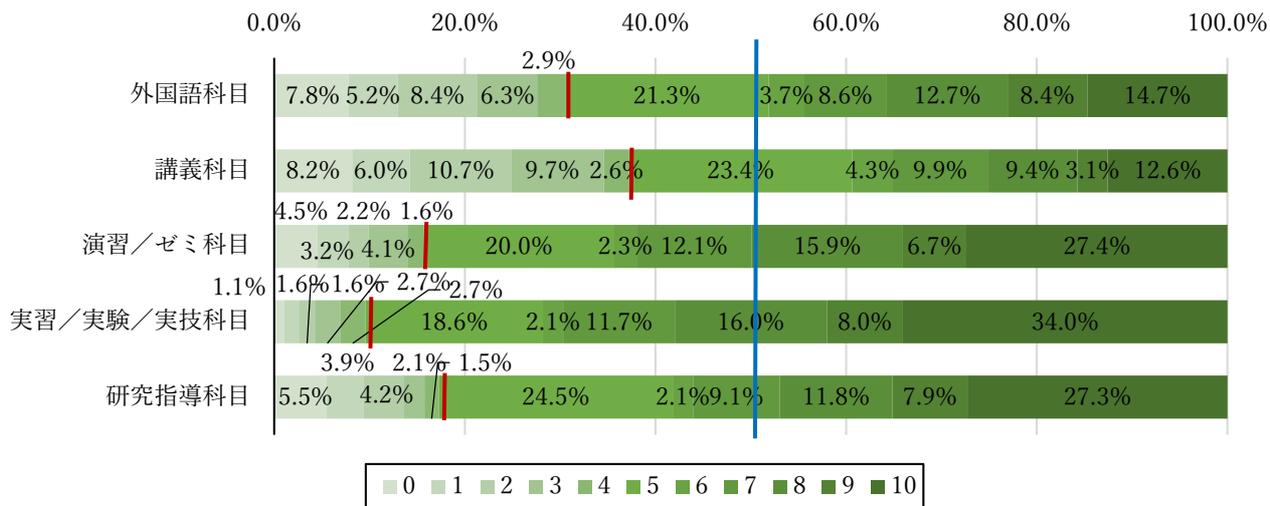


図 10-22 教育効果が高い対面授業の割合（秋学期）

## 第 11 章 授業の満足度と今後の授業担当への意欲

### 11-1. 授業の満足度

春学期と秋学期それぞれに担当した授業について感想を尋ねた。「関心をもって取り組めた」「やりがいを感じた」「効果的な授業ができた」「全体的にうまくいった」という 4 項目について「1. まったく当てはまらない」～「5. かなり当てはまる」の 5 件法で回答を求めたところ、全体的に肯定的な回答が多数を占めた。図 11-1 から図 11-2 は、5 段階の回答のうち肯定的回答に該当する「4. まあまあ当てはまる」と「5. かなり当てはまる」のみを示したものである。また、図 11-1 では学期別、図 11-2 では教員の所属箇所による文系・理系別に結果を提示した。

まず春学期と秋学期の比較（図 11-1）では、春学期から秋学期にかけて 4 項目すべてで肯定的な回答の割合が上昇した。特に「やりがいを感じた」では 15.6%増、「効果的な授業ができた」では 12.8%増と大幅に増加しており、春学期に比べて秋学期には授業に対してより一層の手応えを感じたものと推察できる。

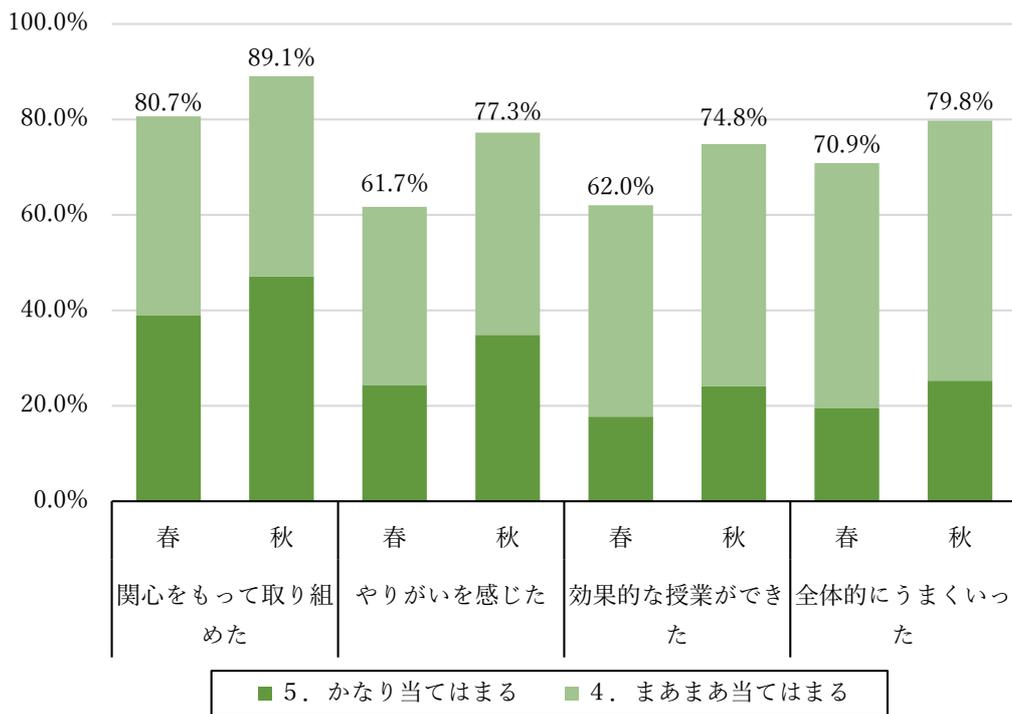


図 11-1 授業への感想の春・秋学期の比較

次に文系と理系で比較（図 11-2）してみると、4 項目すべてにおいて文系のほうが肯定的回答の割合が高かった。先述のように、実習／実験／実技科目では対面授業を望む声が多い。オンライン授業のみであった春学期や、対面授業が一部再開されたとはいえ様々な制限があった秋学期には、実習／実験／実技科目が比較的多いと思われる理系科目のほうが、授業に対する満足度にマイナスの影響をおよぼした可能性が考えられる。

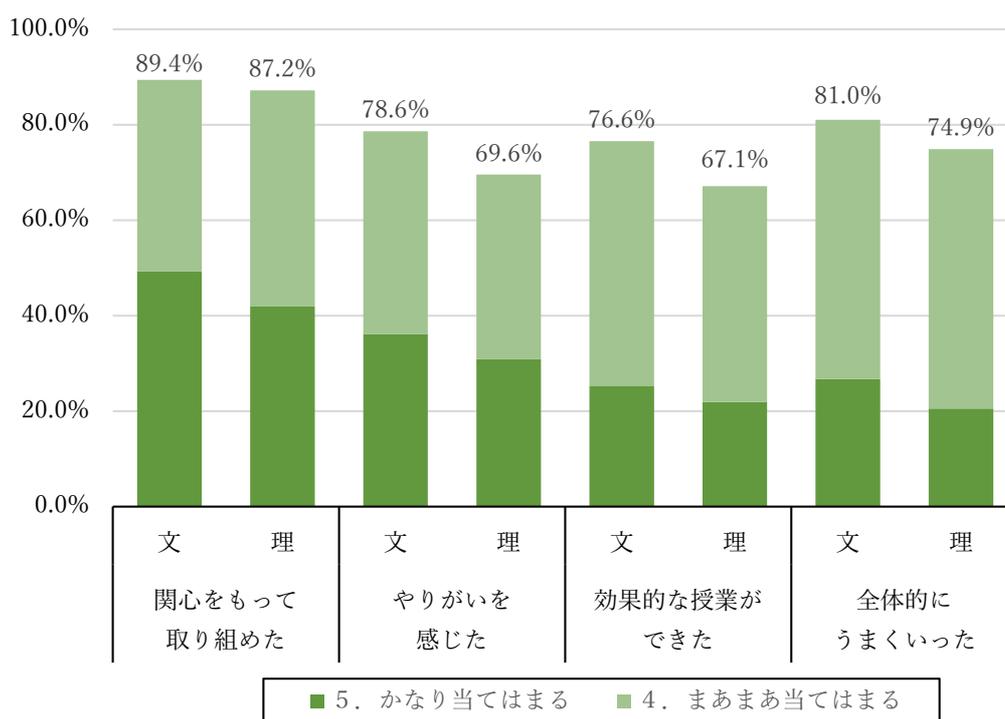


図 11-2 文系・理系別の授業への感想（秋学期）

## 11-2. 今後の授業担当への意欲

オンライン授業またはブレンド型／ハイブリッド型授業を今後担当したいかどうかを尋ねた。選択肢の「フルオンライン型授業を担当したい」と「ブレンド型／ハイブリッド型授業を担当したい」は複数回答可、「どちらとも言えない」と「担当したくない」は単一回答のみ可として設定した。全体として「ブレンド型／ハイブリッド型授業を担当したい」と回答した割合がもっとも高く、両学期ともに約4割の教員が選択した。図 11-3 では春学期と秋学期の学期別、図 11-4 では秋学期の結果にもとづき教員の所属箇所による文系・理系別に結果を提示している。

まず春学期と秋学期を比較（図 11-3）すると、「フルオンライン型授業を担当したい」とした回答がやや増加（6.1%増）し、一方で「どちらとも言えない」「担当したくない」がやや減少（2.8%減、4.1%減）した。

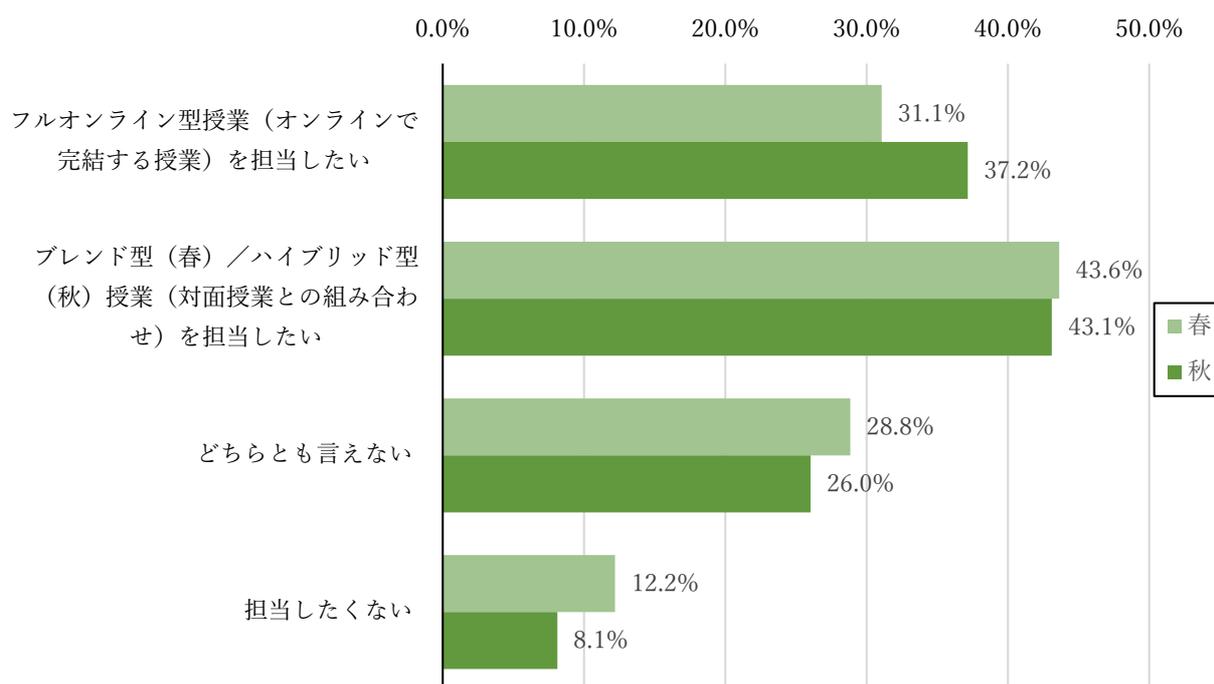


図 11-3 オンライン授業担当への意欲の春・秋学期の比較

次に秋学期の結果について文系・理系別に比較（図 11-4）したところ、フルオンライン型授業に対しては文系（2.3%差）、ハイブリッド型授業に対しては理系（8.5%差）の教員のほうがやや意欲的だった。この結果は、上述の 10-5 で検証した教育効果が高いと考えられる対面授業とオンライン授業の割合の比較結果にも沿っている。10-5 では全体としてハイブリッド型授業を支持する傾向にあったが、特に理系科目が多いと推察される実習／実験／実技科目において対面授業を望む割合が高かった。このことから理系の教員のほうが、フルオンライン型授業より対面を交えたハイブリッド型授業への意欲が高いものと考えられる。

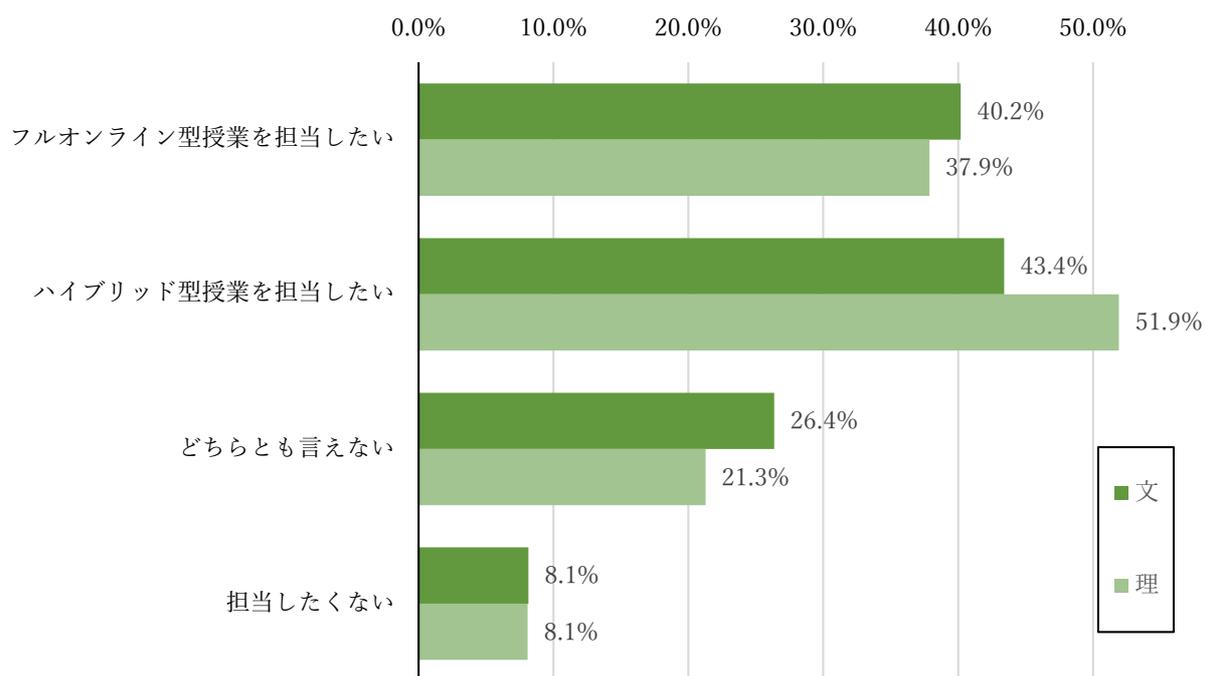


図 11-4 文系・理系別のオンライン授業担当への意欲（秋学期）

## 第4部 ティーチングアシスタント (TA)

### 第12章 TA改革とTAに対するサポート

#### 12-1. 早稲田大学におけるTAの区分および職務内容 (石井・山田・森田, 2018)

早稲田大学では、TAに関する制度改革を経て2017年度からTAを次の5つに分類している(カリキュラムTA, 高度授業TA, 授業TA, 授業事務補助者とLA)。詳細を図12-1に示す。

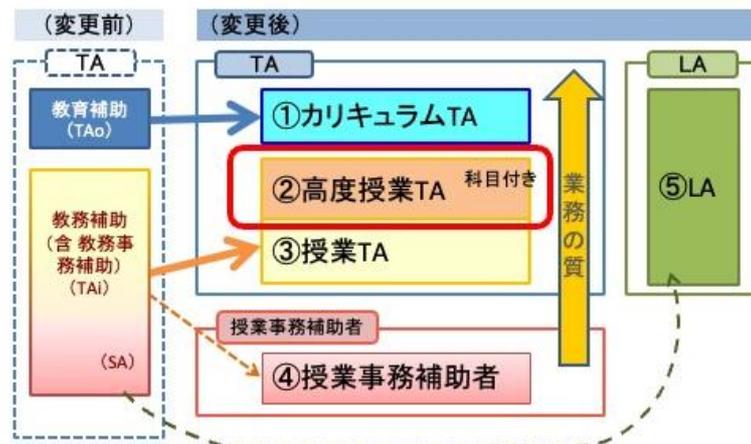


図12-1 (早稲田大学におけるTAの区分および職務内容)

カリキュラムTAは、教員と指導方針を事前に共有したうえで、指導時には教員からの直接指示を逐一受けずに、指導方針に従って自立的に授業運営や学修支援を行う。原則、博士後期課程の正規学生が従事する。例えば、グローバルエデュケーションセンターではオンデマンド授業「学術的文章の作成」の採点業務に従事するカリキュラムTAがいる。

高度授業TAは、教員と指導方針を事前に共有したうえで、教員の直接指示を受けながら学修効果の高い授業運営補助業務を行う。主に、高い教育効果が見込まれる授業形態(反転授業やアクティブ・ラーニングなど)を取り入れた科目や、実験・実習・実技科目の質向上に資する学修支援に携わる。

授業TAは、教員の直接指示に基づき学修効果の高い授業運営補助業務を行う。

授業事務補助者は、事務所職員等の指示に基づき、授業運営に必要な定型的な事務補助業務を行う。例えば、大講義室で出席カードを配る人はこれに属している。

自学自修TA(LA)は、業務管理者の直接指示に基づき、学生の自学自修の支援を行う。支援は、単位取得や特定の授業に関わらず総合的な学修に携わる。図書館でのLAはこれに属している。

この5つのTA種別のうち、大学総合研究センターの管轄となるのは「高度授業TA」のみであり、ほかは各学術院の管轄となっている。

## 12-2. TA 研修やサポートの状況

2020 年度までの高度授業 TA 研修は、必修として受講するオンデマンド形式の研修と任意で受講する対面式研修の 2 つからなる。

オンデマンド形式の研修は、合計 50 分のビデオで構成され、1 時間分の給料が支払われる。

具体的な研修内容は、以下の通りである。「高度授業 TA とは」、「補足」、「授業設計のポイント」、「早稲田大学における対話型、問題発見・解決型教育」、「ルーブリックを活用した教育評価」。また、確認テスト（全 6 問）を実施している。

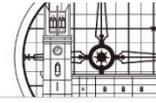


図 12-2 オンデマンド研修ビデオ

対面式研修は、特に決まった内容はなく、担当講師によって様々な工夫を凝らしながら、展開されてきた。また、2020 年 4 月からは、TA 育成プログラムの一環として「大学における教育と学習」という科目が開講された。当初は、早稲田のメインキャンパスと西早稲田キャンパスで行う予定であったが、コロナ禍の影響によりオンライン授業へ変更になった。

また、2018 年度からは、高度授業 TA として魅力的な授業づくりに貢献している学生の体験を共有し、交流することを目的として、「高度授業 TA Conference」を実施している。2018 年度は 2 回、2019 年度は 1 回開催された。毎回、数名の高度授業 TA の代表者による発表の後、参加している教職員や学生と一緒に活発に意見交換を行っている。また、高度授業 TA Conference では、様々な工夫を凝らしている高度授業 TA たちに賞を与えている。賞の評定はセンターの副所長である二人の先生によって授与される。

2020 年春、早稲田大学はオンライン授業作りと LMS の Moodle への移行というダブルチャレンジに直面していた。こうした状況への支援として、大学総合研究センターでは 5 月 8 日に TA 向けに「オンライン授業への移行～いま、TA は何が出来るか」というテーマでセミナーを実施した。セミナーはオンラインで行い、おおよそ 300 人の参加者が集まった。セミナーの中では、オンライン授業では TA が求められる役割、Moodle の使い方や TA の事例紹介がなされた。



## オンライン授業への移行

### ～いま、TAは何ができるか～

- 本日の進め方
- 趣旨説明  
長崎潤一 大学総合研究センター 副所長  
文学学術院教授
- オンライン授業：TAの役割とは？ 蔣妍
- 使用するシステムの概要説明：川合光
- 事例紹介  
森田裕介 大学総合研究センター 副所長  
人間科学学術院 教授
- まとめ 蔣妍

図 12-3 5月8日オンラインセミナーでテーマと構成

これに加え、大総研がかつて作成した「TA's Café-Waseda TA Community-」という Facebook のページを活かし、TA に関する情報などが寄せられる場を設けている。



図 12-4 Facebook ページ TA' s Café-Waseda TA Community-

## 第13章 TA業務および成長の実態

### 13-1. TAに従事する動機

TAに従事する動機について、学期およびTA種別ごとに分析した結果を図13-1から図13-8に示す。なお、図の中での数字は件数と%を示す。TA業務に従事する動機は、多いものから順に「指導教員に依頼されたから」(62.8%)、「授業担当教員に依頼されたから」(48.1%)、「大学でのアルバイトをしたいから」(39.1%)、「授業内容に対して興味・関心を持っているから」(33.0%)、「専門分野の知識やスキルを深めたいから」(29.0%)となっている。また、学期別(春学期と秋学期)、TAタイプ別(授業TAと高度授業TA)での違いは見られなかった。ただし、カリキュラムTAに従事する動機に関しては、春学期および秋学期のいずれにおいても「自身の教育力を形成・向上させたいから」(春学期 57.1%、秋学期 50.0%)が最も高い割合であった。

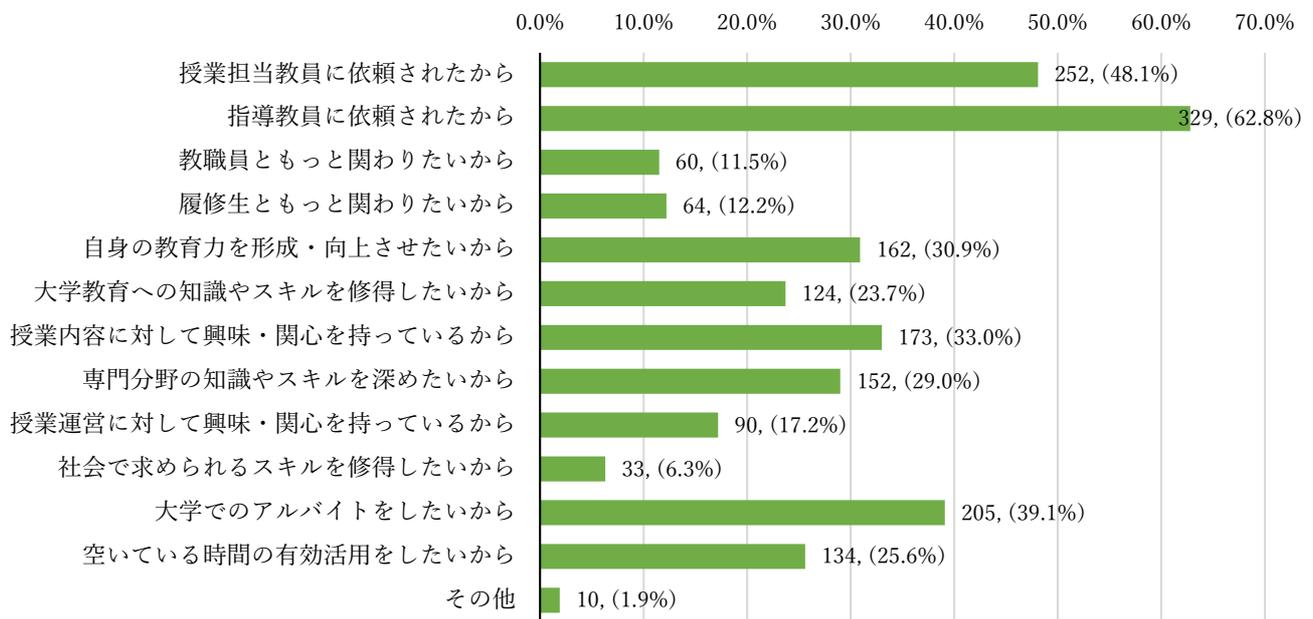


図13-1 TAに従事する動機(春学期, 授業TA)

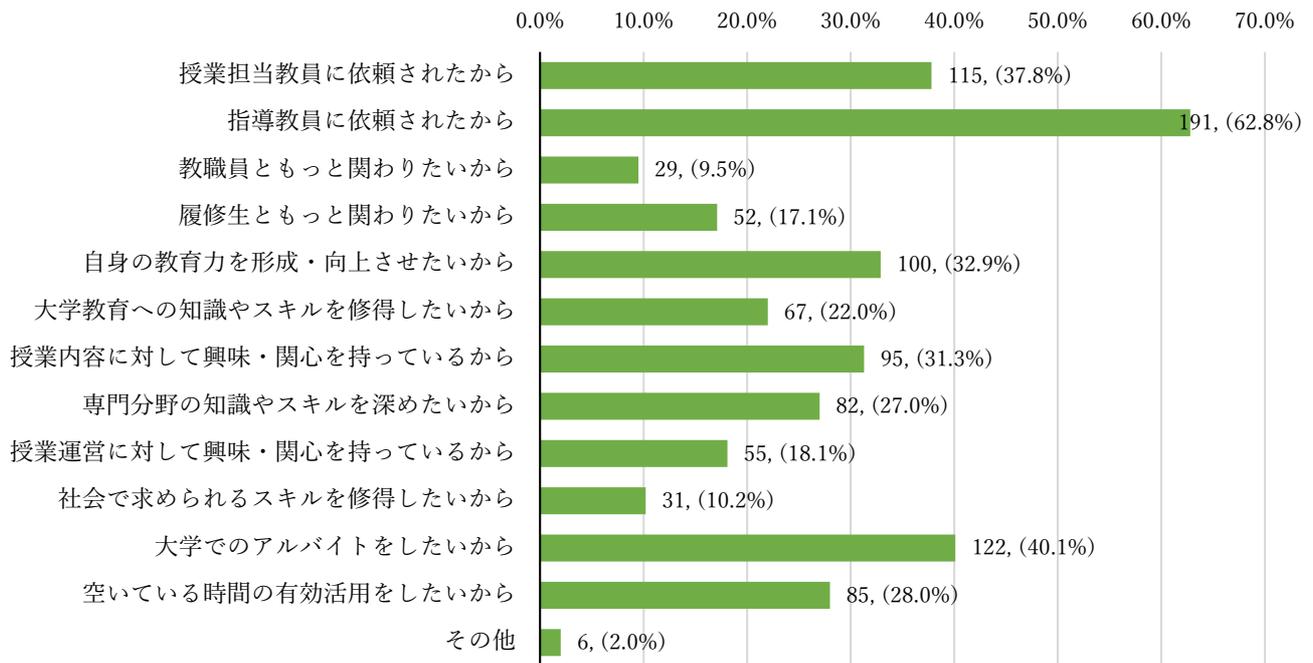


図 13-2 TA に従事する動機（春学期，高度授業 TA）

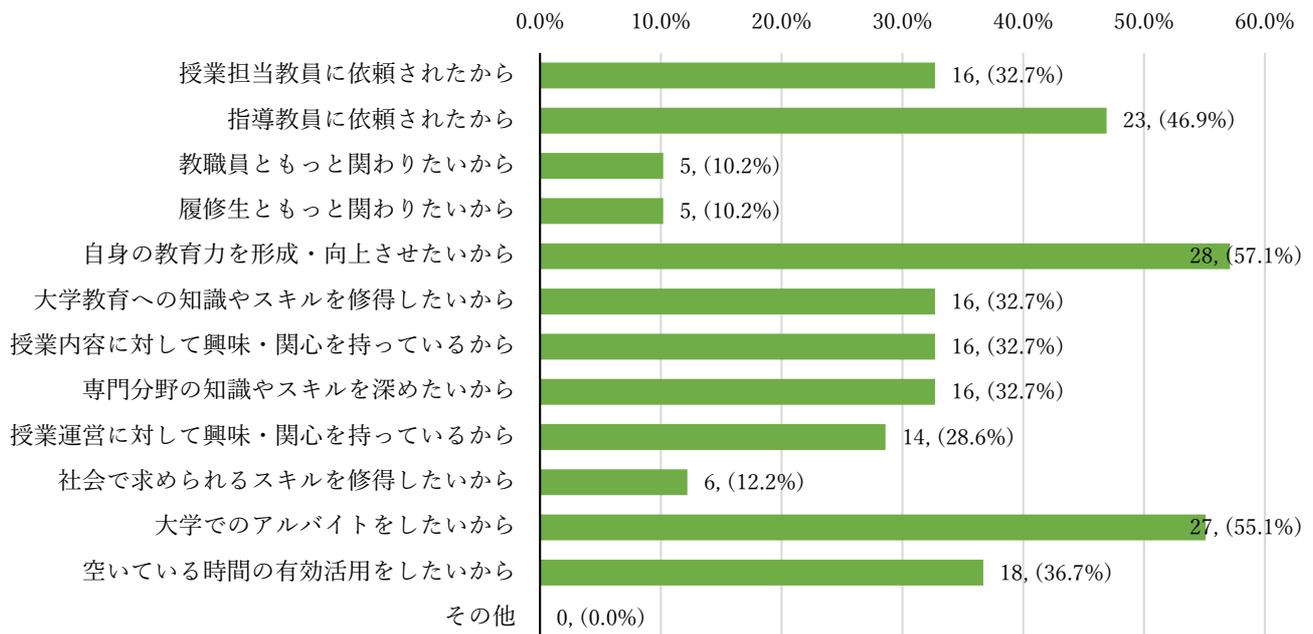


図 13-3 TA に従事する動機（春学期，カリキュラム TA）

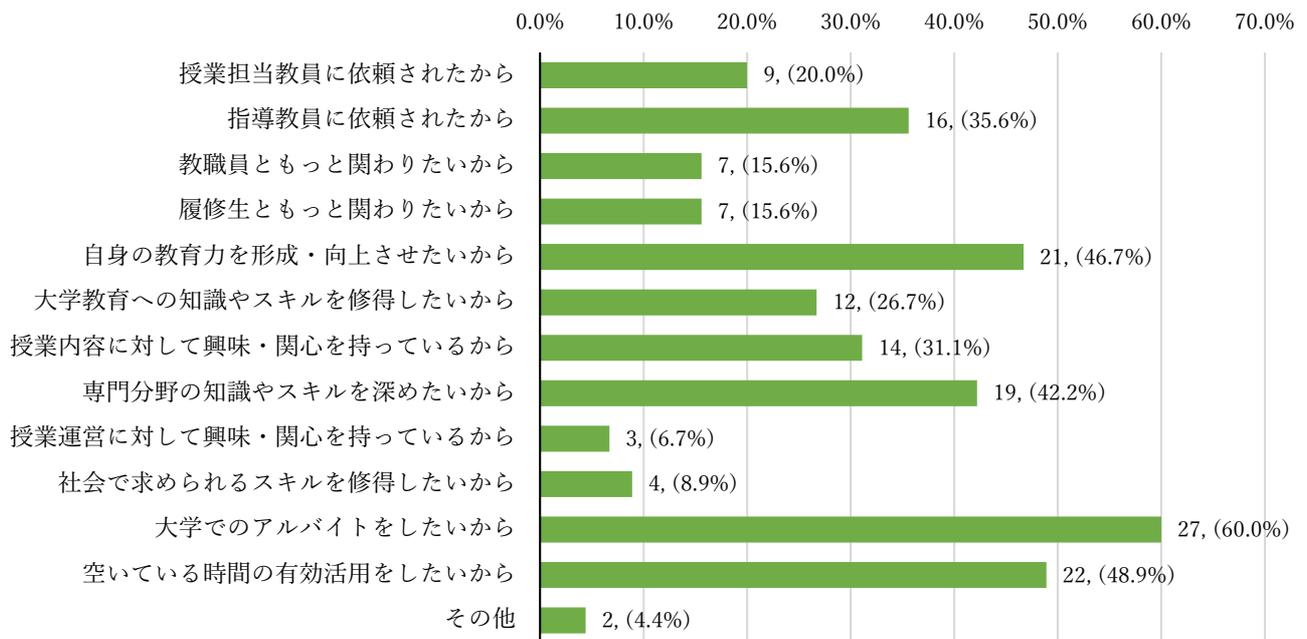


図 13-4 TA に従事する動機（春学期，その他）

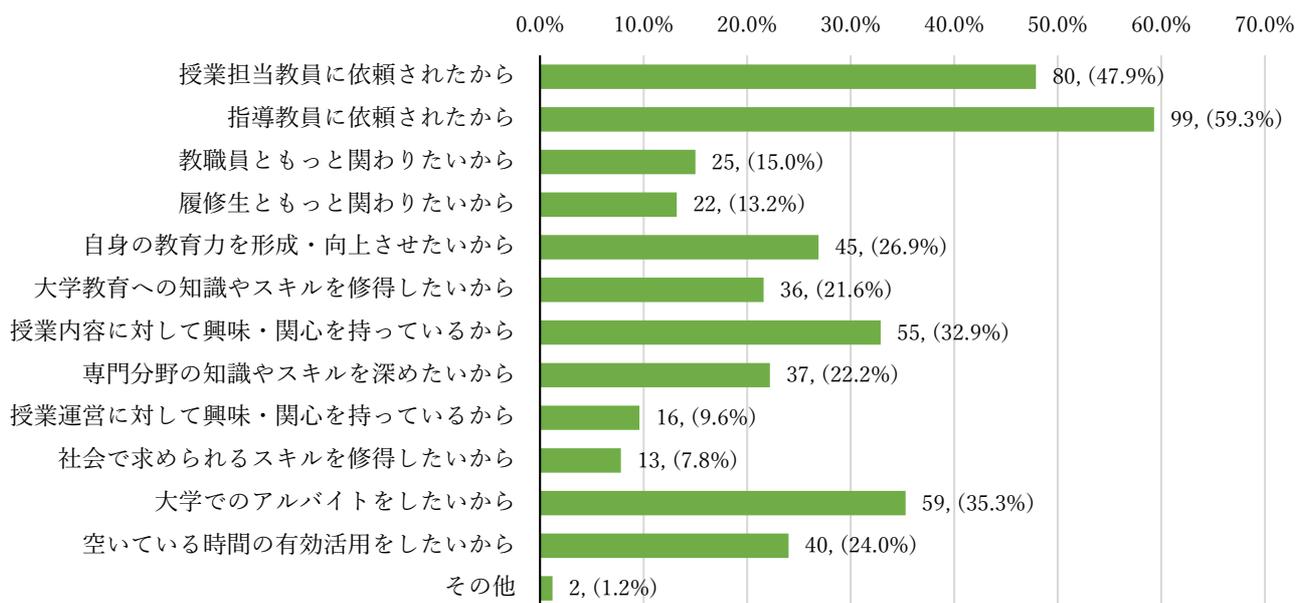


図 13-5 TA に従事する動機（秋学期，授業 TA）

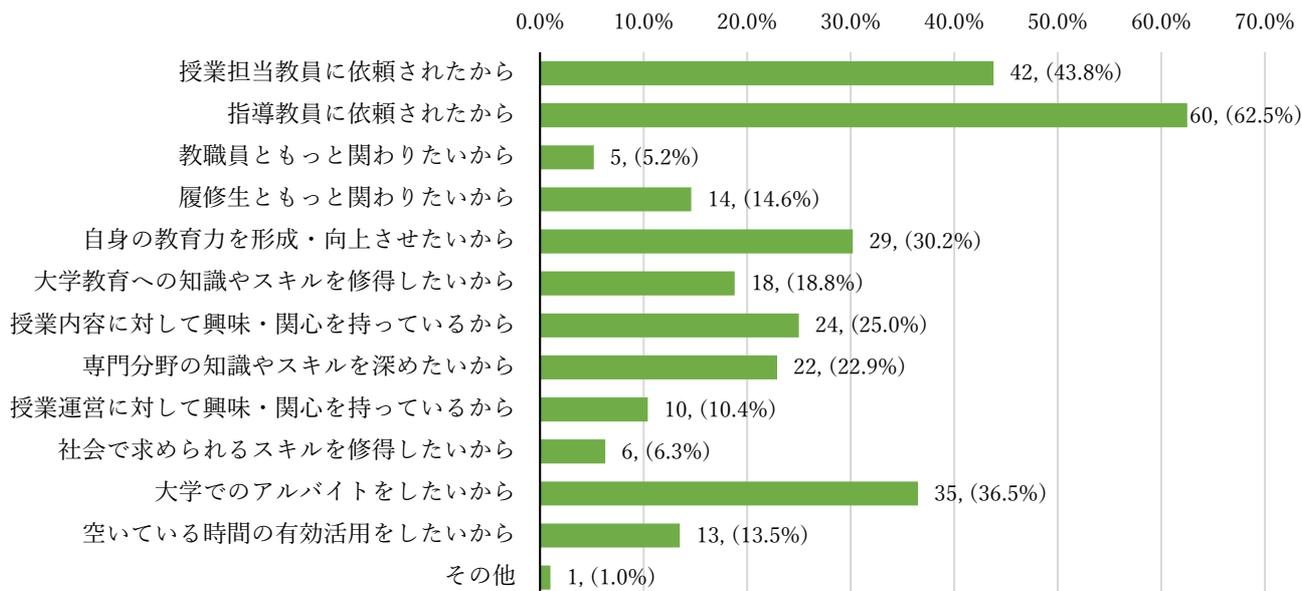


図 13-6 TA に従事する動機（秋学期，高度授業 TA）

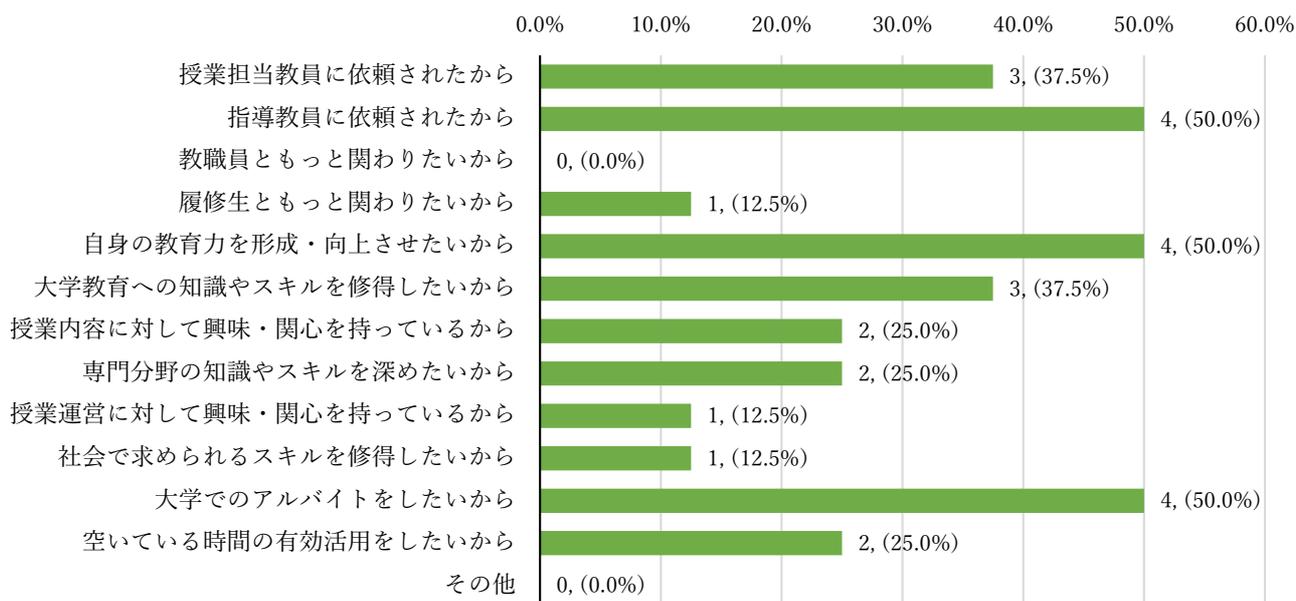


図 13-7 TA に従事する動機（秋学期，カリキュラム TA）

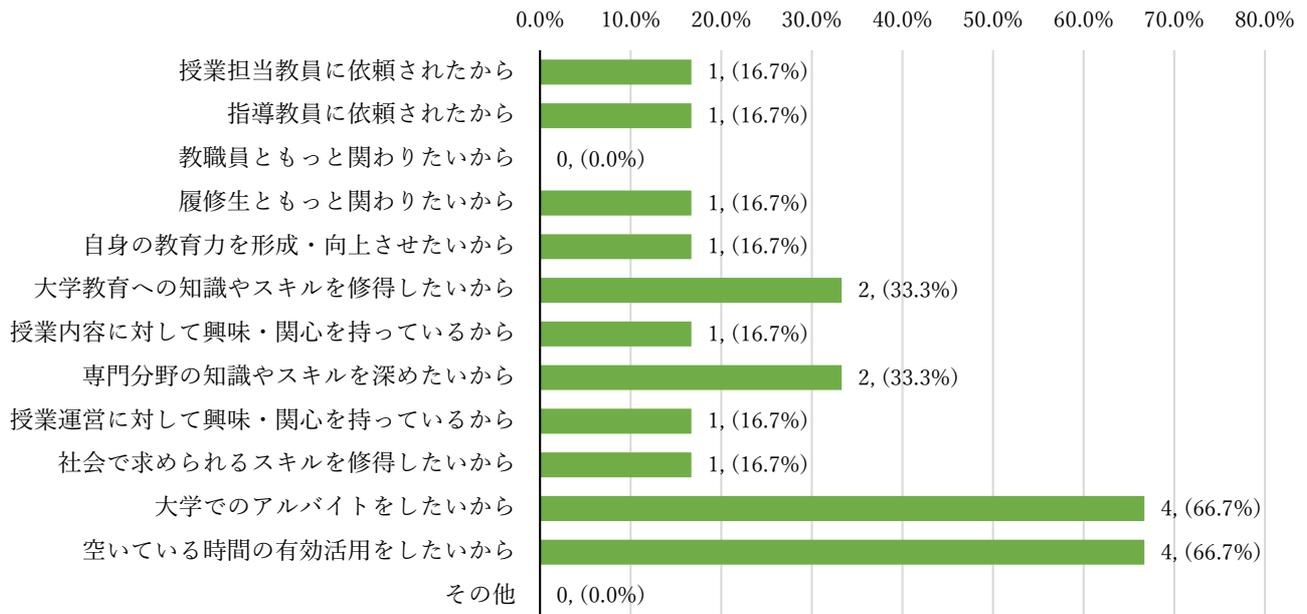


図 13-8 TA に従事する動機（秋学期，その他）

## 13-2. TA 業務に関する負担感

早稲田大学は、TA は時給で雇用されている。理論上、契約通りに教員と TA が業務を行えば、TA の負担にはならないと考えられる。ただし現場では、業務分担がうまくできず、TA が負担を感じる場合がある。また、オンライン授業に変更となったことで、オンライン授業に使う ICT 環境の設定(例 Zoom など)や LMS の維持などの業務が増加している可能性がある。このことを配慮し、本調査では TA 業務に関する負担感の調査を実施した。

まず、TA 業務に関する負担感について、学期ごとに分析した結果を図 13-9 および図 13-10 に示す。なお、以降では「どちらかと言えば、大きかった」、「大きかった」を負担感が大きいと見なす。授業 TA をみると、春学期から秋学期にかけて負担感が大きいと感じている TA の割合はやや減少している。(春学期 45.4%、秋学期 38.4%)。一方、高度授業 TA をみると、秋学期にかけて負担感が大きいと感じている TA の割合はやや増加している(春学期 54.7%、秋学期 66.1%)。

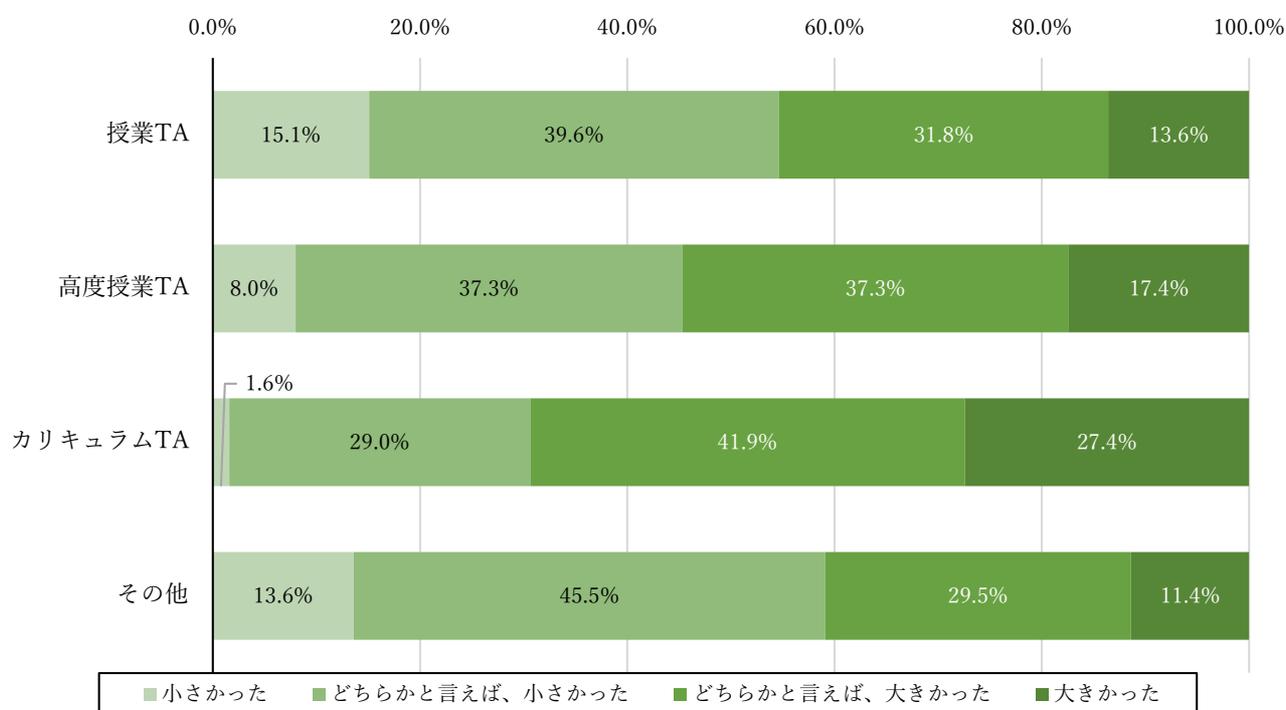


図 13-9 TA 業務に関する負担感 (春学期)

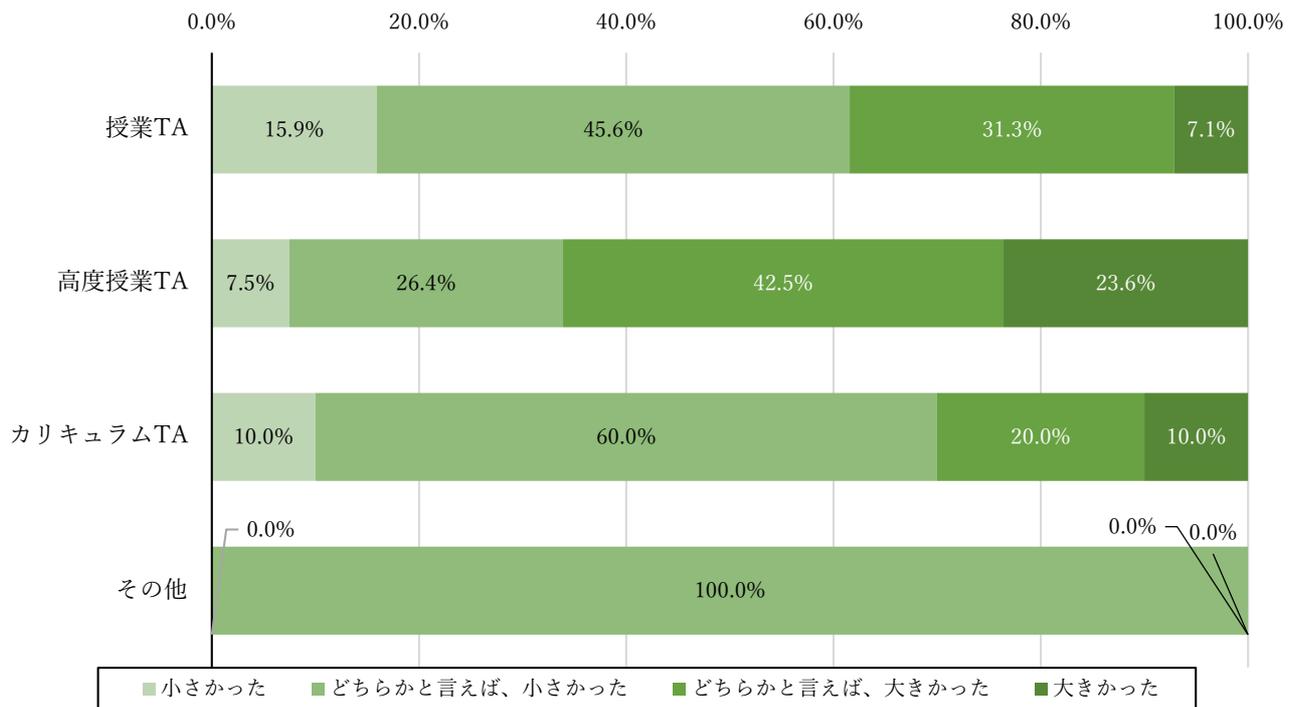


図 13-10 TA 業務に関する負担感（秋学期）

次に、負担感が大きいと感じる理由について学期別に集計した結果を図 13-11 および図 13-12 に示す。負担感が大きいと感じた理由は、春学期および秋学期ともに回答件数が多いものから順に「オンライン授業の移行に伴い、業務量が増えたから」（春学期 56.8%，秋学期 50.4%）、「学生とのコミュニケーションが取りづらいから」（春学期 51.6%，秋学期 48.8%）であった。また、春学期では「オンラインミーティングツール（Zoom や Moodle など）に慣れない」（34.7%）が先述の 2 項目について多かったが、秋学期 15.2%に大きく減少している。

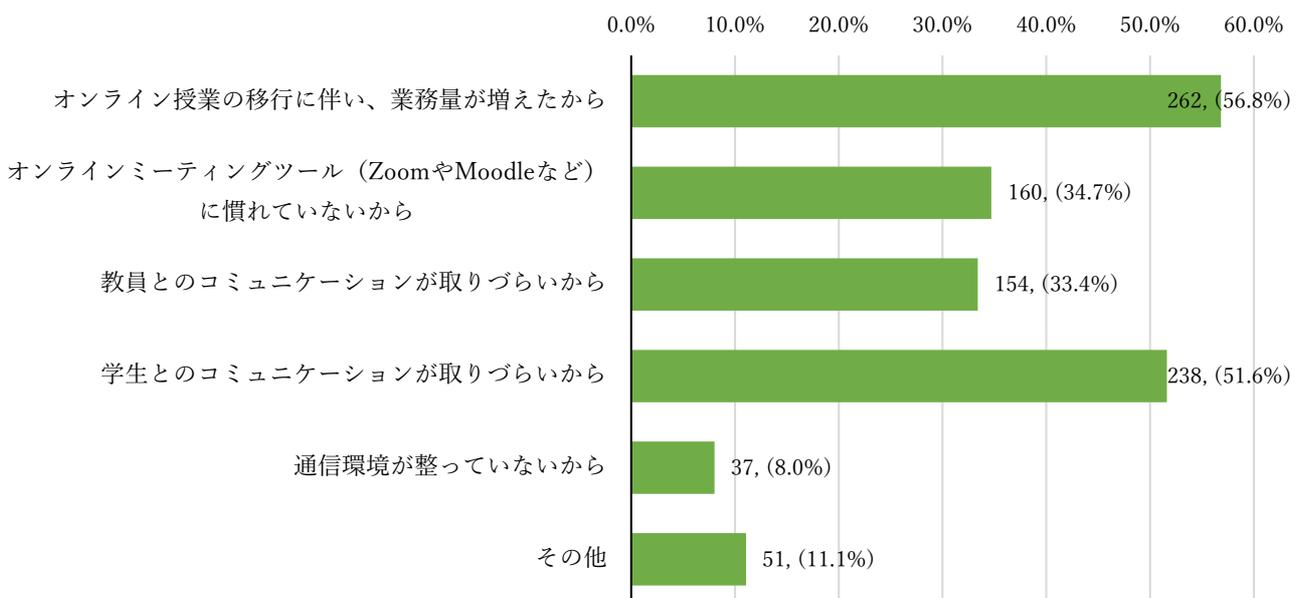


図 13-11 負担感の理由（春学期、全体）

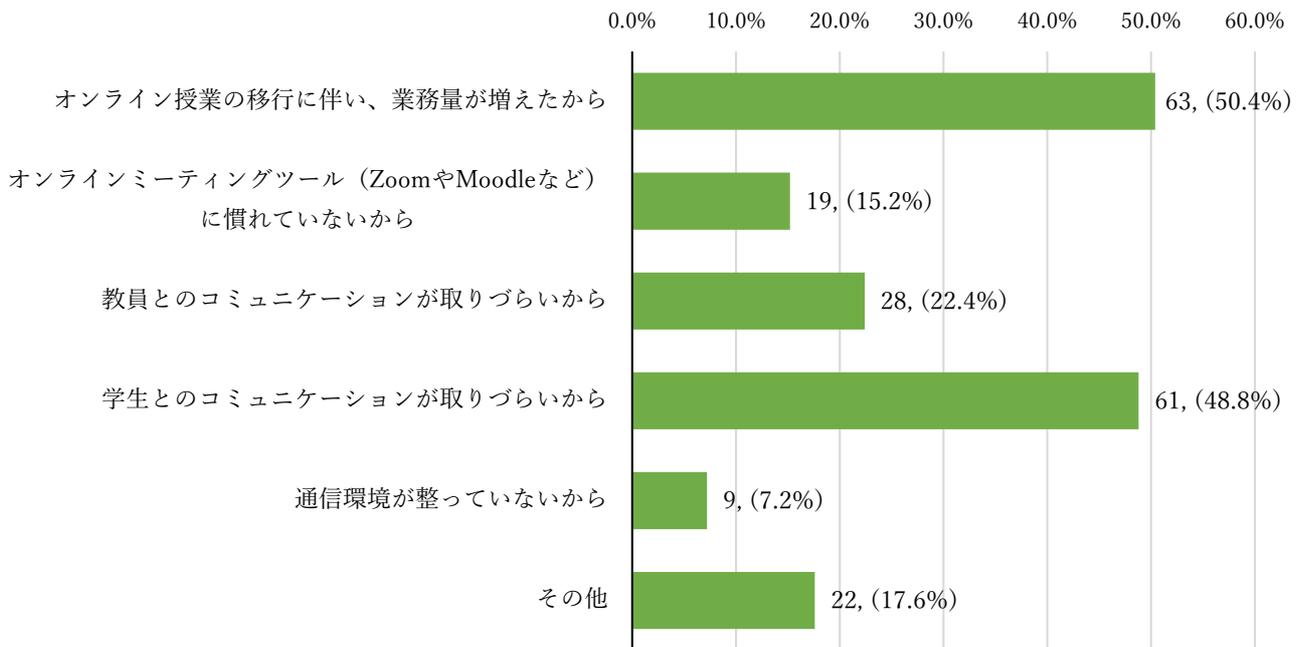


図 13-12 負担感の理由 (秋学期, 全体)

### 13-3. TA 業務を通じた成長

TA 業務に従事することで、TA はどのような成長をしているのかを明らかにするために、TA の成長に関する 11 項目を設定し、5 件法でたずねた。TA 業務を通じた成長感について、分析した結果を図 13-13 から図 13-14 に示す。なお、以降では「まあまあ当てあまる」と「かなり当てはまる」を肯定的な答えとして捉える。

まず、TA 全体の傾向として、春学期と秋学期を比較すると、全ての項目において肯定的な回答をした割合は増加していることがわかる。

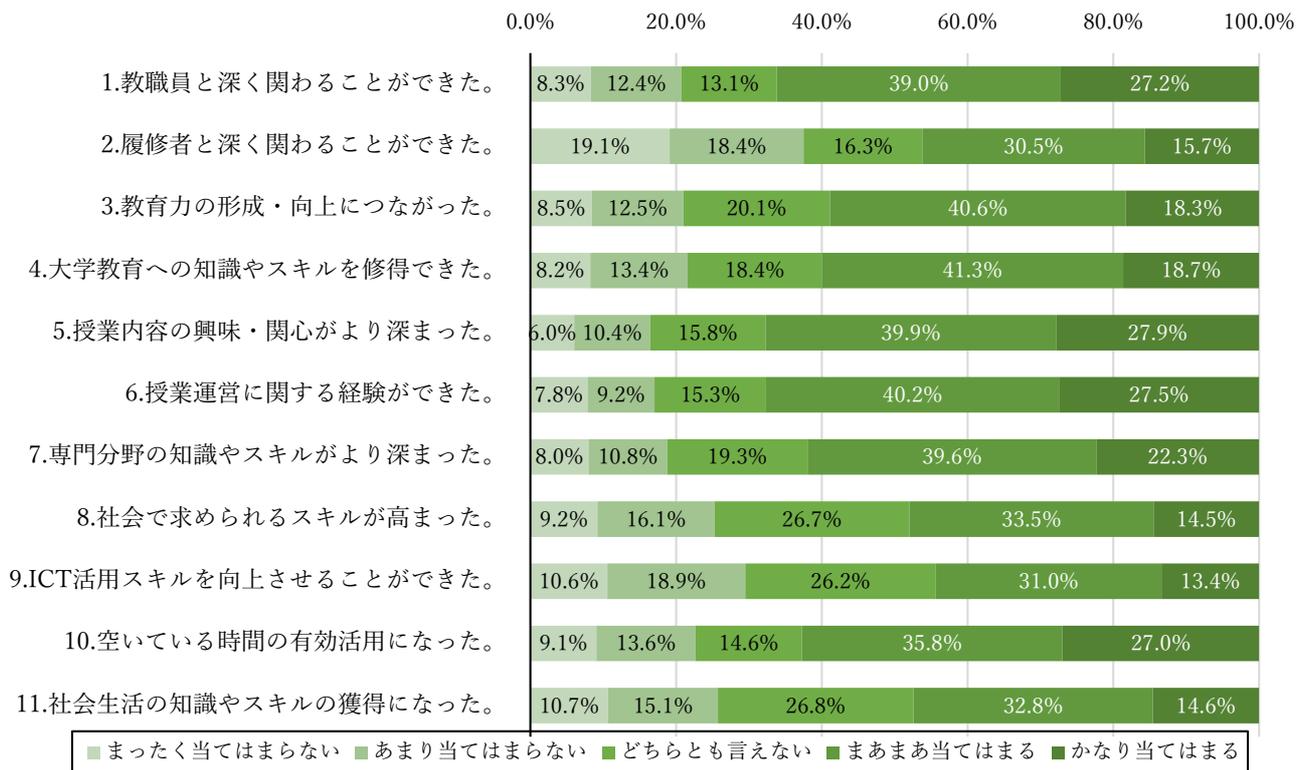


図 13-13 業務を通じた成長感（春学期，TA 全体）

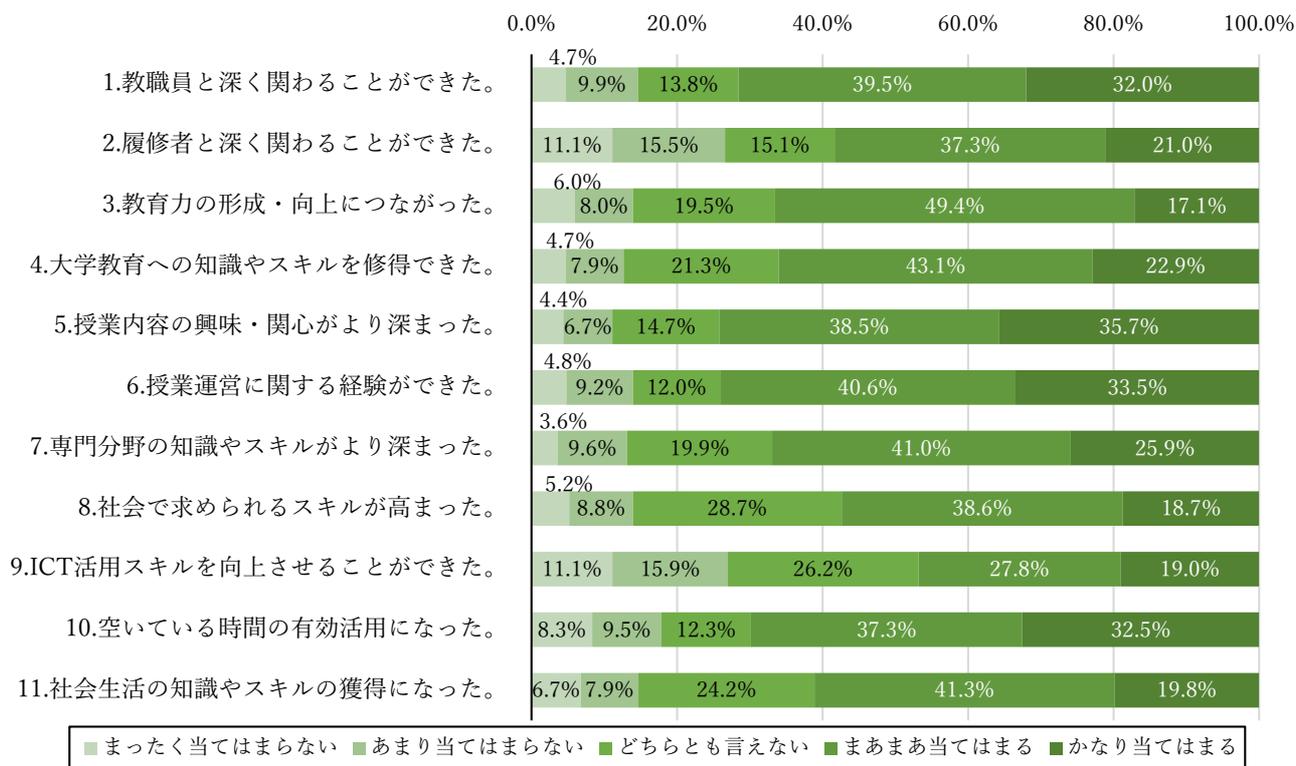


図 13-14 業務を通じた成長感（秋学期，TA 全体）

また、高度授業 TA に着目すると、「履修者と深く関わることができた」（春学期 46.4%，秋学期 74.7%）および「教育力の形成・向上につながった」（春学期 57.4%，秋学期 79.0%）では、春学期から

秋学期にかけて大幅に増加していることが確認できる。このことから、秋学期の高度授業 TA たちは積極的に受講生たちと関わっていると言える。

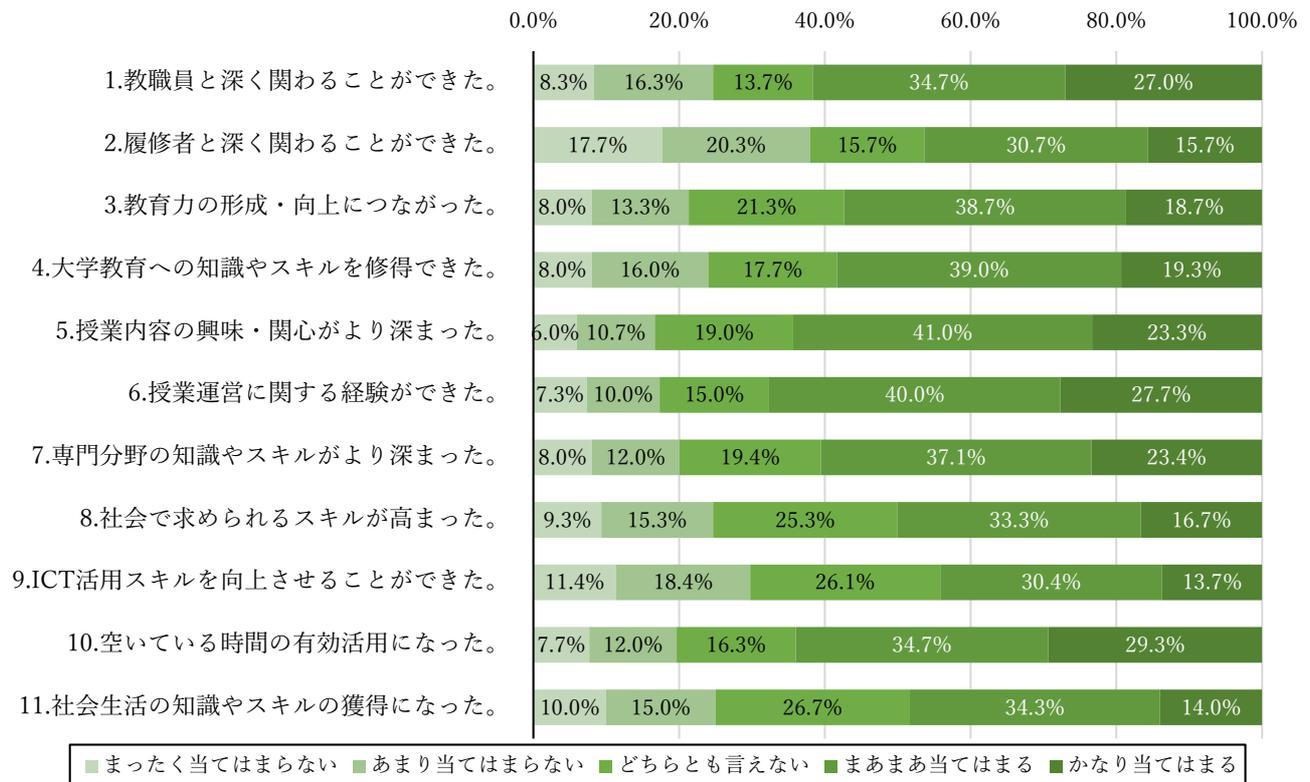


図 13-15 業務を通じた成長感（春学期，高度授業 TA のみ）

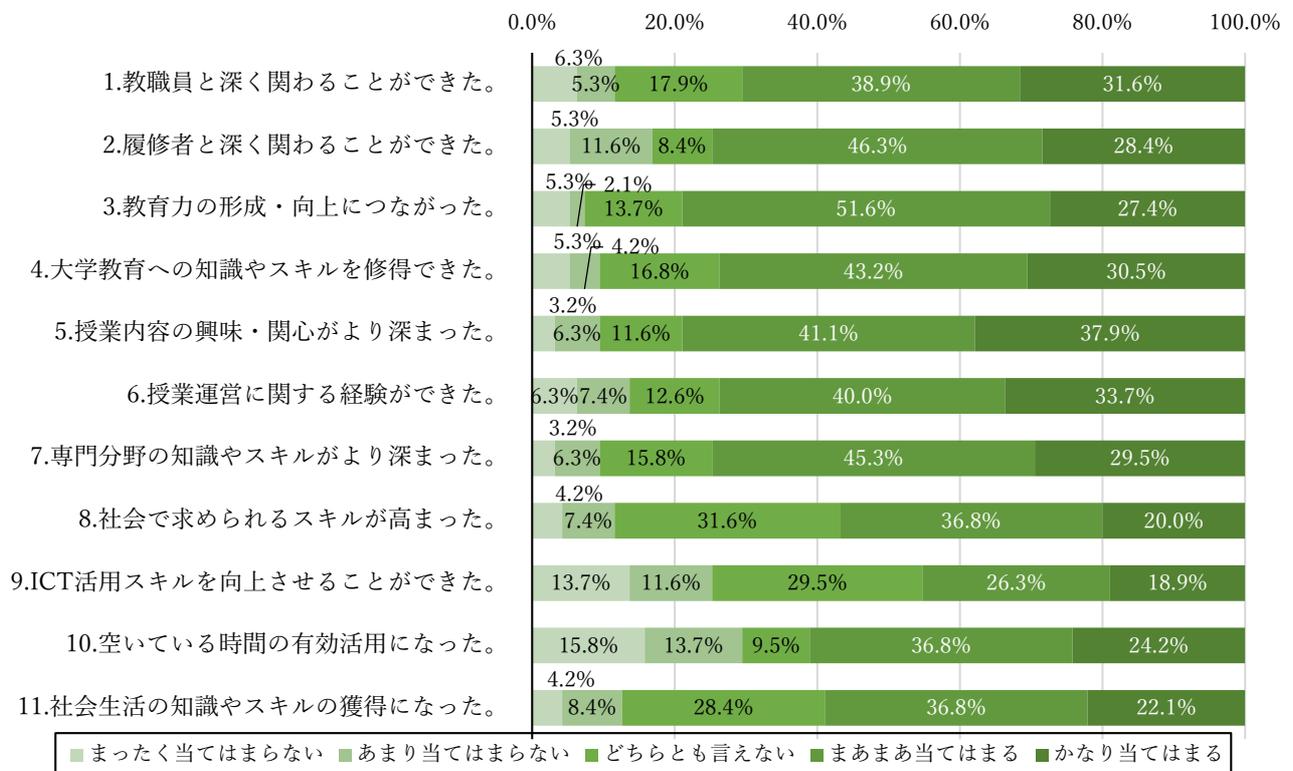


図 13-16 業務を通じた成長感（秋学期，高度授業 TA のみ）

### 13-4. TA 業務における自己評価と今後の展望

TA 業務における自己評価の項目は、TA 自身の取りくみ方（前向きな気持ちで取り組めた、やりがいを感じた、効果的な指導ができたなど）、教員や履修者との関係性（2項目）、TA としての満足度（TA 業務に満足している、機会があれば、また TA を担当したい）に関する 10 項目である。5 件法で調査を行った。

TA 業務における自己評価についての分析結果を図 13-17 から図 13-20 に示す。なお、以降では「まあまあ当てはまる」と「かなり当てはまる」は肯定的な答えとして捉える。

まず、春学期と秋学期の TA 全体の回答を比較すると、全ての項目において秋学期では肯定的に回答している割合が増加している。特に、満足度を表す 2 項目、「自分が担当している TA 業務に満足している」と肯定的に回答した割合は、春学期は 69.3%であり、秋学期は 78.9%であった。同様に、「機会があれば、また TA を担当したい」と肯定的に回答した割合は、春学期は 78.3%であり、秋学期は 79.1%であった。このことから、全般的には、TA は満足していると言える。

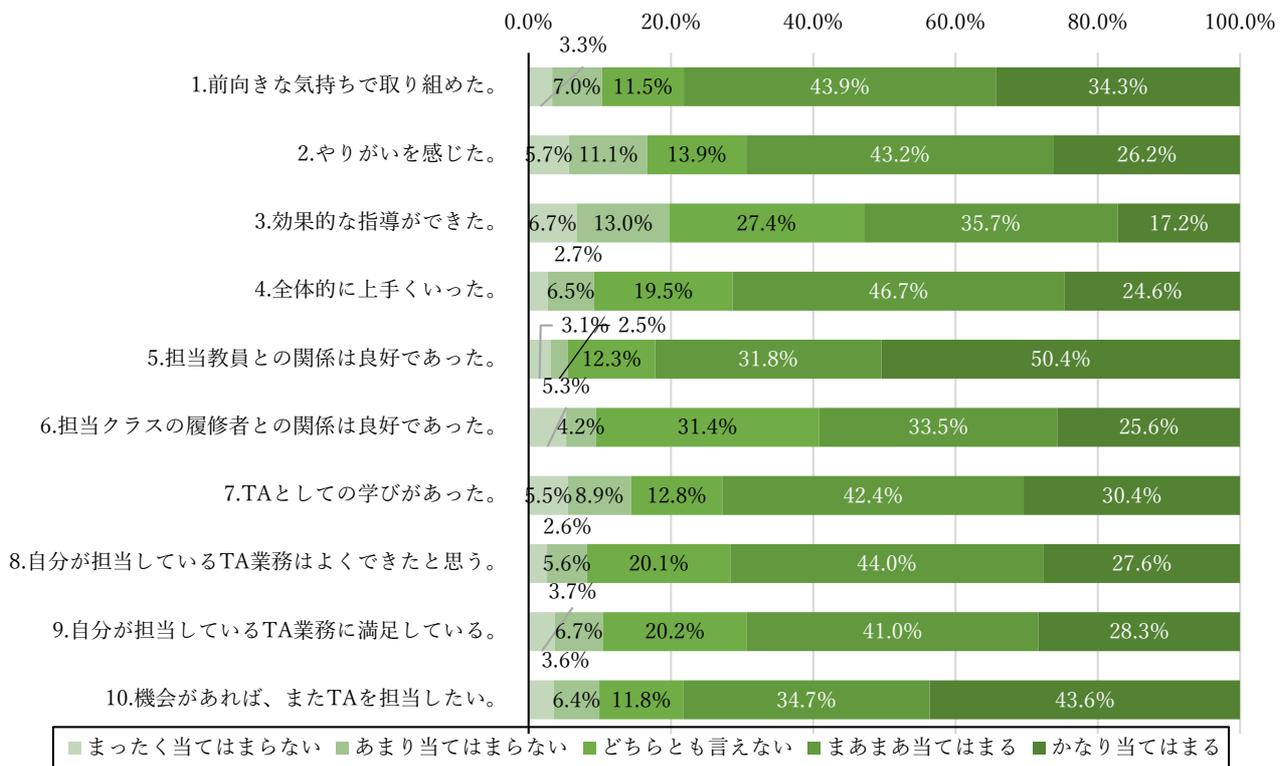


図 13-17 自己評価と今後の展望（春学期，TA 全体）

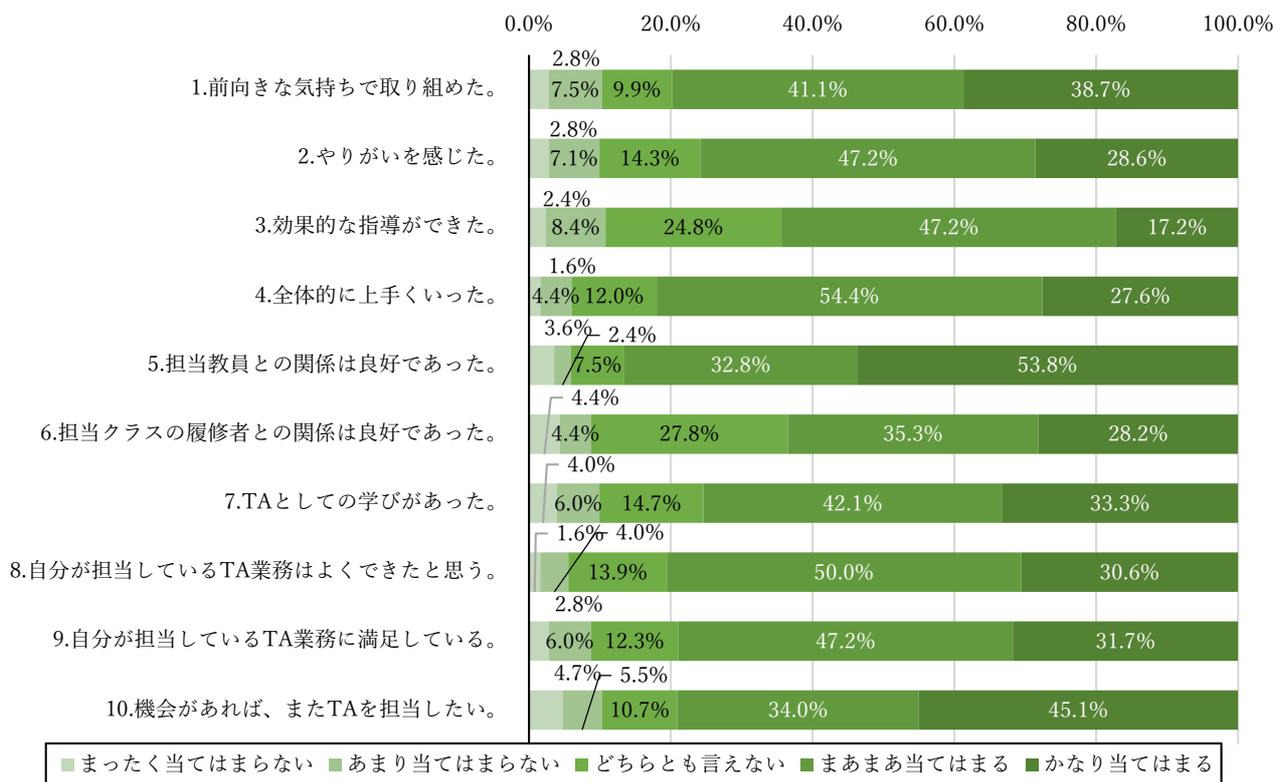


図 13-18 自己評価と今後の展望（秋学期，TA 全体）

次に、高度授業 TA に着目すると、「効果的な指導ができた」（春学期 57.9%，秋学期 75.8%）、「担当クラスの履修者との関係は良好であった」（春学期 59.0%，秋学期 76.8%）であり、春学期から秋学期にかけて大幅に増加していた。この結果から、春学期は急遽オンライン授業に変更となったため学生との関係性構築は困難であったが、秋学期には学生がオンライン授業に慣れるとともに、対面授業が部分的に再開されたことが理由であると考えられる。

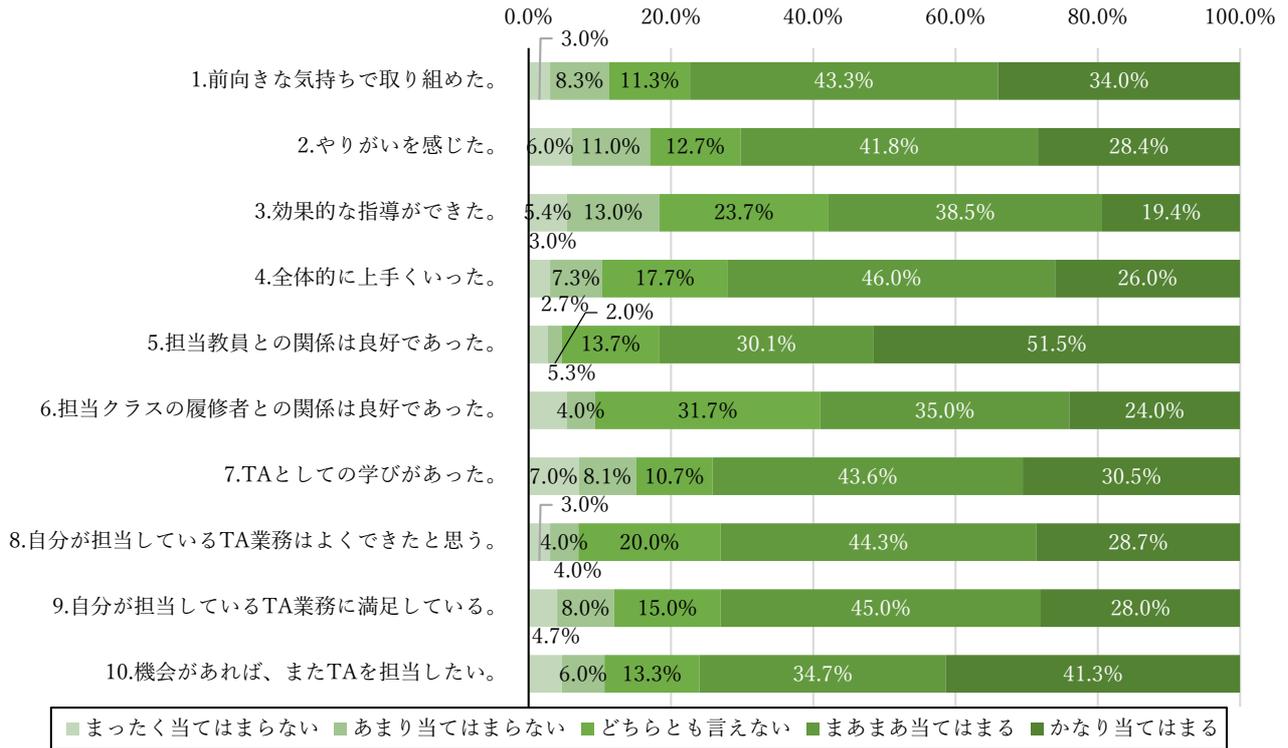


図 13-19 自己評価と今後の展望（春学期，高度授業 TA のみ）

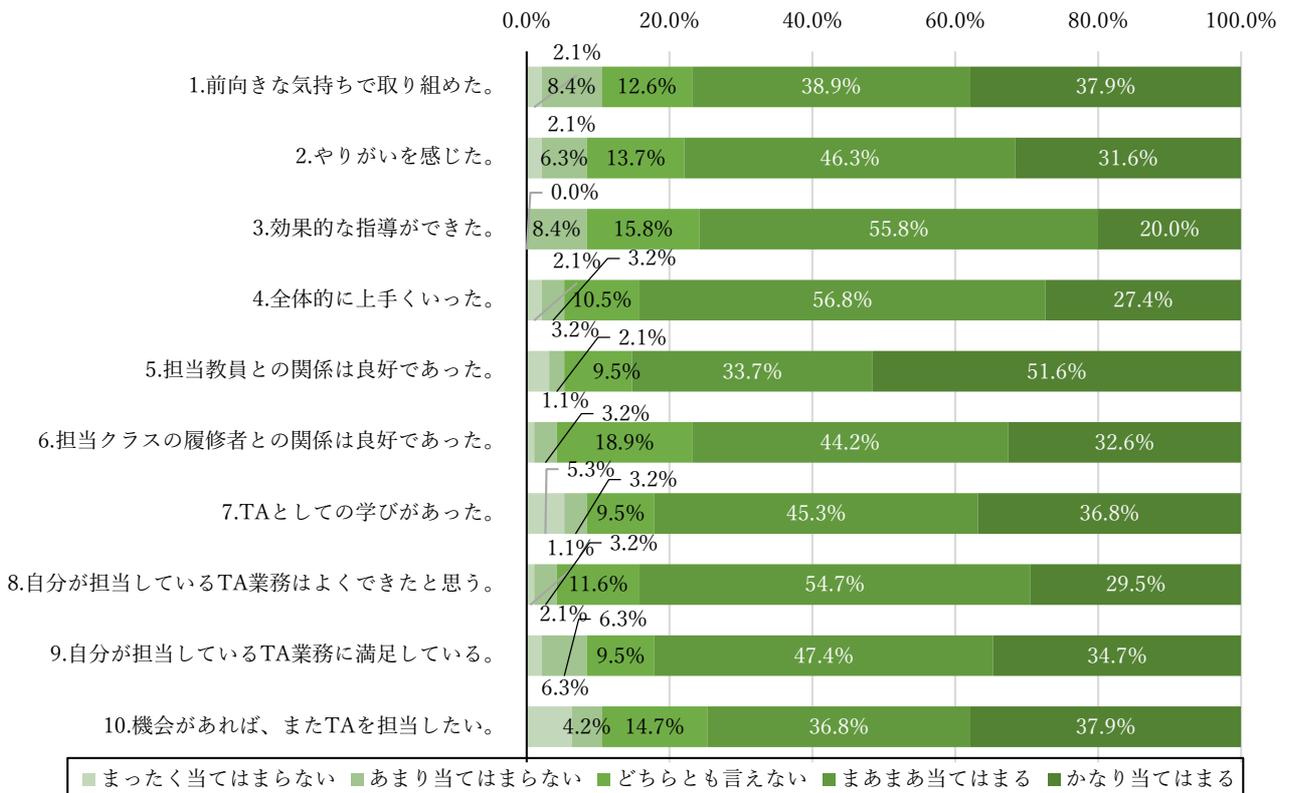


図 13-20 自己評価と今後の展望（秋学期，高度授業 TA のみ）

## 13-5. 小括

- (1) TA に従事する動機について、カリキュラム TA は「自身の教育力を形成・向上させたいから」が最も高い割合であった。これは、主に博士課程の学生が従事しているからだと考えられる。2020年に「大学院設置基準」の一部改正に伴ってプレFDが努力義務化されたことをふまえると、今後は博士過程の学生を対象とするプログラムの構築が必要不可欠だと考えられる。
- (2) TA業務の負担感が大きいと回答したTAの割合は、授業TAは50%未満であったが、高度授業TAは50%以上であった。具体的には、授業TAでは、春学期が45.4%、秋学期が38.4%であった。高度授業TAでは、春学期が54.7%、秋学期が66.1%であった。負担感が大きいと感じた理由は、春学期および秋学期ともに回答件数が多いものから順に「オンライン授業の移行に伴い、業務量が増えたから」、「学生とのコミュニケーションが取りづらいから」であった。こうした問題への対策として、教員へのFD活動において、TAに対する業務依頼を時間内で行うという内容を入れることが考えられる。また、大学としては、今回のような緊急事態に対応するための制度を整えることも必要である。例えば、勤務時間を超過した場合の事後申請への対応があげられる。さらにTAに対しては、勤務時間を超える業務は断る権利があることを予め伝えることも重要であろう。
- (3) TA業務を通じた成長に関して、「授業内容の興味・関心がより深まった」、「授業運営に関する経験ができた」、「教職員と深く関わることができた」は、春学期と秋学期のいずれにおいても高い割合であった。また、秋学期の高度授業TAでは、「履修者と深く関わることができた」、「教育力の形成・向上につながった」も高い割合であった。この結果から、さらにTAたちの成長をサポートするために、体系的育成プログラムの開発が考えられる。

### 引用文献

石井雄隆・山田晃久・森田裕介（2018）早稲田大学における教育・学修支援，姉川恭子・石井雄隆・山田晃久（編著）『大学総合研究センターの今』，早稲田大学出版部，96-129.

## 総括

これまで本報告書では、2020年春学期、秋学期に実施された学生、教員、TAを対象としたアンケートの結果を示してきました。改めてそれぞれのアンケートの結果を見ると、学生においては、有益な授業として、「授業内容や授業の進め方に学生の意見が反映される」、「課題に対するフィードバックがある」、「授業時間内に履修者同士が学び合う」、「履修者の発言が求められる」といった双方向的な学びが重要であることが示されました。この結果からは、従来から推奨されてきた主体的な学びを促す双方向的の授業がオンライン授業であっても重要であることが示唆されます。

一方、教員においては、春学期開始時点では8割近くがオンライン授業を担当した経験がなかったものの、春学期に担当した授業に対する学生の満足度は総じて高い結果となりました。秋学期には担当授業に対する学生の満足度がさらに上昇し、同時に、オンライン授業やハイブリッド型授業を担当したくないと回答した割合も減少するなど、オンライン授業に対するポジティブな意識を読み取ることができるとでしょう。

さらに、TAにおいては、オンライン授業の移行に伴い、業務量の増加や、学生とのコミュニケーションについて課題がありつつも、「機会があれば、またTAを担当したい」との回答は春学期、秋学期とも8割程度となりました。具体的な業務として講義科目では、課題の採点・フィードバック、演習・ゼミでは、グループワークのサポートにおもに従事しており、有益な授業においてはよりTAのサポートが多い結果から、オンライン授業においてもTAの重要性が示唆される結果となりました。

大学総合研究センターでは、2020年度秋学期開始前に春学期のアンケート結果を各学術院に共有し、オンライン授業の改善を目的としてアンケート結果等に基づいた教員向けセミナー等を開催し、教育支援を推進してきました。また、アンケート結果をもとに、ウィズ/ポストコロナ時代における授業指針である「オンライン授業・ハイブリッド授業の検討および運営に関する6箇条」を以下の通り提案しました。

### オンライン授業・ハイブリッド授業の検討および運営に関する6箇条

以下のことについて、改善努力をします。

- ・シラバスへの授業・評価方法の明示
- ・授業形態に応じた適切な教材の提供
- ・効果的なフィードバックの実施
- ・積極的な対話機会の提供
- ・学習目標に応じた計画的な課題のデザイン
- ・様々な学習環境への配慮

2020年度のオンライン授業への移行に伴う様々な取組みは、オンライン授業はもちろん、ハイブリッド型授業の知見や教材として、教員や職員の経験値として大学に蓄積されていきます。大学総合研究センターでは、本報告書の知見を踏まえさらなる教育改善に向けた支援を展開してまいります。

2020年度 オンライン授業アンケート 報告書

2021年5月

早稲田大学 大学総合研究センター

〒169-8050 東京都新宿区西早稲田1-6-1 (7号館4F)